

オートマタ(全自動妊娠 出産愛玩人形)

カズゆき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

PS4のニアオートマタ。絶対開発者はこういうの仕込んでるだろという話をちよっと薄い本仕様にしました

目次

運命の出会い。変わる未来	1
順番待ち・・・？	7
ただ、ただ想う	14
臀部の魔力	22
レベルアップ（意味深	31
王と、初産と、子供	37
一家団欒	47
一家団欒（2B家）前編	62
一家団欒（2B家）後編	73
男の価値、オスの価値	95
ちよつと休憩。少し前進。大きな変化	100
主人公参戦！（仮	108
初の空中戦！	115
ココロ ツナガル	125
心の重さ。想いの重さ。愛の強さ	137
『人形』の価値	145
垣間見える世界	158
『決着』	166
大規模侵攻作戦	180
心、命、想	189
剣と鞘	210
変わりゆく形	223
『初』任務	227

交錯する想いと運命	239
進むため、重なる決意	250
真実のカケラ	262
始まりが終わりで、終わりが始まりで	274
エピソード前編	291
エピソード後編	306
最終話「ヨルハ・・・部隊」	319

運命の出会い。変わる未来

エイリアンにより地球侵略が始まり、数千年の時間が流れた。人は月に上り、アンドロイドを地球に送り込み奪還を試みるも、エイリアンが侵略のため地球に放った機械生命体によって、それも叶わぬ夢となっていた。

「どこに行っても機械生命体ばかり……か」

そんな中、廃墟に不釣り合いな黒いドレスを纏った少女が呟く。ショートカットの銀髪、均整の取れた体に美しくスラリと伸びた足。

何かのモデルと言われても違和感がない少女ではあるが、彼女の周りに浮遊している武器、そして完全に視界を塞いでいるアイマスクのような出立ちが、また別の意味で異様だった。

私たちは月にいるアンドロイド部隊。地球に派遣されたヨルハ部隊の戦闘用アンドロイド。

本体は月に置いて、そのデータと予備ボディを地球に送り、エイリアンが送り込んだ機械生命体の殲滅と調査を目的とされている。

降下中、数多くの仲間を失いつつ、第一目標の超大型兵器の破壊に成功。再度降下後、地球のレジスタンス部隊と合流し、調査を続けている。

パスカルという敵対を表さない機械生命体に出会い、その直後別の巨大生命体との戦闘。飛行ユニットを駆使して辛くも撃破するとその爆発により、地下の空洞が発見される。そしてその奥から今まで見つからなかったエイリアンの反応が出てきた。ついに、人類最大の敵が発見されたのである。

「これは死体……？」

そこにあつたのは、カプセルのようなものに入ったエイリアンの死体。以前遭遇した私たちと同じ形になった機械生命体、自身をアダムと名乗るものが再度現れ、自分たちが数百年前に滅ぼしたことを告げた。

彼らを退け、エイリアンはすでに死滅。機械生命体が本当の敵となり、これらを報告しようとするの基地を出ようとすると、奥にあつたエイリアンの母船からかすかな生命反応を感知。中を探索していると、一つのカプセルを発見した。

大きさは私たちが入れるぐらいの大きさ。ターミナルより丸く小さいものではあるが、かろうじて機能しているようだ。

「奴らはこれを見逃したんでしようか？」

「さあ……。反応は微弱だから、何か小動物と思ったとか？」

「ありえますね……」

人間を研究したいと言っていた彼らにとって、小さな反応は気にする価値もなかったのだろう。

開ける方法はわからないが、周りを調べると小さなボタンがあった。9Sにスキャンを頼むと特に爆発物の反応はないため私は意を決してボタンを押す。

プシューと空気が抜ける音がして、蓋が空いていく。私も9Sも武器を構えて警戒をする。ゆっくり空いたカプセルの中には、私たちと同じ形をした生命体がいた。それは……

「え……人間？ ……？」

そこにいたのは月にいるはずの人類だった。

エイリアンとの遭遇。そういえば聞こえはいいが実際は誘拐だった。

拘束され、色々な機械につながれ、エイリアンは人間はどういったものか調べている様子でもあった。

拐われてどのくらい経ったかわからないが、エイリアンは俺を調べるのをやめて、俺が横になると丁度のサイズの容器に入れた。蓋が閉まると空気が抜けるような音がして、俺の意識は途絶えた。

また、空気の音がする。ゆっくりと何かが空いていく音も聞こえる。多分俺は寝てたんだと思う。体が言うことを聞かないが朝の寝起きの感覚に近い感じがする。久しぶりに明るい光が目に入る。ゆっくり目を開けることが出来ると、そこには黒いドレスがよく似合う、アイマスクをした美少女がいた。

※人間を発見、接触したことにより凍結しているプログラムが実行されます※

※速やかにターミナルへ入り、バンカーへのアップロードを推奨します※

※接触対象、人類、男。その為、男性型アンドロイドの感情を一切凍結※

※女性型アンドロイドの感情に従属を根底に愛情のプログラムを起動。これにより

人類へ一切の危害を加えないよう発動。また、人類以外の異性への興味を一切消失※

※女性型アンドロイドの繁殖機能を起動。人工子宮、人工卵子の精製を開始※

※……人類の数が絶望的のため、内部構造の改造を開始※

※膣、人工子宮以外の個所に子宮の生成を開始※

※人類呼称、肛門内部、腸内を子宮に改造。これにより繁殖の効率化を図ります※

※至急、これらの情報のアップロードを推奨いたします※

私の中に、何か電流がはしったような心地いい感触がした。温かい何かがうずくような。

目の前の素敵な人は、何かしやべろうとしているのか動けない様子だ。このままではいけないと思い、9Sへ命令する。

「すぐに健康状態のスキャン。異常の確認を」

「了解。スキャン開始シマス」

何か一瞬違和感を覚えたが、今はそんな事より目の前のこの人のことだ。何か手を出すより、9Sのスキャン結果を待った方がいい。でも、もどかしい。すぐにでも抱きしめてレジスタンスのアジトへ連れて帰りたい。そんな衝動を我慢しつつ結果を待つ。

「結果、長期保存ノタメニヨル衰弱ト予想。命ニ別状ハ見ラレナイガ、歩行ハ困難」

「わかった、すぐにアジトへ連れていく」

「同意」

9Sに指示し、私におぶさるよう担がせる。本当は9Sに頼むのがいいのだろうか、なぜか自分で運びたいと強く思った。背中に感じる温かい体温、私たちにない心臓の鼓動。ずっと求めていたと思える温かさを感じたとき、これが人間の言う幸福感だと強く思えた。

さつき飛び降りたところをどうやって登ろうかと考えていると、ジャッカスがいた。

アンドロイド用の転送装置を設置に来ていたとのことだが、人間のこの方は不可能。梯子も設置してくれていたものでありがたく使わせていたたく。

アジトに戻り、大至急バンカーへ連絡、人類発見の報告はバンカーでも大騒ぎになり、私は一度バンカーへ戻るため『ターミナルに入ってアップロードを行った』

順番待ち・・・？

……

寝ていた。なんかおかしいけど、それが久しぶりで普通なのに嬉しかった。ベッドに寝ていた俺。ゆっくり上半身を起こすと、急に誰かに抱き着かれた

「ああ！ マスター！ お目覚めになられたのですね！」

ん？ ん？

黒いスカートの服装から、女性と思える。そんな子にマスターなんて言われるほど年をとつてるとも思わないし、俺はどっかのカフェを経営とかもしていない

しかし、女の子特有の柔らかさを感じてつい抱きしめかえしてしまった

「マスターの抱擁……嬉しいです……」

猫が甘えてくる。そんな表現が合うように、ショートカットの女の子が、顔を俺の体にすりすりとかすりつけてくる

「マスター。まだ不調なところ申し訳ありませんが。私の言葉は届いてますか？」

上目遣いで……うん？ この子アイマスクを付けてる。これでこっちが見えるのか？

「? ああ。この装備の事ですね。詳しくはちゃんと説明いたしますが、今はマスターの体調の方が優先です。日本語で伝わってますか?」

「あ、ああ。ちゃん……と聞こえ……る」

口がうまく回らない。照れているとかそう言うのではなく、固いのだ

「やはり100年単位で眠っていた後遺症ですね……ゆっくりリハビリいたしましよ
う」

「ひやく……!?!」

単位に聞き間違いをしたのかと驚く。目隠しをした少女は、頭をすりすりこちらにこすりながら説明していく

俺がエイリアンにさらわれたのは、夢でもなんでもなく現実で起こったこと

その後、侵略に耐えられず月へ人類は逃げた事

俺がとらわれていたエイリアンの船は、数百年前に自ら送り出した機械生命体によって滅ぼされていたこと。その事から俺が数百年眠っていたと仮定されるとのこと

「私の機体名は『2B』月面に組織を置くアンドロイド部隊の、戦闘アンドロイドです」

「つーびー? さん?」

「はい。お気軽に2Bと呼び捨てにしてください。マスター」

アンドロイドと言われると、俺が思い浮かぶのはそれこそ映画やSFの中の話だ。

人間の女の子となんら変わりのないのは、発明されてないはずだ。

「マスターが色々困惑されるのも当然です。まずはお休みいただいて、体が動くようにリハビリいたしましょう」

「ああ。ありが、とう」

「いえ。なんでも私にお申し付けください」

顔は隠れているが、口の形から笑顔なのはわかる。きつと顔は眩しいぐらいの笑顔なんだろうなーと想像していると

「ああ。そういうえば人間様は、顔が見えないと不安になると文献で見た覚えがあります。私たちアンドロイドは感情を表すのを禁止されていたので、表情を隠していました。マスター相手にはかえって失礼でしたね」

そう言って彼女はアイマスクと思える顔に巻いているものを外した。その顔は想像した通りの美少女だった

入院患者ってこんな感じなのかなーと漠然にとらえている。

2Bは任務もあつてずっと一緒ではないが、数日部屋を空けて、帰ってきては頭をこすりつけて甘える

そんなことを繰り返している。デボルとポボルというアンドロイドが合流すると、彼

女たちは治療をメインとしたアンドロイドのため付きっ切りで見てくれた。

1か月もすれば、普通に歩行できるようになり、2Bの護衛付きならこのアジト？ から出ることもできるようになった。そんなある日……

「マスター。数日中に私たちの司令官。コマンダーが地球降下を試みます」

「司令官というと……月にいるのに？」

「はい。ただ本体はそのまま仮の体だけ送るといことになります……」

「大丈夫なの？ それ？」

「わかりません……」

2Bはあの日からアイマスクを付けていない。アンドロイドというから、てつきり無表情かと思いきやそんなことなくころころと表情が変わる。ただ、今回はそのせいで彼女の表情が困難であることを語っていた

「ですが、今回は降下のみのため、いくつかダミーを送るそうです。おそらくは大丈夫かと……」

「うん……で、そのコマンダー？ さん司令官がなぜ地球に？」

「はい。マスターとの子作り任務のためです」

「……はい？」

今、なんか聞き捨てならない言葉があつた気がしますが？

「出来れば、お世話させていただいている私や、デボルやポルも立候補しています。まずは司令官がと強く希望されて……一人二人、私が産んでおきたかったです……」

えー……話が、頭が追い付いてきません。そもそも彼女たちはアンドロイドであつて、人間との交配は可能なの？ などちよつと混乱している

「とにかく、司令官は友好的な機械生命体のパスカルの村の付近に着陸する予定です。そのお迎えとこちらにお連れする任務でまた少し離れます……」

うるうるとした瞳でこちらを見つめてくる2B。本当にアンドロイドなのか？ と何度も思うが、それを聞いてなければ普通に可愛い女の子にしか見えない。頭を撫でると嬉しそうにその手に頭を傾ける

「いつてらっしやい」

戦えない俺にはそういうしかなかったが、2Bはうつとりした表情で撫でる手に身を任せていた

数日後、バンカーからの通信が入り2Bが護衛のために出かける。そして出かけた翌日、2Bは一人の綺麗な女性を連れてきた

「始めましてマスター殿。私は月面に拠点を置くアンドロイド部隊の司令官、通称コマンダーです。どうぞお好きにお呼びください。一応固体名でホワイトともあります」

しやなりしやなりと、優雅にまるで貴婦人のような動きでお辞儀する彼女に見惚れて

しまった

「あ……はい。えーと……ホワイトさ『ホワイトでかまいません』ん……」

2Bといい他のアンドロイドも、なぜか俺を目上の存在として見てくれる。

「マスター殿、現在の体調はいかがでしよう？」

「あ、はい。まだ激しい運動はできませんが、通常の行動には支障ない程度ではあります」

「では、生殖行動は可能でしょうか？」

「……はい？」

「あーえつと……具体的に申し上げますと……その……おチンポは勃起して、射精は行えますか？」

具体的過ぎる……なんでドストレートで答えにくいことを聞いてくるんだこの人は？

「え、えーつと……」

答えあぐねていると2Bと二人の看護アンドロイドは答える

「マスターは朝勃ちをしていることから、生殖器に問題はないと思われます」

ええ……そこ見られてるの……

「だねー私たちの診察でもたまたまに勃起してるもんねー」

「デボル。あんまりいうと、男の人は恥ずかしがるって本で見た」

すでにいろんな意味で公開処刑ですが？

「であれば問題はなさそうですね。2 B、および現地アンドロイドに指示をいたします。今宵はマスター殿との子作りのためこの部屋を使います。種付け中は無防備になると文献にありましたので、この部屋の護衛と脅威が発生した場合の排除、お願いします」

「……2 B、しづしづ了承いたします」

「私たちも順番待ちで了承いたします」

こうして、司令官ことホワイトさんとの子作りが、俺の意見ガン無視できまりました

ただ、ただ想う

2Bと双子アンドロイドが出て行き、ホワイトさんと二人きりになる。2Bは可愛い系の女の子だったが、ホワイトさんは綺麗系の女性。そして胸が大きい・・・

「ふふ。人間の男性は大きい胸が好きと記録にありました。バンカーにある本体より大きくしてしまったため、少々歩きにくいですが・・・。」

おっぱいの下で腕を組み、その腕で胸を上下に揺らす。見事な揺れ具合に視線だけじゃ無く頭も動いてしまう。

「うふふ・・・この身に受ける視線・・・癖になりそうですわ」

いかんいかん。初対面の女性にこの視線はいかんな・・・もう少しだけ見たら本題に入ろう

「あ、あの任務という事でしたが・・・？」

「はい。マスター殿には、我々アンドロイドと生殖行為を行なっていたいただき、人類を増やすお仕事をお願いいたします」

「ア、ハイ」

聞き間違いじゃ無かったのね・・・2Bも何人か産みたいと言ってたし・・・

「ぐ、具体的にはどのようにな？」

相手はアンドロイド。見た目は普通の女性に見えても、エイリアンと同じように俺を機械につなげたりして、射精する機械みたいにするかもしれない。

「具体的にと申しますと？」

「あー．．．その、人工受精と言うか、精子の提供だけと言うか．．．」

「おかしな方ですね。生殖行為、セックス、交尾、種付け。マスター殿に行なっていただくのはこれらです」

「つ、つまり、その、今からホワイトと．．．セックスを？」

「はい」

「．．．」

「そういえばセックスは性別と言う意味もありましたね。伝わりにくいようであれば、種付けもしくは交尾と呼称しましょう」

美味しすぎる．．．目の前でゆさゆさ揺れる巨乳に目がいく。確かに、今の俺の周りには人間は誰一人いない。一見、人間に見える存在はいるが、全員アンドロイドだ。

「私達アンドロイドは人の為に作られました。大変な事だとは承知しておりますが、どうか信じてくださいませ」

そう言って、ベッドに腰掛ける俺の目の前で、三つ指ついてホワイトが土下座をする。

しかし、ハリのいいお尻がツンと上がってエロく見える

「わ、わかりました。顔を上げてください」

「ありがとうございます」

顔を上げたホワイトがそのまま近づき、俺の太ももに頭乗せる。必然的におっぱいがすねに当たり体に緊張がはしる。時々クククというかなんか固いものが当たる感触がある

「2Bから報告を受けていて、本当に羨ましかった。私達にない体温と言うあたたかさ・・・」

ひとしきり太もも感触を楽しんだホワイトは、ゆっくり立ち上がり、服に手をかける「不思議ですね。メンテナンスの時は裸でもなんとも思いませんが、『ご主人様』の前で脱ぐのは恥ずかしいです・・・」

後ろ手に回してゆっくり脱いでいく。はらりとドレスが落ちると、コルセットのような下着と、もはやT字フロントと言えるぐらいの角度のハイレグな下半身。なにより胸は出ている状態。つまり

「ご主人様に、乳首を当てていると、気持ちよくて仕方がなかつたです」

ほんのりほほを染め、目線をそらしそういうホワイトはとてつもなく可愛かった。そのままコルセットなどは外さず、つんと前を向いたロケットおっぱいが、上下に揺れな

がら近づいてくる。どうにも目が離せない

「おっぱいをお吸いになられますか？揉まれますか？」

目の前、というか口の前に乳首を持ってこられたら、男の選択肢としては一つしかないと思う。そのまま本能に従って乳首を啜える。ちゅーちゅーと吸ったり舐めたりしていると、ホワイトがぐくぐくと体をもじる

「あん．．うん．．ふう．．ごしゅ、じんさま。少し加減を．．」

もう片方のおっぱいも気が付いたら空いてる手で揉んでいる。これはもはや揉まないと失礼な話だと思う

よくマシユマロのようなとかお餅のようなとか言うけれど、なんとというか．．低反発枕と言いたくなるような揉んだら跳ね返す、離れたらぶるぶる震える、揉むだけではなく、撫でて、乳首をつまんで離しても感触が楽しいおっぱいはさすがだと思う

「もう．．データにあったように、人間の男性はおっぱいがお好きでよかったです。これなら、次の義体はもう少し大きくしてもいいかもしれませんね？」

これ以上大きくなっても困る。多分、Gカップぐらいかな？大きいのはもちろんいいけど、やっぱどのおっぱいも吸ったり揉んだりで楽しい

「あ、あの、ご主人様？私のお乳をいつまでも吸っていただいていますか．．その．．

そろそろ・・・」

足をもじもじとこすり合わせながらホワイトが言う。何と言うか「メス」の匂いというかなんともガマンならない匂いが漂う。ずっと口を付けていた乳首から離し匂いの元を見る。ホワイトの股間はすでにしっとりと濡れているようで、T字のハイレグを濡らしている

「あ・あの。こういうのは女性から言うのは、はしたないと言うそうですが・・・その・・・」
もじもじとホワイトが言いにくそうに困っている。こっちはわざと黙っている。意地悪だと思うがこういう真面目そうな人が恥じらっているともっと、と思ってしまう

「ご主人様の、子供が欲しいです・・・」

真つ直ぐな想いを聞き、もうこっちも理性なんて吹き飛ばす。体を抱きしめ、ベッドに押し倒す。考えるよりも体が先に動く。チンポをマンコに突っ込んで射精したい。もうそのことしか考えられない。

突っ込もうとすると、例のT字下着が邪魔をする

「ああ・・・ご主人様に、こども求められるとは・・・。とは言え申し訳ありません。少しずらしますので、思いつきりぶち込んでください」

もはや動物と化した俺が、腰をこすこすと振っているがもちろん入らない。そこへホワイトが着衣をずらし、チンポを掴み自分の生殖器、オマンコへ導くと・・・

「あ！はああああ．．．」

一気に挿入されてしまった。

急に変わった感触に驚いて、動きが止まってしまった。にゅむにゅむ、くにゅくにゅむといった優しい感触が伝わる

「ああ．．．ご主人様．．．ご主人様ああ」

押し倒しているはずなのに、ホワイトの両手両足の力一杯による抱き着きに、こつちが犯しているのか、犯されているのかわからなくなる。喘ぎ声とはあはあという息遣い、セックス独特のパンパンという体がぶつかる破裂音が響く

「ホワイト．．．もう．．．」

「はい．．．はい！すべて出してください！」

早漏と思われても構わない。この魅力的な女性に、種付けできるなら後悔はない。そんな不意に冷静な考えも抱きつつ、自分の腰をホワイトの腰に密着させて全部吐き出す

「あ！はあああ．．．」

少し体が苦しくなるぐらい、ホワイトが抱き着いてくる。こつちも負けずにホワイトを抱きしめる。

どのくらい抱き着いていたかはわからないが、なんだかものすごく出した気がする

※膣内射精を確認。受精準備のため吸い上げを開始します※

※効率化のため、膣内射精のたび、絶頂と吸い上げ開始するプログラムを構築いたします※

※：吸い上げの方法が見つかりません。代用として、子宮の入口を口に見立て、ポンプの代用します※

※子宮内への精子受け入れを確認。人工卵子との受精を開始※

「あああああなに？何かしら？これ？お腹が、中が、ご主人様を啜えて離しませんのおお！」

「おおーぬ、抜けない！」

男は射精するどつい抜いてしまう。が、腰を引いても先の龟头だけ何かにつちりくわえられているようで抜けない。

「ご、ご主人様・・・このままで、どうかこのまま、私の子宮に注ぎ続けてください・・・」
「あ、ああ・・・」

射精自体は終わっているが、こうもがつちりくわえられていると、抜くに抜けない、なにより俺自身がつちりくわえられていると思っている

※子宮内の精子と人工卵子の受精、着床を無事終了※

※受精卵の育成を開始。・・・人口から鑑みて、通常の30倍の速度で育成開始※

※早急に母体への最適化を開始、母乳生成。子宮柔軟化を開始※

※約10日後、二人の出産準備のため母体の調整開始※

すでに妊娠は終わっているが、二人には関係なく気を失うまで貪り合った

臀部の魔力

お腹に精子をびゅびゅつと感じる度に、体がびくびくと震えて言うことを効かなくなります。これがきつとオーガズム、『イク』と言うものなのです。

虹色のノイズが走る、幸福感に満たされる、いろいろな表現を見ましたが、どれも本当ですね……

ご主人様は、私の横で疲れて眠っておられます。寝顔はちよつとだらしないように見えますが、それも愛嬌というもの。

男性器もお疲れなのか、小さくなつてうなだれています

「マスター、静かになりましたが大丈夫ですか？」

扉の向こうから2Bが声をかけてくる。そう言えば防音設備なんて、この部屋には無さそうですね。きつと外には私とご主人様の愛し合う声が響いていたのでしょうか。

「大丈夫です。マスター殿は生殖行為に疲れて眠っておられるだけです」

「わかりました」

任務の1回目は完了いたしました。もう少しこのまままでいさせて下さい。

体が……動かない……金縛りか？ 全身ダルク力が入らない、手は動くのようなので寝返りを打とうと動くと、ふにゆんと柔らかい感触がした

「あん！ ご主人様あ……」

色っぽい女性の声がして急速に目が覚める。

「あ……ホワイト、さん……」

「おはよう御座います。ご主人様」

夢じゃなかったんだな……。こんな美人と俺はセックスして、今もキスができそうなぐらい密着している。

「種付け任務、お疲れ様です。無事妊娠いたしましたして、現在急速に育成しております。十日後には出産可能になりますので、その時二回目をお願いいたします」

「十日……早いですね」

「はい。現状を鑑みて、最適化を行っていろいろです」

……今、俺以外人類見当たらないからか……と、少し寂しく思う。月にはいるそうだが、まだ機械生命体が数多い地球には来るのが難しいらしい

「さあご主人様、栄養補給と健康診断を行いましょう。行為後、何か問題があつてはダメですから」

「そうですね……じゃ、あ!!!」

ホワイトさんを抱えつつ起きようとすると、腰から変な音が聞こえた……
「ご主人様!？」

ホワイトさんが心配そうに見てくる。しかしこれはおそらく……

「や、やりすぎて、腰が……」

何回やったか覚えてないが、色々限界だったようだ。ホワイトさんに支えてもらい、俺はベッドにまた横になると、その日は動けなかった

「マスター? 腰は大丈夫ですか?」

「ああ、うん。2Bのマッサージのおかげかな」

「はい。お任せください」

俺は今うつ伏せになって、2Bのマッサージを受けている。ムチムチのお尻の感触を背中に感じながら。だけど時々想像以上の圧力を感じる。

「いやー精力の強化だけだと、こういう事になるんだねー」

「体力、筋力が追いつかない」

「二人とも、もう少し反省を……」

『はーい』

どうやらこの二人、俺の看病の時に何か仕込んだようだ。ホワイトとのセックスは凄

かったが、それが原因で腰を痛めてしまった。

「うーむ。睾丸に直接ナノマシンを仕込んだのはダメだったか」

「陰茎にも仕込んだから倍々でアウトかなー?」

「しかし、それぐらいしないと、万を越える生殖行為は出来ないぞ?」

「人間の体力を計算に入れないとねー」

……マツサージに集中して聞かなかった事にしよう

「食事に筋力が付きやすくなる成分を混ぜよう」

「心臓が強くなるのもいるよねー」

俺、改造人間にでもなるのかな?

しかし、実際腹上死なんてのもあるらしいから、この子なりの優しさなんだろう。

「三日間ぐらい不眠不休で続けられる体力が……」

「それだと多分体が持たない」

「えー? 私達なら大丈夫だよ?」

「人間は1日に6時間以上の睡眠が必要とある」

「えー?」

別の意味で、命に危険を感じた瞬間だった

「健康診断の時は、私と9Sが立ち会うことになりました」

先ほどのデボルとポポルの会話を2Bが報告。司令官がその事を危惧しその指示を出した

「万を超える回数は必須ですが、それに伴ってマスター殿の体調に異変をきたすのはダメです」

とのこと。なんか別の意味で深みにはまったような気がするけど

「マスター。今日は……私の番……」

2Bが手を前で組み、まっすぐこつちを見つめてくる。いつものスカートはすでに脱いであり、ホワイトと差がないほどの角度が鋭いハイレグな股間。それよりも目を引くのは……

「マ、マスター……お尻ばかり見ているは困る……」

彼女の後ろ姿を見たとき、何も考えず凝視してしまった。これほどTバックの似合うお尻があっただろうか？

いやない！（断言）

なので、今は後ろを向いてもらってお尻を鑑賞している。左右に振らせたり、屈伸運動させたりとどう動いてももらっても素敵なお尻はそうないと思う

「あ、あの……私のお尻は何か変なのだろうか……？」

あまりにも無言で凝視し続けていたため、2Bが不安になったようだ。返事の代わりに、両手でがっちりつかむ。もにゅもにゅとおっぱいを揉むように両手で揉みしだく。

おかしい。俺が手にしているのはおっぱいなのか？ お尻なのか？ そんな哲学が展開されるほど、お尻の弾力は素敵だった。

「うん……ふう……うん……もつと、お願いしま……す」

2Bが腰をもじもじしながらねだる。どんどん2Bの股間が湿ってきて、俺のチンポもどんどん固くなってくる。

「あ、あのマスター？ 私は、アナルセックスの方をお願いします」

「え？ でもお尻じゃ子供は……」

つい聞き返してしまう。この子たちは子供を作るために、俺とセックスをする。つまりアナルでは妊娠しないのになぜ？ と思うが、この素敵なお尻はぜひとも後背位で腰を掴んで犯したいと思ってしまう。

「問題ありません。一部のアンドロイドは女性器のみならず子宮を宿しました」

「え？ それじゃ……？」

「私には『子宮が二つあります』」

普通に考えたら非常識すぎて怖い内容だが、二倍種付けできると考えると考えると逆に興奮するのは、俺も異常なんだろうか？

「その……女性器による性交、妊娠は指揮官が行いました。ですので……あの……」

お尻を揉むのを続けつつ、2Bの話を聞く。このお尻、無限に揉んでいられる

「アナルセックスによる初めての妊娠は、私にお願いします」

どうしてホワイトといい、この子といい。男の理性を破壊する方法を知っているのだろうか？ 腰をがっしりつかみ、そのまま尻で挟んで尻コキをする。入れるものいいがこういう感触を楽しむのもいい

「マスターのおちんちん、固くて、熱くて……この熱さ、いえ暖かさ素敵です」

こすり合わせるとそれに合わせて2Bがお尻を押し付けてくる。2Bは腰が砕けたのか膝をついた。そのまま両手を地面についで四つん這いの状態になり、片手でハイレグをずらし……

「どうぞ、私のケツマンコお楽しみください」

普段真面目な2Bから出た急な隠語に心臓が高鳴り、迷うことなくチンポをあてがう。だがアナルは口を閉じて中々入らない。そこに2Bが器用に姿勢を維持しつつお尻に両手をあてて、ぱっくり開いていく。するとお尻の割れ目が開く力に合わせて、アナルが開いていき、ずぼん。と先が入った

!!!

2Bが背筋を伸ばしそのまま前に倒れていく。しかし、手はお尻にそえられたまま

で、左右に広げられているが、チンポを飲み込もうとぐむぐむと咀嚼しているようにも感じる

「ああ……司令官はこの熱さを一晩中感じていた……」

先しか入っていないもどかしさ、どうにも我慢が出来ず腰をがつつりつかみ、根元までぶちこむ。他の女性と比べるのは失礼なのはわかつているが、ホワイトのオマンコとは違ってずるずるっと入った。しかし、根元はアナルの入口ががっしりくわえ込み、全体が波打つように刺激してくる

「ますたあ……ます、たあ……」

2 B がとろけて動けなくなっている。そんなことにお構いなしに、俺はガシガシと腰を振る。

パンパンという腰を打ち付ける音、ばちゆくちゅという粘質的な音、あ、は、へ、と
いう女性の力の抜けた声。

「2 B……そろ、そろ……出そう……」

「はい……はい！ どうぞ種付けしてください！」

思いつき腰を密着させる。2 B もそれに合わせて腰を上げて俺にくつつけてくる。完全にゼロ距離ともいえる体の密着へ快感と共に腰を掴んだ手は力はこもった。

「こ、これ、が、射、精！ だ、め、です！ この、から、だ、のノイズ、わああああ」

体がすさまじく反応してびくんびくんと痙攣する。ただ、アナルの締め付けはしっかりとしているため、チンポは抜けずに精液が注ぎ込まれ続ける

※個体名「2B」の腸内を変化させた子宮に射精を確認※

※先日、コマンダーが受けた同じ精子と判断※

※効率化のためコマンダーと同じよう、射精を受けると絶頂と吸引機能追加※

「ま、また、先っぽが捕まって?」

「ああ……もつと……もつと注いでください……」

2Bが腰を上下に揺らす。チンポは抜けないが、その刺激に追加で射精してしまう。こうなったらこつちもとことんやってやる、と思い再度腰を掴む

「ますたあ……沢山、たあくさん……産ませてください……」

※子宮内部への精子確認。人工卵子早急に射出※

※……無事受精。着床プロセスに入ります※

※……人口を鑑みて、同じく30倍の速度で育成。早期出産のため母体の調整に入ります※

※過程、調整のため、ターミナルにてアップロードを推奨します※

そして、次の日、またもや俺の腰が砕けたのは言うまでもない

レベルアップ（意味深

2Bとのセックスで、またもや腰をやってしまった。彼女へはお尻の中へ作られた子宮と、通常の子宮に種付けを行い両方とも妊娠したようだ

「マスター、ご自身の体力に配慮してください」

「またもや2Bのマッサージを受けている。このお尻の感触を味わえるならとも思うが、毎回あの激痛と引き換えとなるとやはり困る

「2Bのお尻が魅力的過ぎるのが悪い」

「……」

返事は無いが、マッサージが揉む動きから撫でるような動きに変わってきた。手がお尻に移動し、2Bの息遣いが荒くなってきた……

「そこは腰ではありません2B」

「ひゃい!？」

いつの間にか部屋に入っていたホワイトに止められる。

「産まれるまで性行為は必要ありません」

「そ、そうですか……」

それはそれで、俺が辛いな。少なくとも後十日は禁欲状態になる。デボラとポポルはまだだけど、いずれは……いやいや、何を考えてるんだ俺。いい女二人を孕ませといて、その二人がエッチ出来ないから浮気するなんて……自分に厳しくいかねば

「私ならアナルセックスヤリ放題なので、ご主人様どうぞ申し付けを」

じ、自分に厳しく……

「そ、それなら、口でするフェラチオと言うのを聞いた。マスター私の口を使って」

じ、じぶん……

「えー？ 私達は仲間外れー？」

「私も主の子供欲しい」

じ、じ……

2Bのお尻マッサージの下で、俺のいきりたつた股間はベッドと体に挟まれ痛かった

「機械、生命体のコロニー？ うん……」

「はい、あーん……かぶ。あむあむ……ウエロウエロ……ちゅぱ！ ちゅー……」

俺の子種争奪戦に勝った？ のは2Bだった。

『次の任務でしばらく離れるから、マスター成分が不足する』

という謎理論でなぜか他のメンバーが納得。こうして口でもらってる

「妊娠してて大丈夫なのか？　おう、そこイイ」

「あむ。もんふあいありまふえん」

「啞えながら喋ると、振動が……」

「ぷはっ。予定では一週間。移動の往復に二日か三日、探索に三日の予定」

健康状態のステータスから、2Bは4人妊娠してると思われる。かなりの大きさにならないか？　と心配だ。

「このぐらい出来るようにならないと、今後妊娠したまま行動出来ない。それは私にとつては辛い……だからがんばる。あーむ。……もぐもぐ」

もう話はおしまいと言わんばかりに、フェラに集中する2B。さっきまでの亀頭だけへの刺激とは違い上下に動かした

「んふうーんふうー。じゅじゅじゅじゅ。ぷはー。はむ。ん、ん、ん、んー」

真ん中あたりまで啞えては、鼻息が荒くなり、唇に力を入れて竿をシゴく。頭の動きが大きくなり俺の快感もどんどんのぼり

「2B……もう、出そう」

「んふー！　んふうううー！」

しごく動きをやめて、亀頭だけ啞える。舌がぺろぺろと先を集中して刺激されるとガマンできず、そのまま射精した

「んん!! ……ふー……ふー……」

口の中に出されても、決して離さずそのまま受け止める。びゆくびゆくとかなりの量が出たと思う。あの双子の調整は一体どこまで影響があるんだろうか？ さすがに数秒程度ではあったが、全部口で受け止めた2Bはまだ口を離さず

※口内への精液の注入を確認※

※愛情のプログラムから味覚の調整を開始※

※摂取した精液の変換プログラムの構築を開始※

「ちゅー……ずずず……」

ストローでジュースを飲むように吸出し、ちゅぽんと音を立てて口を離した。そしてにっこり笑うと

「んぱあ……」

俺の精液で一杯になった口を見せ付けて、その精液をかき混ぜるように舌で転がす
「いはらきます」

そういつて口を閉じ、んく、んくと喉を鳴らして飲んでいく。時々鼻息が漏れたり、飲むときに力が入っているのは飲みにくいのだろうか？

「無理しなくていいぞ?」

そう言うとう首を横にフリ飲むのを続ける。そして飲むのがとまると
「あはあ……」

再度口を開けて空っぽになった中身を見せてくれた。エロ本とかで見たことあるけど、エロいと言うより嬉しくてつい頭をなでた

※精液を美味なる物として感じるよう味覚の調整を完了※

「ごちそうさまでした……なぜか、とても美味しかった」

「そっ？ そっ？？」

俺自身もちろん味は知らないが、よく生臭いとか苦いとか聞く。嘘でもこういつてくれるとやはりありがたく思う

「ふふ……マスター……まだギンギン」

「う……」

結構な量が出たと思うのに、俺のチンポはまだ萎えない。もつともつと言わんばかりにびくびくしている。言うことを聞いて欲しいものだ

「……おかわり、いい?？」

返事も聞かず2Bは再度口に咥える。

※精液の経口摂取量に応じ、性技への経験値変換プログラム開始※

※性技の技量アップと調整のため、摂取後、アップロード、データベースへのアクセス

スを推奨※

この後2Bの口の中に、10回を越える射精を行う。なんか最後のほうは触手に絡まれているとか錯覚するぐらいすごかった。

腰は痛めなかったが、腰が抜けたため、結局また立ち上がれなくなったのはお察しである

王と、初産と、子供

パスカルの村にて、機械生命体の集落が別にあることを聞く

パスカル達とは違うコミュニティを形成しており、森の奥にいらるとのこと

また別件ではあるが、途中に「天才発明家」を名乗る奇妙な機械生命体とも接触

なぜか資金提供を要求された。余裕があったので提供を承諾。後日来て欲しいと言われた

その森の中で遭遇した機械生命体は、死を恐れず「王のために！」とこちらに襲い掛かってくる

森の中で探索を初めて二日。ここに来るまでちょうど一日経過しているので……

「妊娠四日目。ちよつとお腹が張ってきたな……」

9Sのスキヤンと、双子の診断で4人いることはわかっている。またデータを確認すると通常の人間よりはるかに速い速度で育成しており、約10日で出産だそうだ

「移動を考えると、こここの調査は後一日ぐらいか……」

人間であれば、妊娠後期は歩行もかなりの重労働と聞く。多分、私たちであれば臨月でも行動は可能、しかし戦闘行為は避けねばならない

腹部への強打により、強制的な出産や死産もありえる。出産はやはりマスターに見ていただきたい。大きく重くなる腹部に愛おしさ感じながら、調査へと思考を切り替える運よく調査は発展。森の奥にて大きな建造物を発見。以前砂漠で見つけた「集合住宅」とは違う建造物。9Sに検索を指示すると「城」と呼ばれる権力者が住む住居らしい

その中にいる機械生命体も、「王のために」など叫びこちらを襲撃。城の中は結構広く、権力者だけがここに住む意図はまったく理解できない

探索に一日使ってしまった。お腹は外から見ても膨らんでいるのがわかる。まだ詳細は探索できていないが、そろそろ帰還しないとお腹の子が心配だ

しかし、幸か不幸か調査が進み、長い階段を数多くの機械生命体を守っている。それらを撃破し、ポツンと箱？ が一つ保管されている。その中身を見ると

「機械……生命体？」

「予想、機械生命体ノ幼体、モシクハ、ソレヲ模シタモノ」

「これが王……？」

幼体……つまり赤ちゃん。そう聞くと手が自然に膨らんだお腹へ延びる

お腹の子供に思いをはせていると

ガキン!!

と、その王を貫くものがあった

「何者!？」

「……」

「注意アンドロイドト酷似」

「アンドロイド!? レジスタンスの!？」

「否定。データノ照合カラ、ヨルハタイプト見ラレル」

「ポッドヨリ、対象ノ破壊ヲ推奨」

「バンカーより2Bへ、そこに指名手配中のアンドロイドA2のブラックボックス反応を感知した」

「指名手配……?？」

「そいつは脱走兵だ！ 追撃部隊を何度も退けている！ 破壊するんだ」

「……任務開始」

体格は私と似ている。髪型は長髪、ボディのメンテナンスが行えてないためか、大分薄汚れている。戦闘タイプである私でも攻撃をかわすのがやつと。なんとか反撃しつつ破壊を試みるも距離をとられてしまう

「そのお腹……一体なに?？」

「……脱走兵に言うことはない」

「そう……」

奥の壁が崩れたところから敵アンドロイドA2が逃走する。私もすぐに追いかけたが見失ってしまった

「司令部、あのA2というアンドロイドは一体……」

「……2B、機密事項に振れるので返答はできない」

「了解」

通信を終わらせて9Sのデータに何かないか聞いてみる

「……データノ閲覧ヲ許可サレテイナイ。タダシ、第三勢力ヘノ情報収集ハ可能」

「第三勢力？」

「機械生命体パスカル」

「ふむ……気は進まないが、情報は必要か……」

パスカルへの連絡を取る。A2の傍受を警戒して直接会って聞くことを伝えると、村の裏口の門を開けてくれるらしい。これならアジトへ帰る時間も短縮できる

村へ着き、パスカルへA2との戦闘記録を見せると、以前より機械生命体を狩っている存在のようだった

「2Bさん。大分お腹大きくなりましたね」

「今日で6日目、まだまだ大きくなる」

「そう言えば、発明家へ資金をいただいたと聞きました。変わってお礼申し上げます」
「問題ない。余裕があったから」

「実は、その発明家から資金提供のお礼と、こんなものを預かりました」

パスカルより、小さな箱を受け取る。特に施錠もなく簡単に開けられるようだが蓋を開けて中を見ると……

「? 2Bさん? これは一体なんでしょう?」

「さ、さあ? なんだろうな? と、とりあえずお礼と言う事なら貰っておこう」

「はい。そうですね」

……なんで、こんなものを開発できるんだ? あの博士……

後でももうちよつと資金提供してこよう……

中に入っていたのは、女性用の下着、パンツのようなものだったが、その内側と外側にマスターのチンポと同じ形のががくつついていた……

森の通過を省略できたおかげで、城からアジトまで1日でいけた。妊娠七日目大分行動に制限が出てきた。正直九日目まで行動できると思っていたが、これは少し修正が必
要だ

司令官は八日目。人数分、私よりは小さいが十分な大きさなお腹で、立ち上がるとき

に誰かの補助がいる時があるようだ。おそらく私の方は八日目から動けなくなりそう
だ。四人分……うん、いい重さだ

「2Bの方が大きいのはしょうがないですね……ふう。歩くのも負担が大きいです」

「私は4人分。明日あたりから私も行動に支障が出ると思われる」

「これも任務です。仕方ありません。あ、貴女がない間のマスター殿のお相手は私が
してあげました」

「……その報告いる？」

「貴女がされたと言うフェラチオ、アナルセックス。データバースを探し、パイズリなる
ものも見つけ『母乳パイズリすげえ……』と大変喜ばれました」

「ばい……ずり？」

「はい。こう、おっぱいでおチンポを挟んで、マッサージするんです。最初は摩擦だけで
痛かったのですが、潤滑油の代わりに先日より出るようになった母乳で代用したところ、
とても気持ちよさそうでした」

「ばい……おっぱい……」

「2Bも出るようになると思いますよ？」

「違う……そうじゃない……」

次の義体は、司令官より大きく作ってもらおうか？ いやでもそれをするとな闘が難

しくなる

しかし、マスターが喜ぶなら……でも守れなくなるのも……ぐぬぬ

そんな乙女の悩みを抱えつつも二日後、ホワイトは女の双子を、さらに翌日2Bも4人の女の子供を出産した

「全部女の子だと、数が増えないな……」

目的は人類の数を増やす事。まー兄弟でつて言うのは色々問題があるかもしれないが、それはそれで仕方がないと思っていた

「誰か別の男探すのかな……？　しかし、娘を……うーん」

赤の他人に娘を繁殖のために差し出す？　理解はできても納得はできないな……。

一人でうんうん唸っているとホワイトが部屋に入ってきた

「ご主人様？　どうかなきいました？」

先日産んだ双子を抱え入ってきた。娘たちの成長速度は速く、すでにハイハイをして
いる。

ホワイトに聞くと、通常、人間が繁殖できる年齢である12歳前後あたり、つまり12年かけるのは進行に問題が出る恐れがあるため母乳に成長促進のプログラムを組み込み、18歳の体になるまで急速に成長させているという事だ。

今のところ、大体1日1歳計算で成長させているらしい

「いや、産まれた子供が全員女の子だろ？ 今後どうするのかと……」

「第一世代が女の子は決まっていたことです。ご心配なく」

「ん?? それだと、第2世代というか、その娘の子供というか、できなくないか？」

「?? 何をおっしゃっておられるのです？」

「いやだから、娘の相手の男がいらないじゃないか？」

「? ご主人様? お忘れですか？」

「え? 何を？」

「ご主人様は、『私たち』アンドロイドとの繁殖をお願いします」

「ああ。だから、2Bやホワイトと……その、な?」

時々ある、アンドロイドジョークともいうのか、明け透けな物言いによつと照れながら答える

が

「はい。なので、娘たちへの繁殖行為もお願いします」

「……はい？」

「第一世代は、人間とアンドロイドのいわゆるハーフな存在です。これだと、もしご主人様以外の人間と性行為しても子供が出来ないかもしれません」

「ま、まあ……」

「人間の場合、近親だと遺伝子の関係上危険ともお聞きしましたが、今回はそれを逆手に取ります」

近親婚がタブーとされているのは、確か奇形児や障害、いろいろ子供に難が出る可能性があるって聞いたな

「第一世代はご主人様とアンドロイドのハーフ。その世代にご主人様の子供を産んでもらい、第二世代はご主人様が75パー、アンドロイドが25パー。そして第三、第四と続けます」

え？ それだと、俺孫やひ孫まで子作りするの？

「そうして10世代も続ければ、ほぼご主人様、アンドロイドの部分が希薄な子供が出来た時、初めて男が産まれる。という計算です」

「そ、それ、俺じゃない人間でも出来るんじゃない？」

「他の遺伝子が混じるとかえって計算が狂うかもしれません。何より」

「何より？」

「娘たちが他の男に孕まされるなんて、絶対に嫌です」

「ほ、本人たちの意見は？」

「あら？ 現在産まれている6人の娘たちは大いに賛成です」

「え？　しやべったの？」

「いいえ。通信です」

「あ、そう……」

……本人たちが俺とコミュニケーション取れるようになってから再度確認しようと思いつつ、常識では味わえないシチュエーションに興奮する俺がいた

一家団欒

いきなり6人の娘の父親になる。何とか言うか騒がしい

ホワイトから産まれた子、一人はホワイトとよく似た長い髪の子だ

また、もう一人は肩までの長さになっている

産まれてから八日だったので、高速成長がすっかり働いていれば、ホワイトの娘は8歳。2Bの娘は7歳と同等の成長となる

2Bの娘たちは全員活発で、髪型も母親と一緒だ。

「とうさまー？ さつき狩って来た鹿のお肉だよー」

「パパ。海、釣ってきた、魚」

「とーちゃん！ 作ってた野菜採ってきた！」

「父さん。お水飲む？」

2Bの娘たちが色々と世話を焼いてくれる

「駄目です。肉と魚はちやんと火を通さない」と

「野菜も生は避けてください」

1歳姉？ のホワイト娘ズが対抗する

「むー知ってるよーそれぐらい」

「魚、昔、生で食べてると、見た」

「だいじょうぶ！ サラダって料理あるって聞いた！」

「駄目です。パパの健康状態管理は大事です」

「ええ。パパが体調崩すと、ママが怖いです」

『ああー……』

「どこの家庭も母親は最強のようである。」

「娘の名前か……」

超今更の話が出てきた。普通は産まれたときにするが、アンドロイド側としては、まず作戦行動や適合から名前を考えて、中身を作っていく

しかし、人間は適合が先にわかるなんてない。なのでアンドロイド側としても名前が決めきれないようだ

「どちらにしても、第2世代が産まれるまでに決めておかないと、ややこしくなります」
「でも、個体数1000超える可能性があるのでは？」

「せ、千人分の名前……」

俺が1000人を超える父親？ ありえねえ……なんかふと、人工授精して1000人

超える父親になった医者の話思い出した

「とりあえず、私は1000人は産むとして……」

ホワイトさんのこの子作りにかかる情熱はどっから来るのだろうか？

「じゃあ、私は1000で」

……君も抑えようね？ 2B。名づけに悩む、というのも父親として嬉しい話ではあるが、難しい問題だ。

「私達と同じ様に、役割とナンバーでいいと思う」

「そうね。それだと……私の娘なら1H1かしら？」

「最初は産まれた番号？ 後は？」

「Hは繁殖のローマ字つづりの頭文字。英語だとbreedingのBになってしまうので」

「最後のは？」

「世代です。彼女達が出産したら、1H2になります」

個人的にはこういった番号呼びはしつくりこないが、本当に千人超えるとなると……ちよつと思ひ浮かばない。千人子作りか……あ、あかん、いろんな意味で冷静になろうと思いつつ、ちよつと大きくなる股間だった

「さて、ご主人様？ 久しぶりの任務です……」

「う、うん」

「パパ、緊張してます？」

「私たちの方が緊張しますね」

さらに10日後、近隣の調査や敵対勢力の排除など特に大きいトラブルもなく、平和に過ごせていた。が

そう彼女たちが産まれて『18日』が経過したのだ。つまり

「私も、娘たちが子作りできる体になるまでのガマン、辛かったです」

「パパったら、2Bさんのお口でいっぱい楽しんでましたからね」

「い、いや……」

「……ママのお尻でも楽しんでたと思います」

「ふふ。そこは親の特権としてガマンしてください」

……ついに娘たちとの子作りの時間である。

もちろん、本人たちに父親で問題ないか？ とか、本当であれば近親相姦は駄目とか、

一応倫理を教えたが

『パパ。私たち、嫌い？』

何て言われると、もう抱きしめるしかないじゃないか。こうやって、男は深みにはま

るんだよな……

「では、姉の1H1貴女から種付けを行いましょう」

「お姉ちゃんずるい」

「はい。パパこつちに……」

ベッドへ連れて行かれる。彼女が服を脱いでベッドに横になる、それにしても……

「パパったら、いつも私のおっぱい見てますね」

「そ、それは……」

長女の1H、彼女のおっぱいは現在一番大きいと思う。歩くたびにホワイト以上にゆさゆさ揺れるのが目に入ると、つい凝視してしまう。仰向けになっても上に向かって自己主張しているのは、見てて壮観だ

「測定では130センチでしたね」

「むー……お姉ちゃんが私の分のおっぱい取った」

「貴女には立派な乳首があるじゃないですか」

次女の2Hは、その、いわゆるAカップぐらいのささやかな大きさで、よく1Hの胸を恨めしそうに見ている。すでに裸になっているその胸の先っぽには、親指がついているかと思うぐらい立派な乳首がついている

「ふふ。赤ちゃんが飲みやすそうな形ですよ？ 2H」

「まず、パパに吸ってもらいたい」

「あらあら。甘えん坊ね」

それ、どっちかと言うと俺が言われるほうだよな？ と心の中でツツコミしつつ、1

Hへ向きなおす

両足を広げ、すでに準備は整っていると一言わんばかりに1Hが待っている。上にのしかかり、その素敵なおっぱいを触ろうか迷っていると

「さあご主人様。娘の使命である、パパとの交尾をお願いします」

「ぱぱあ……」

1Hが、腰を上げて俺のチンポにアソコを当ててくる。ちゅっちゅ、とキスのような音がして、先っぽをゆっくり当てて挿入を開始する。ちよつと抵抗を感じたが、にゅん、といった感じで亀頭が入ると

「あ……ふ、ん……」

1Hが少し苦しそうにもだえる。両手を繋ぎ押さえつけるような形になったが、少しでも苦しくないようゆっくり入れていこうとする

「ん？ 入っていかない？」

亀頭だけ入って、何か壁のようなものにぶつかる。

「ご主人様、それは『処女膜』だそうです」

「しよ、しよじよ!？」

「ええ。人間の女性は、一度も性行為をしていないと膜による保護があるとか。私達ア
ンドロイドに不必要ですが、ご主人様の人間部分の影響でしよう」

ホワイトや2Bには無かったからすっかり忘れていたが、普通そうだ。特に娘達は俺
以外の男との接触はない。となれば必然的に俺が「初めて」になるわけで

「さあ! ご主人様。パパチンポで、娘バージンを貰ってあげてください」

パワーワード過ぎる。娘バージンを父親が貰うだなんて……

「パパ……」

組み敷いている1日が潤んだ瞳で見つめてくる。さすがに処女と聞きためらって抜
こうとすると、するする足が絡まってくる

「抜いちや……やあ……」

「そうですよ? ご主人様」

ホワイトが背後にくつついて、後ろへ行けないようにしてくる。チンポに指を添え
て、シコシコと上下に優しくしごく。

「せっかくの、一生に一度しかない儀式。パパであるご主人様以外ありえません」

ホワイトが、俺の体に密着させてくる。1日もそれにあわせて、足を俺とホワイトご
と挟むように絡めてくる

「こういうの確か『初めての共同作業』というのでしたっけ？」

「パパとママが、私の初めての人……」

「次は私だよ？ パパ、ママ」

「ええ。もちろんですわ。2H」

ホワイトがゆっくり体重をかけてくる。それにしたがって腰が進み、抜けかかっていたチンポは再度亀頭が入り、壁にぶつかる

「ん？ 抵抗を感じました。これが1Hの処女膜ですね」

「……うん……」

「では、親子三人の共同作業とまいりましょう……せー……のー！」

掛け声にあわせて、ホワイトが腰を突き出し、1Hが足に力を入れる。ぶつん、と何か切れる感触がして俺のチンポは……

「ぱ……ぱ、ぱあ……」

「素敵です……ご主人様……処女の証である血も出ます」

「む、娘の処女を……」

根元まで入れば当然膜は破れる。ついに俺は超えてはいけない一線を越えてしまった。でも、体は燃えるように熱く興奮している。

「さあさあ。パパ専用娘マンコに、いっぱい種付けしてあげてください」

「ままあ……パパ専用オナホって、言うほうが、男の人は興奮、するってえ……」
「あら？　いつの間にそんな言葉を。勉強熱心ですね」

本当にいつの間だよ。1Hが手を握り返してくる。やはり痛いのだろうか？

「ママあ……おっぱい……」

「あらあら。甘えん坊ですね」

まんざらでもないホワイトが、俺の後ろから離れて1Hの頭の方へ行く。膝枕のような格好で頭を抱えると1Hへ授乳を始めた

「んく……んく……んく」

「よしよし」

「あ、お姉ちゃんだけです。私も！」

「はいはい」

2Hも同じようにベッドに乗り、空いているホワイトの乳房に口をつけて一緒に飲み出した。

「んっん。んっん？　ふあふあ？」

娘二人の授乳姿を見て、固まっている俺に2Hが声をかける。

「ぶは。パパも飲みたい？」

「う……それは……」

「時々、感じた熱い視線は、そう言う事でしたか……言つて頂ければ構いませんのに」
「代わりに私のをどーぞ」

2Hが立派な乳首を口に向けてくる

「私だけ仲間外れは嫌です……。パパ。どうぞ」

目の前に出された、娘の乳首。体を揺すつていからふるふる震えている。美味しそうでと不意に考えそのまま口に含む。

「きやん！ ……ママ、おっぱいあげるのつてくすぐつたいですね？」

「それはパパが遠慮してるからよ」

口にすると親指をしゃぶつていからふるふるような大ききさだ。でも骨などはないから舌で動かすとグニグニ曲がる

「ふふ。いい子いい子」

「あら？ 2H。気が早いですよ？」

そんな親子の会話を聞いていると、腰に回された1Hの足に力が入る。急な快感について噛んでしまった

「あう！ もう、パパったら。……もつと噛んで？」

なんでも受け入れられる。そんな娘に感動を覚えつつ、腰をゆっくり動かしに行く。

「あんっ！ こつちも噛んで……もう」

「んく、んく」

俺の片手は2Hの腰に回しその乳首を両方啜える。もう片手は1Hの腰を持ちチンポを動かす。多分、そんなに動かしてないと思うが、既にチンポは痛いぐらいでもう射精しそうだ。

「んふー！　ちゅー！　んふー！」

「パパあもつと吸ってええ」

「んく！　んく！」

「こんなに激しく動いて……もう、出そうなんですな」

そして最後の突き込みをして射精する。ついまた乳首を噛んでしまったが、2Hが俺の頭を抱え込み体を痙攣させている。1Hも体が痙攣しているが、その痙攣に合わせてマンコが波打つもんだから射精が止まらない。

「んんん!!」

1Hの足が力強く腰を引き寄せる。相変わらず結構な量が出たと思う。あの双子め……。全部膈内へ吐き出し、1Hの足が緩んでやつと腰が離せるようになった

「はあ……あ、はあ、ひ、ふう……」

「1Hたら、とつて良さそう」

「お姉ちゃん、いいなあ」

完全に脱力してベッドに仰向けになる1H。その顔はだらしなくも満足した笑顔を浮かべていた。

「んっふっふー。パーパ？」

2Hがベッドのフチに手をかけて、綺麗なお尻を向けてくる

「私、お尻は2Bママに負けないよ？」

お尻をツンとこちらに向けて左右にゆらゆらと振る。それはまさしく『桃』としか表現が思い浮かばないお尻があつた

「2Bには負けてられませんから」

ホワイトが呟く。もしかしたら第一世代の子らは、親の願望を強く反映するかもしれない。以前ホワイトは、胸をもっと大きくと言っていたし、2Bのアナル妊娠を羨ましがっていた

「パパぁ……は・や・くう」

お尻の振りが大きくなつて俺を誘う。さつき一人の娘の処女を貰い種付けした上さらにもう一人の娘……もう訳がわからないが、やらないわけにはいかない。腰しつかり掴みチンポを当てがうと俺の腰が掴まれた。

「ダメですよ？ 『パ・パ』 1Hだけ特別扱いしては」

「うん……ママも一緒に、私の処女貰って下さい」

こんな家族共同作業があつてたまるかと思いつつ、俺の娘は俺の物だと独占欲が湧き上がる。2Bやホワイト達のように遠慮なく打ち込みたかったが、ふと娘と言う事に冷静さを取り戻し、ゆっくり入れていく。

2Hのオマンコは1Hと違ってしつかり閉じていたが、強めに力を入れると同じようにぱくつと亀頭を啜え込んだ。

そして同じく、処女膜に当たつて抵抗を感じる。後ろから俺の腰を掴みピッタリと張り付いているホワイトにも、その抵抗は伝わつたようだ

「さあご主人様。二人目の娘マンコを、ご主人様専用にしてあげて下さい」
「私、パパだけのモノになりたい……」

本当にここにエロ娘達は……と嬉しくも昂りが止まらない。親娘であると言うことが、良くも悪くもブレーキになり俺の腰を止める。

「ご主人様？　もしかして私の号令待ちですか？　で、あれば1Hと同じように……せー……のー！」

背後で俺に腰を掴んでいたホワイトが、さつきと同じように力を入れる。もちろん、俺の腰は2Hに近づき、またもや何かぷつんと感じた

「んん!!!」

2Hが体を強張らせる。ホワイトが俺の腰から2Hの腰へ手をうつし俺が逃げられ

ないようにする

「つうう……」

1Hの時より体に入っているように見える。

「2H。大丈夫、か？」

しかしチンポは抜かない。と言うか抜けない

「どうやら2Hは、マゾ気質みたいですね」

「違うもーん。パパにされるのがいいもーん」

段々、娘達に個性が出てきたように感じる。

「じゃあ『パパ』。娘を遠慮なく種付け……いえ」

「ん、ん？」

俺の後ろにくっついてるホワイトが、さらにくっつき肩越しに囁く。

「思いつきりガンガンに犯してあげて下さい」

悪魔の囁き。よりもよって娘。一応、合意があるとは言え異常な今。それに輪をか

けて異常な言葉を囁く母親。しかし

「ママあ！ それ素敵!! ねえパパ？ 娘の事思いつきり犯してえ！」

こちらに顔を向けて、泣きながらも懇願する娘に俺の何かがぶち切れた。腰を両手で力一杯掴み、乱暴に腰を動かす。時々お尻を叩くと嬉しそうに声を上げる2Hに対し俺

はたまらず射精した

「パパあああ！」

「ううううう」

1Hの時より出たかもしれないと思うほど射精した。2Hも射精を受けるたび、ビクンビクンと痙攣している。

射精が終わると、俺も脱力してベッドに倒れる

「ご主人様。お疲れ様です」

ホワイトに膝枕される。回数で言えばまだまだなのに、なんと言うか疲れた気がする。「あの子達も満足して、すっかり寝てしまってます」

人間の俺より頑丈とは言えやはり子供なのか、すやすやと寝息をたてている顔を見ると、とても嬉しくなる

「きつと二人とも妊娠出来ましたね。ご主人様？ 次は私に……」

あれだけ、母親らしからぬ言動を見せていたホワイトだったが、やっぱりねだる姿は可愛くそのまま彼女の体を堪能した。

期間的な我慢に加え、目の前での濃厚な子作りに興奮しきっていたホワイトは、中々俺を離してくれず、翌日予定していた2Bの娘達への種付けが出来なくなり、しばらく謝り倒したと言う

一家団欒（2B家）前編

たった一日、たった一日だが、予定を一日ずれて2B一家への種付け……もとい、任務が遅れてしまった

原因はもちろん先日ホワイト一家への任務。というかほぼホワイトのせい。彼女の中では1H達を産んだ後にすぐ次を作るつもりだったため、そのガマンが色々限界だったらしい

「マスター、情けない」

「面目ないです……」

と、こんな返しをしているが、すでに二人いや

「とうさま、体鍛えよう！」

「パパ、ちんちん、鍛える？」

3H1と4H1が裸で話す。この二人は2Bの戦闘面を強く引き継いでいるようで、外での狩りが得意なようだ。外へ出るのも多いので他の娘達より、体が筋肉質になっているが、最大の特徴はその肌色である。要するに褐色の肌となっており、とても健康的に見える……水着のような跡も見えて、余計にエロい

「とうちゃん、畑仕事すると腰が強くなるぞ」

「5姉、父さんの腰だけ強くしても意味が無いよ」

5 H 1と6 H 1も裸で話す。この二人も戦えるようだが、3 Hや4 Hのように積極的ではない。むしろサポートの面が強く、4 Hは作物を作るため畑を耕しており、5 Hは3人の姉が手に入れた食材で料理をするのを得意としている。

「皆、父親を独り占めしようとしな」

『はい』

2 Bに膝枕され、耳掃除をされている俺。ここだけならほのぼのした空気なのだが2 Bも裸である

「さて、掃除は終わり。皆？ 昨日しっかり話した通り行います」

2 Bが俺の頭を仰向けに転がして、体も仰向けにする。正座している2 Bの太ももに、後頭部がすっぽりはまるような姿になり、まだかろうじて勃起していなチンポに手を添えて優しく撫でていく

「司令官一家と同じように、明日は動けなくなるまで、がんばってください。『お父さん』」

「お、おう」

「では、皆、挨拶を」

4人の娘が俺の股間に向かって顔を近づけていく、それだけで反応する俺のチンポ。むくむくと大きくなっていく初めて見た男のモノに娘達からは、おお！ つと驚きの声がかかる

「ふふ。そういえば勃起をゆっくり観察するのは私も初めて」

「ちよつと、はずいぞ……」

「とうさま、鹿の角みたいですよ……」

「パパ、ちんちん、おつきおつき」

「とうちゃん、かつこいい」

「これが、ペニス……」

娘達よ、ほめてくれるのは嬉しいが、チンポガン見で言われるとなんだかむずがゆい。

「やっぱり私の娘ですね。父親チンポに一目惚れしたようです」

「かあさま、じゃあ皆で『挨拶』？」

「ええ。私は最後でかまわない」

何をするつもりかわからないが、4人の娘の息が荒くなり全員の視線がチンポに集まる。姿勢を整えて4方向から全員一緒にチンポにキスをする。2Bよつて根元を支えられてたが、ピクンと反応してしまい4人の口から外れる

「きちゃん」

「お魚みたい、はねた」

「気持ち良いと、そうやってぴくぴく反応します」

「おお。面白いぞ」

「ペニスの反応……可愛い」

2Bが両手の手を使ってチンポをがつつり掴み、動かないように固定する

「さあ、みんな続きを」

一人はちゅっちゅとキスを続け、一人はぺろぺろと舐めている。さすがに4人同時は最初のキスだけで、代わる代わる『挨拶』を続ける

「では、私が見本を見せます。皆、しっかり出来るように」

『はい』

まるで軍隊の号令みたく、元気な返事が聞こえてくる。正座している太ももをゆつくり開いて、俺の頭をベッドに下ろし2Bが膝立ちになる。2Bのぬらぬらと湿ったオマッコが目一杯の迫力で見える。そのよだれを垂らした口はそのまま離れていったが、今度は俺のチンポを2Bががつつり啣え込んだ。

「はむ……れろれろ……」

『おおー！』

娘達から歓声があがる。それに気をよくしたのか、2Bが鼻息を荒くして頭を動かし

でした

「かあさま、お口が変な形に……」

「かーちゃん、変顔ー」

「ママ、ちんちん、大好き？」

「ペニスへの愛撫……ごくり」

何度か上下にしごいた後、根元までしつかり啜えてぴたりと止まる。2 Bが鼻だけで息をし、皆に喉を見るように指をさす。

「喉が膨らんで……」

「かーちゃん、大丈夫？」

「はあ、はあ、喉が、ペニスと一体化……」

「ちんちん、一杯」

嬉しそうに鼻で2 Bが笑うと、喉の上から俺のチンポを刺激する。優しくなでて舐められるところはべろべろと舐めまわす。ある程度満足したのか、ゆっくり引き抜かれていき、また亀頭だけ啜えられろと舐めて、ちゅぽんと音を立てて口から外れた

「はあーはあー……ここまではちよつと一苦労します。まずは先つぽを味わってください」

「かあさま、じゃあボクいちばんー！」

「そうですね。ここは産まれた順番がいいでしょう」

3H1が名乗りを上げる。他のメンバーが少し離れて、再度俺は2Bに膝枕される
「で、では。いきますー！」

いつも明るく、砕けた感じでしゃべる3Hだが緊張しているようだ。すーはーすー
はーと深呼吸をして

「はむ!!」

「いでー！」

……… 噛まれた………

「こらー！ 3H1勢いをつけすぎです」

「あう………とうさま、ごめん」

「あ、ああ。次はゆっくり、な？」

「うん………」

娘にフェラチオの指導をする両親。せ、性教育（実技）だな。

「貴女はしゃぶるより、舐めるほうがいいかもしれません。先を、こう、ぺろぺろと舐めてください」

「はい、かあさま」

そっと3Hにチンポを掴まれ、3Hの舌がれる、れろつと亀頭の裏を舐めてくる。

「お……う。ふう……」

「とうさま？ 痛い？」

「違いますよ3 H1。お父さんは気持ちいいんです」

「ほんと！ じゃあもつと舐める！」

両手で竿の部分の部分を固定され、さつきより早く亀頭をペロペロ舐めてくる。

「可愛いですよ3 H1。でもこのまま続けると射精してしまうので、次の子に変わって下さい」

「そ、それは俺がきついぞ？」

「お父さん、娘の口に出したいなんて……」

「い、いやこれで、その」

「冗談です。大切なパパミルクは全部娘マンコに出す手はずなので、今は我慢して」

「お、おう」

3 Hが、最後にペロンと一舐めして離れる。次は4 H、言葉使いがちよつと独特で、配が薄く気が付いたら近くにいることが多い。

「おお？ おー？ ……すんすん……」

指でつまんでチンポで遊ぶ。左右にレバーのように動かしたり、先っぽをつまんだり。匂いを嗅いで色々試しているようだ。

「4H1、パパチンポで遊ぶのはかまいませんが、今はフェラチオをしなさい」
「うん。ぱばちんちん、じゅぼじゅぼする」

ゆっくり口が開かれて、するつと口に入っていた。ちゅぼちゅぼと少し顔が動く
音が聞こえる

「んっふ。んっふ」

口の動きに合わせての呼吸が響く。3Hには悪いが、さつきより刺激が強いせいで
そうになる。が

「4H1、そこまです。射精しそうなので離しなさい」

「ぶはー。うー。ぱばちんちん、もっとおしゃぶりしたい」

2Bがすっかり根元を握り、出ないようにしている。しかし、やっぱきついなこれ
……

「つ、2B? 一回ぐらいお前の口にだな……」

「一日遅れたバツ」

「う……」

「次わたしー!」

手をびしつと上げて、5Hが来る。普段農作業で日差しにさらされているのに、3H
や4Hのように日焼けはないが、鼻の上のそばかすが、なんともお転婆な感じがして

チャーミングだ

「私はいちちゃんの真似するねー」

そう言つて、ぱくつと亀頭を啜える。そしてそのまま動かず、ひたすら亀頭だけペロペロ舐め続ける

「ふむ。ライブラリーで予習させたのはよかったようだ」

「ええ……俺たちの行為、娘に見られたの？」

「ん？ 任務に置いて情報の確認、研鑽は大事だ。寝る前にみんなと見るのが日課だ」

どこの世界に、両親の子作りを見たがる子が……ここにいますか

こうしている間にも5Hはひたすら亀頭を舐める。一応、腰に力を入れて射精しないようにしているがこれは……

「ぶはー」

と不意に終わってしまった。つい腰がかくかくと動いた

「とーちゃんごめん。出そうだった」

「う、うん。手加減してくれたんだな」

「うん。ほんとは飲みたかったけど、6Hも待つてるから」

まだチンポは発射寸前で、ぴくぴくと動いている。落ち着くまで待った瞬間「俺のチンポが見えなくなった」

「んふ！——」

「6H1！ そんないきなり根元まで……」

「おおおおお」

急な刺激に今度こそ出そうになったが、2Bがしっかりと握っているため、6Hの口、いや、喉の中でびくびくふるえている

娘たちの中で唯一眼鏡をかけた子。普段は俺の世話やメイドのような立ち振る舞いから、色々お願いすることも多いが、こんなに積極的に来るとは思わなかった

「6H1はどうやら、奉仕に快感を覚えるようだ。いきなり喉まで飲み込めるとは……ライバル出現か？」

娘に変な嫉妬をせんでください。貴女母親ですよ？ 2B。しかし6Hは動かずそのままじっとしている。

「ふー……ふー……」

鼻息がお腹にあたつてくすぐつたい。何かを確かめるように6Hは喉までチンポをくわえ込んだまま動かない

「逆に考えれば、私の娘の中でフェラチオが一番好きな娘になれそうだ」

父親的には複雑な気持ちだが、彼女達にとつては意味のある称号らしく、それを聞いた6H1の体がびくびくんと痙攣した

「おお！ 6H11だったの？」

「体びくびく、気持ちよさそう」

「すげー……」

こてん、と脱力してもチンポを抜かないのはさすがだと思う。仕方ないので、俺が動いて抜いていくが、娘の口からずるずるとチンポが抜けるのを見ると、それだけで出そうになる

「あひ……お父さん……ペニス……」

うわごとのようにつぶやく6H。どうしてこんなスケベな娘に育ったのか？ これがわからない

「さて、マスター？ いえお父さん。これから我慢した分、たっぷり出していただきませう」

「やったー！」

「ちんちん、びゅびゅ」

「おお！ 種付け！」

「あひ……あへ……」

父親に種付け『してもらえる』そんなことに喜ぶのはここぐらいだろう。

でも、俺の中にある欲望もそうだが、単純に嬉しい。そうして夜は更けていく

一家団欒（2B家） 後編

「では、次の段階に入ります」

全員の『挨拶』をやつと終わる。正直チンポがかなり辛い。計5人分のフェラチオを受けて一発も出せてない

「はーい！ ボク騎乗位でとうさま犯したい！」

娘よ。君は超爆弾発言しているのわかっているかい？

「ええ。私ではその体位はきつい、誰かにしてもらおうと考えていた」

「パパ、乗る。お馬さんごっこしたい！」

「とーちゃんの肩車もいいけど……乗ってみたい」

「騎乗位は奉仕の基本」

うん。うちの娘たちよ、エロく育てて私は……嬉しい？

いそいそと3Hが準備のため俺の上に乗ってくる。2Bは膝枕をやめ何か準備をしているようだ

「うっわー……とうさまチンポ、さつきより大きくない？」

「色々と、ね？」

あれだけガマンさせられたら、いつもより大きくなってるような錯覚すらある。宣言通り、3 Hが俺の上に乗り、チンポを自分のマンコにあてがって、くちくちと愛撫をしている

「チンポあつつーい」

「3姉早くする、次私」

「順番……大事だけどつらいよー」

「はあはあ……父さんペニスが姉の中に……はあはあ」

若干一名、なんかおかしい気もするが、すでに娘にまたがれている時点でもう気にしないほうがいいと思った

「とうさま？ ちんぽ食べていい？」

娘のおねだり。それ自身は普通なのに、やってることは普通じゃない。でも、本人は真剣で許可が下りればすぐにでも挿入できるように、位置を調整している

「ほら、お父さん。娘の初めての人になってあげないと」

「ああ……3 H？ いいぞ腰を下ろしなさい」

「はい！ つつ！」

ずぶん。なんとも間の抜けた音と感触だったが3 Hの、娘の中へ全部収まった。もちろん処女だったため抵抗を感じ、血が流れる。痛みのためか3 Hが俺の上にしなだれて

固まっている

「ちよつと痛かった……」

「そうか……ありがとう、頑張ったな」

「うん……とうさま」

3Hの頭をゆつくり撫でて落ち着くのをまつ。しかし、2Bのスパルタ性教育は続く
「3Hおめでとう。これで貴女も父親専用繁殖娘となりました。これからは沢山の子供を産むように」

「はい。かあさま」

「じゃあ。お尻の処女は母親の私が」

「はい……」

うん？ どういう事だ？ 2Bは女性型アンドロイドだし、今まで何かしらチンポがついてたことなどないぞ？ と思い2Bの声がする方向へ視線を送ると……生えている

「あの天才博士、中々面白いものを。うんふ。作ってくれた。もつと研究費をあげないと……」

よく見ると、腰のあたりに布のようなものが巻き付いている。おそらくレズセックス用のデイルドーのようなものだろうが、2Bも時々腰を揺らしている

「これは、内側にもニセチンポがついてて、あん。自分も気持ちよくなれる」

「かあさまチンポ……おもしろい」

「では、これが2 B家の『共同作業』です」

俺の上に乗っている3 Hのお尻に向かって、母親である2 Bがチンポをあてがっている。2 Bが3 Hの腰を掴み、アナルへチンポをあてがい腰をゆすっている。3 Hの興奮した呼吸が俺の顔に当たる。そうして、くにくにといった感じで娘のアナルに母チンポをあてがっているはずぬぬと、入って行き俺のチンポにもニセチンポの感触がずずずと伝わってきた

「!! か、あさ、ま……」

「う……ふ……3 H」

「おおお」

俺の上に娘が騎乗位で逆レイプして、そのアナルを実の母がレイプする

もう言葉の暴力が、性的興奮しかならない危険な空間だが、これが俺たちの家族。これが『共同作業』

「直接的な感触はないが、引こうとするとこつちのデイルドも引つ張られる。3 Hのアナルもいい鍛え方してる」

ずりずりと2 Bが動く、俺のチンポにもずりずりと刺激が伝わる

「かあさま……待って、動けない……」

「それは大変。お父さんが気持ちよくなれない」

すつと2Bが3Hの腰を掴んだまま動きを止める。3Hがはーはーと息を切らせているが、すぐに整えて腰を上下に動かします。ちゅっちゅ。ぐっちゅぐちゅ。じゅっちゅじゅっちゅと、どんどん腰の動きが加速していき、それに伴い音も大きくなってきました

「とうさまああ、かあさまああ」

一心不乱に腰を振られると、もう限界だった

「3H出る!」

「はいいいい!」

「マスター! 娘へ子供を授けてください!」

つい3Hの腰を掴んで腰を上げてしまう。びゅくびゅくと、実の娘の膣内へ射精。妊娠させるために腰を離さず、最後の一滴まで注ぎ込む

「と、うさ、まあ……」

「ああ、素敵です。父親によって娘が種付けされる。これが家族の絆」

それは違うものだけど、この特別な俺だけの絆は離したくない。

「さあ3H1、お疲れ様。その注ぎ込まれる感触は最高ですが、今日の所は順番が待って

ます。残念だと思っうけど抜きます」

「う……ん。かあさ、ま」

母親にアナルを貫かれたまま、3Hの体が持ちあがる。ずるずるとチンポが抜けていき、ぽんっとおかしい音が聞こえる。

「ふふ、頑張りましたね3H1。きつと無事妊娠してますよ」

「うん……嬉しい」

アナルを母親に貫かれたまま、お腹を撫でる3H。美しくも淫靡な姿にため息が漏れる

「ぱーぱ、ちんちん、ぱっぱ、ちんちん。4Hまんこでずっぱずっぱー」

謎の歌を歌いながら、4Hが俺のチンポを優しくしごく。3Hを近くに寝かしつけて2Bが再度近づく

「4H1、お父さんちんちんは準備できてますから、早速挿入準備に移ってください」
「ん。パパ、またぐ」

二人目の娘がまた俺の上にまたがって、チンポにマンコをあてがう。4Hは迷うことなくそのまま一気に挿入した。

「ん！……ん、ん」

やはり痛いのか、ぴったり腰がくっついたまま4Hの体がこわばる。2Bが後ろにま

わり4Hの頭や全身を優しく撫でて、そのまま娘のアナルへ挿入を開始する

「マ！ マ、ちんちん……」

「4Hも素敵なアナル。きつとお父さんのチンポを啜えて離さない」

二人目の処女貫通。内臓越しに伝わる2Bのデイルドーの固さ。その挿入に4Hが苦しくそうに抱きついてきた。俺の背中に手足を回そうとしてきたので、腰を上げて手伝つてやる。そういうえばよく抱きついて来る娘だったなあと懐かしんだ。

「パパあ……ちゅー、するー」

背中に回した手を次は俺の後頭部にうつし、キスをしてくる。唇同士が触れ合う軽いキスから、ペロペロと唇を舐めたり。そして、俺の口の中を4Hの舌が暴れ回る

「4H。動かないとパパは射精しない」

「うん。動かない。ママ、動いて」

「しかし、それでは……」

「私、パパのちんちんケース。だから、動いちゃだめ」

「貴女も勉強熱心ですね……」

さつきから動かないのは、この娘なりのルールがあつたからか。

「娘の決意。受け取りました。ママが思いつきり動きます」

「うん。ママちんちん、ずっちゅずっちゅして」

2Bが4Hの腰をがっしり掴み、いきなり大きく腰を振り出した。

ずばんずばんと腰を打ち付ける音が鳴り響く

「ん！ んん！」

4Hが俺にしがみついて苦しそうにしている。

「2B、もう少し加減を……」

「い、いえ。マスター！ この娘の望みがこれです！」

「ん！ うん！ ちんちんケース！ 絶対離れない！」

可愛くて頭を抱きしめて撫でる。4Hのしがみつく手足に力が入ると、オマンコも締め付けて来て

「パパチンポが、ビクビクして、きました、ね！」

「ああ、出る！」

「んん——！」

今日一番のしがみつきに合わせたのか、俺の射精に合わせたのか。見事に一緒に絶頂した

4Hが俺の上で息を切らしている。いつまでも撫でていたいと思うがまだ二人目。余韻を楽しみつつ、またもや母親にアナルをつかれた娘から俺のチンポ抜かれる

「この子もまだまだ。ではマスター次です」

「お、おう……」

4Hを優しくベッドに寝かしつつ、次の5Hを連れてくる。手をつないで歩く姿は仲の良い親娘にしか見えない。全裸だけど

「かーちゃん。私も4姉みたいにして欲しい」

「うん？ 貴女もチンポケースに？」

「ううん。オナホだっけ？ あんな感じにやって欲しい。例えばこんな感じに……」

「ほうほう……確かにそれなら……」

親娘の仲睦まじい内緒話が繰り広げられる。いい光景だなー

「いいアイデア。それで行きます」

5Hを抱え上げる。小さな子供をおしっこさせるように抱えてるから、5Hのアソコは丸見えだ。

「では、今度はママから貰うよ？」

「うん……かーちゃんお願い」

更に5Hを持ち上げて、ディルドーがアナルに当たる。「ふっ！」と2Bが気合を入れて動くと半分ぐらい5Hにアナルに入った。「ん！ んんー！」と急な挿入に驚いたのか、5Hは両手をぎゅつと掴み耐える。

「全部入れるつもりだったけど、締め付けて来て無理だった。流石私の娘」

「うっ……ふっ。腰とお尻ならかーちゃんに、も、負けない。あん」

「それならず、全部飲み込みなさい」

再度2Bが腰を突き上げて全部押し込む。処女の娘のアナルに、母親のチンポが刺さってる。それだけでもチンポは暴発しそうだ。5Hがいきなり奥に入れられて驚いたようだがすぐに息を整えた

「かーちゃん……さっきの通りにい……」

「ええ。わかりました」

母チンポを根元までくわえ込んだまま、抱えられて5Hが俺の上に持つてこられる。足を抱えられるから5Hは身動きは取れない。その恰好のまま、俺のチンポの上に5Hのマンコがあてがわれ

「5H1、覚悟してください」

「うん……私、とーちゃんのモノになる」

その決意を聞いた2Bは、そのまま一気に俺のチンポに5Hを挿入した。

「んー!!!」

処女貫通の痛みに体をこわばらせるが、2Bはかまわず5Hを上下に動かす。まさしく道具のように、まさしく「オナホ」のように

「2B！これはっ、は」

流石に娘をこのように扱う事にちよつとイラつと来たが、それを制したのは本人だつた

「とーちゃん！ これ、いい！ 私、とーちゃんのオモチャ、かーちゃんのオモチャ！」
 「ああ！ 5H！ 貴女の献身的な姿勢。すごい！」

色々おかしい、けど、5Hの嬉しそうな蕩けた表情がそれをかき消す。ぼつちゅぼつちゅと激しい大きな音が響き大きな刺激を受けるともう我慢なんかできなくて

「駄目だ……出る！」

「とーちゃん、いい！ 出して！」

「娘オナホマンコに出して！」

ぴたり。と動きが止まった気がした。実際は2Bが5Hの体をしっかりと押さえこみ、俺に押し付けていた

5Hの膣内へ遠慮なく射精する。先の二人に負けないぐらい出た気がする

「んひ！ ……お腹……熱い！」

「それが膣内射精。5H1が父親のオナホになれた証明」

「うん……私、これからとーちゃんのもの……」

もう射精は終わっているが5Hは自分から動かず、抜いてもらうのを待っているようだ

「とーちちゃん？ 娘オナホ、使い心地よかった？」

「あ、ああ。一杯出たろ？」

「うん。とーちちゃんの子種汁お腹一杯。これからもたくさん使って？」

「素敵な親娘愛。お父さん？ これからも遠慮なく使うといい」

娘を使う。意味不明な言葉だが、この家族にだけ伝わる言葉

「さあ。次も待つてるから抜くよ？ 5 H」

そう言つて5 Hを持ち上げて抜いていく。ちゅぽんと抜けたちんぽに向かって6 Hが顔がくつつくぐらい近づいて見つめる

「はあはあ。3人の娘バージンを奪つた、父さんペニス……すごい……はあはあ」

触れるか触れないか、ぎりぎりの距離で見ているから、6 Hの鼻息が当たってくすぐったい

「ほら6 H1。見てるだけでは駄目だよ」

「うん。母さん。これから父さんペニスにご奉仕します」

6 Hが他の娘と同じように俺の上に乗る。しかし、その格好は大きく足を広げがにまたで両手は頭の後ろに組んでいる。

「母さんごめん。手伝つて欲しい」

「ふふ。はいはい」

2 Bが俺のチンポを掴み、6 Hのオマンコへ狙いを定める。6 Hが少し腰を落とし、先っぽだけ入る

「か、母さん。ありがとう。後は、自分で、出来ます」

格好はそのままで6 Hが腰を回転させながらチンポを飲み込んでいく。ゆっくり、ゆっくりチンポが娘の中へ消えてゆく。途中、処女膜をゆっくり破りながら入っていく。その痛みに力が入っているのか、マンコがきゅつと締まりつつも、円を描きながら飲み込んでいくのは変わらない。

「父さん、ペニス。全部、入れました」

「あ、ああ。大丈夫か？」

「はい。問題ありません。ああ……これで私は、間接的に全員の処女をもらえたのですね……」

「なるほど。その発想はなかった」

2 Bさん？ 普通はその発想ありえないからね？

「父さん。娘メイドのご奉仕、思う存分味わって下さい」

「め、メイド？」

「父さんのお世話をするのは、メイドと言うのを見ました」

「ふふ、そうね。じゃあ6 H1、お父さんチンポへのご奉仕開始下さい」

「はい。母さん」

根元までチンポを咥えこんだまま、腰が円を描く。今までの強い快感と違い、なじませるように腰を動かす。

「う……んふう……で、では、次は私の子宮マンコを、お楽しみ下さい」
「え？」

両手を自分のお腹へ当ててマッサージのように自分のお腹を揉んでいる6H。何度かその動きを繰り返すと、亀頭に再度挿入感を感じた

「おお……」

「あ、はああ。父さん、見て？」

6Hが、お腹に当てた手に力を入れて押し込んで行くと、お腹少し凹み、おへその下あたりが小さく膨らんでいる。その位置は……

「ここに、父さんの『頭』が入ってます。ふふふ、可愛い。くにくにー」

6Hが膨らんでいる部分を人差し指で遊ぶ。お腹越してもコロコロと触られてる感が伝わる。間接的とは言え、一番敏感な部分に刺激を受けて、つい腰を引くがまったく抜けなかった。

「すごい食いつきだ。まるでスッポンだな」

「すっぽん？」

「ポッド、それは何？」

「亀と呼ばれる生物に酷似した生き物。身は食用であり、特徴として『一度噛み付くと雷が鳴るまで離さない』とある」

「あら？ それじゃあ私は、雷が鳴るまで父さんのペニスを啜えたままですね」

「それは、ダメ………よ！」

「うんっ!? ふうー」

2Bが不意を突いて6Hのアナルを貫く。亀頭に噛み付いている子宮口が、きゅっと締めまり出そうになった。

「母さん。ちよつとひどいです」

「貴女がわがママを言うから」

「パパちゃんケースの座は渡さない」

「そ、それならとーちゃんオナホ！」

「うーボクどうしよ……」

「これが家族会議かー」

「さ、6H1。『次がある』から、種付けしてもらいなさい」

「はい。母さん。父さん、お願いいたします」

俺の胸に両手をつけて土下座のように頭を乗せると、オマンコと子宮がぐにぐに波打

ちだした。

「おお？ おう、これ、は？」

「うふ、あはあ、ううん」

「す、すごい6H1、私動いてないのに、チンポが入りしてる」

6Hのお腹が、膨らんでは凹みを繰り返している。この娘は動かずともチンポをしごく事が出来るのか……

「と、うさん。私、もう！」

「あ、ああ！ チンポが食われる！」

「はい！ 頂きますう！」

多分、一番力を入れたんだろう。手で掴まれてるかと思うぐらいぎゅつと感じて我慢出来ず射精した。

「!!」

6Hも射精を受けてビクビクと痙攣している。射精が終わり、2Bが6Hを持ち上げてチンポを抜いて行くが、先っぽは食いつかれたまま抜けて来た。すると

「あら？ 6H1の子宮は食いしん坊みたい。チンポ啜えて離さないから、外に出てしまった」

チンポはマンコから抜けたが、子宮脱の状態になったため、亀頭は子宮にハマったま

ま出てきた。

「父さん……ご馳走様」

6Hがそう挨拶すると、少し緩む感じがして腰を引くと、ちゆるんと抜けた。

「あん！ 出ちゃう」

慌てて6Hが指を子宮に入れて蓋をする。そのまま、うん、ふうと声を出しつつ子宮をしまつて行く

「これで皆種付け終わりましたね。じゃあ最後は……」

6Hをベッドに寝かし、2Bが顔を赤らめながら言う。例のデイルドーは着けたままお尻をこつちに向けて、初めての時のようにお尻を両手で広げ、よく見えるようにしてくれる。相変わらず2Bのお尻は素敵だ。ホワイトや1Hの胸ばかり目がいくが、たまにレオタードのような服装の時、俺の目の前でお尻を揺らしながら歩かれると、つい触ってしまう。しかも娘を産んでからか前より大きく柔らかくなったようだ。毎日揉んでる俺が言うから間違いない

「マスター。貴方専用の繁殖アナル。どうぞご利用下さい」

さらに、つん、とお尻を突き出してくる。アナルは呼吸をするようにぱくぱく動いており、チンポを当てるとなん抵抗も無く挿入出来た。内臓の壁越しにさつきと同じような固いモノ感じる。

「ああ……やっぱりマスターチンポは、下の口で味わうのが一番です」

「2Bのお尻は、いつ味わっても最高だよ」

「ましゆたあああ……」

「うわー、かあさまのあんな顔、初めて見た」

「パパちんちん、最強」

両親のセックスを子供達がガン見する。流石に恥ずかしくなり娘たちに一言言おうと振り向くと……

なぜ、みんな、それ、つけてるの？

2Bが今身に着けている双頭デイルドーと思われる下着を穿いている。6Hと5Hは2Bと同じデザイン。

4Hにいたっては二本ついている。しかし、3Hだけ身に着けてない

「さあ、次は順番を逆で起こさないます。6H1こちらに」

「はい。母さん」

6Hがこちらに近づき、後ろを振り向く。自分で2Bのデイルド当てて腰を器用に上下に振ってそれを挿入する。

「中で二本がゴリゴリとぶつかる。でも父さんペニスの熱い方がいいです」

「そう言わないで。さ、5H1続いて」

「うん。今度は妹チンポかー」

先ほどと同じように5Hが6Hにお尻を向けて近づき、そのディルドーをアナルへ受け入れる

「うう……ん。6H1の言う通り、とーちゃんチンポが一番いい」

「二人とも、それは当たり前です」

『はい』

続いて4Hが5Hのディルドーを自分のお尻に当てるが、挿入に迷っているようだ

「ううー。パパちゃんケース……うー」

「4H1、妹にも甘えさせてあげなさい」

「うん……。5H1、かもんかもん」

「4姉、行くよ?」

5Hのディルドーも4Hのアナルへ入って行く、そして……

「さあ3H1、長女として、全部受け止めなさい」

「うん。かあさま。ボクがんばる」

4Hについているディルドーは二本。つまり彼女の両方に入るわけで……。3Hも同じく、背中を向けて4Hへ近づいていく。

「いくよ? 4H1?」

「いくぜー！ 3姉ー！」

二本ともずるると音が聞こえて入って行った。全員がつながった瞬間、2Bとその娘達からいろんな嬌声があがった。

「ああ！ マスターチンポが入っているのに、入れている？ いいえ、ニセチンポも何本も入ってる!？」

「とうさまチンポが熱いついい」

「パパちんちん！ 私、ちんちんケース！」

「やっぱり、とーちゃんチンポ用オナホだ……」

「全部キター！ 全部気持ちいい」

どうやら、全部つながったことで神経までもリンクしたようだ。俺も負けじとゆっくり動くが、もうどの感触を感じているかわからない。2Bのケツマンコに入れているはずなのに、他のオマンコのような感触もするような錯覚がする。きつと、目の前で全部の娘がつながっているからだと思う。

2Bをはじめとして、全員思い思いふ腰を動かしている。6Hは、妹がオナホという事で乱暴に、5Hはちんちんケースという事で動かず、腰で円を描くように奥に刺激を。4Hは二本を器用にあやつり姉の二穴を蹂躪している。そして

「マスターああ、マスターああああ」

一番愛しい2Bは、決してチンポが抜けないように絶妙に加減して、しつかりアナルに力を入れつつ、末っ子のアナルを犯す。もう何をしても気持ちいい。ずっとこうしたいが、男には残念ながら限界がある

「出る出る出るうー!」

「はい! 来てください種付けしてくださいポテ腹にしてくださいいいい!」

早口で2Bがまくしたててくる、俺も我慢できず腰を掴んで思いつきりチンポをぶち込んで射精した

普通の射精のはず。でもリットル級が出たんじゃないかと思うぐらい、思いつきり注いだ気がする。感覚のリンクは続いてたらしく、4人の娘も絶叫と言つていいぐらい大声を出して絶頂している

「はあ……はあ……はあ……」

「あ……あ……」

「……」

すでに気を失っているもの、まだ絶頂の余韻で体が痙攣しているもの。娘たちのそんな淫らな恰好を見つつ、まだ抜けない、抜きたくないチンポを少し動かす

「ま、すたあ」

「はあ……はあ……2B」

「……………」

一度全員離れたが、再度ベッドの上でみんなでつながって今日は寝た。
一家団欒。この後も5人の女たちに種付けしまくって、今度は腰を痛めて動けなくなつたのであつた

※Hシリーズ第一世代の妊娠を確認※

※……0世代と同じく高速育成を開始……エラー※

※最速でも20日必要。人間因子が原因と思われる※

※母体への負担を考慮し、20日で出産できるように調整※

※第2世代以降の事をシミュレーション開始※

男の価値、オスの価値

「なあ？ 俺も一緒に戦う事は出来ないよな？」

「ダメです」

2Bが即答する。やつぱりそうだよな……実際、3Hの狩りや4Hの釣りにさえ連れて行つて貰えない。アジトを出てすぐの水場でも、周りの機械生命体を排除してからとなっている

「マスターは、安心して私達へ種付けを行なって頂ければ構わない」

「ええ。ご主人様に種付けして頂くのが私達の使命ですから」

今晚は夫婦？ 水入らずという事らしく、2Bとホワイトの三人で部屋にいる。

「いきなりどうしたの？」

「いやーなんと言うか、こう、ヒモ的な生活もいいんだけど、なんか男が働かないっていうのは……」

「あら？ 先日も腰を痛めるほど働かれたではないですか？」

「いや、そういうのじゃ無くて……」

女の子、さらに言えば娘でさえ戦っているのに、父親の俺が何というか。ちよつとし

たプライドがだな……

「少なくとも、機械生命体により、アダムへマスターの情報が行く可能性があるかぎり、今はこのアジトを出るのも危険です」

「ええ。情報にあった、アンドロイドに酷似した機械生命体ですね」

「アダム？ 旧約聖書じゃあるまいに……」

「おそらく、そこからとっているのですが、アイツの目的は『人間を殺して観察』する」と」

「なんとまあ、サイコパスなやつ……」

ちよつと背筋が寒くなる話を聞いた。

「おう！ 2B?」

「ふふ。なんですか？ マスター?」

ベッドに座っている俺の背後に、ぴったりくっついてる2Bが、悪戯っぽく笑う。その手は俺のチンポをしごいて、急に力を入れられてさっきの反応と言うわけだ

「ご主人様。もっと子供を増やせば、機械生命体への対抗にもなります。それがご主人様の戦い方と思います」

ホワイトが前から近づいて、目の前いや、口の前におっぱいを差し出してくる。

「以前、母乳を飲みたいとおっしゃっておられましたね?」

「あ、いや、あれは……」

「私も出るのに……」

後ろにくつついている2Bのおっぱいからは、俺の背中とはさまって母乳吹き出ている。すでに背中はヌルヌルで気持ちいい。

ホワイトが自分のおっぱいに手をやり、根本から絞るように先へ持つて行くと

「うおっ!」

母乳が顔にかかった。ミルクの濃い匂いが鼻をつく。

「そう言えば私も母乳飲んだことない」

「あら?　じゃあ二人で飲みます?」

片方のおっぱいを俺の口へ、2Bが俺の肩に顔を乗せて、もう片方を口に出来る姿勢をとる

「おう……」

ため息しか出ない。でも、ちよつぱり恥ずかしさで口にするのを迷っていると2Bが肩越しに吸いついた

「ちよつ!　うん……2B?　ご主人様を差し置いて……もう」

「んっんっ……マスター、迷ってるみたいだから、見本を見せた。あーん。かぶっ」

2Bが飲む動きに合わせて、ホワイトが自分のおっぱいを揉む。その間ももう片方が

ら、ぴゅぴゅと母乳が出て顔にかかる。頭がぼーっとして来て、つい目の前の乳首を加える。横から「むー」という不満な声が聞こえるが……後で2Bのも飲ませてもらうと謎結論にいたった

頭をゆっくり撫でてくれるホワイト。後の2Bは片手でチンポをしごきつつ、空いた片手は体をまさぐってくる

「ご主人様。悩みや辛い思いをされている事。悔しいですが今の私にはわかりません。こうして、沢山子を授けて下さる貴方はとて素晴らしい人です」

「ぶはっ。戦うのは私や娘のする事。マスターは私達のそばにいて欲しい」
ゆっくり乳首から口を離し、男の小さなプライドを、思いを口にする

「皆が時々傷を負って帰ってくるたび、俺は自分情けないと感じる。俺が生きていた時代じゃないけど、男は女を守るものだって思ってる。でも肝心の俺は、こうしていい思いをして、美人に囲まれて娘も出来て……なんて言うか『オス』じゃなくて『男』としていたいんだ」

2Bがチンポから手を離し両手で俺を抱きしめて、ホワイトが胸の谷間に俺の頭を挟み抱きしめる

「ご主人様。それは半分間違いです」

「うん」

二人が同調して続ける

「貴方はこうして私達に『命を作る』幸せを教えてくださいました」

「私も、戦闘用として壊すだけなのに、娘産んだ時本当に、こう、『胸の中心が温かくなつた』」

「もちろん繁殖としてオスの部分を求めています、私達は……」

『貴方を男性として愛しています』

涙が溢れた。何に泣いたのかわからないでも。とにかく泣いた。この後二人の母乳を飲んだり、フエラで色々出したりとあつたけど。

なんか久しぶりに、寝れた気がした

ちよつと休憩。少し前進。大きな変化

翌朝。昨日はちよつと恥ずかしかったが、思いっきり泣いてスッキリしたみたいだ。いい思いをしているとは感じてたけど、意外にストレスはあったようだ

「お？　とうさま、おはよー」

「3Hおはよう」

先日の『一家団欒』の事はどこ吹く風。他の娘達も普通に過ごしている。しかし普通じゃない状態にもなっている

「……とー」

「あたっ！」

「こらー！　4Hー！　『小さくなった』からと言っていきなり飛びつかない」

「3姉は『大きく』なった。肩車も出来ない。しっしっし」

「うぐ」

そう2Bの娘達の変化……成長？　したのだ

2Bの娘達に種付けして二日後の朝、それは起こった。

まず長女の3H。彼女は身長がホワイトを越し恐らく180前後。褐色の肌はその

ままでより体が筋肉質になり、戦闘面で頼りになる雰囲気を出している。逆に俺の方に飛びついてきた4H。彼女の身長は130ほどに縮み、子供のように変化した。

「うーん……望んだタイミング？ でしょうか？」

「タイミング？」

その変化に皆驚き、9Sのスクランや診断を行った所、特に異常は見られず、人間の部分が何か作用したのでは？ という推測になった

「でも、1Hや2Hは何も変わってないだろ？」

「それは多分、私の影響かもしれませんが。私は産む前からおっぱいを大きくしたいとか、2Bのお尻を主人様が楽しんでいるのをうらやましく思っていました」

「だから、産んだ時はすでに『望んだタイミング』だったと？」

「ええ。ですが2Bの娘達は、肌の色や容姿に差異はあれど、私の娘達のように大きな変化はありませんでした」

「そうだな。3Hと4Hは双子のように見えた」

「きつと2Bがそこまで強く望まず、普通に産んだため差が出なかつたのでしよう。しかし、先日の一家団欒の時、それぞれ娘達が違う処女喪失を経験したため、皆が何かを望んだのかもしれませんが」

「ちーがイーまるすー。どこでもとーちゃんチンポをしごける、全身オナホ仕様なんですー」

言い争いをしながらも、下着に手をかけたところで助けが入った

「姉さん達。父さんが困ってます。やめてください」

ちなみに3Hは、「とーちゃんチンポ」と言いながら顔を赤らめて凝視している。声をかけたのは6H。メガネはそのまま髪が伸び、全体的に大人しい感じに変わった。……なぜかりードのついた首輪と、胸を丸出しにして乳首に丸いピアス、それと首輪を紐のようなもので繋いであるが……

「あ、痴女」

「いいえ。これがメイドの正装と文献で見ました」

確かに、『そこ』以外はメイド服で、よく似合ってるんだけど……なんのエロゲかエロ漫画を参考にしたんだろう……？

「みんな、今日の仕事はまだでしょう？ マスターを困らせない」

『はーい』

父親の言うことは聞いてくれないのね……

「あう！ ちよ!?! 2B!?!」

「貴女たち、妊娠しているのだからオマンコは駄目。子種が欲しいなら口にしなさい。」

あーん」

『その手があったか』

娘達よ、母親のフェラに関心しないで下さい。熱心に娘へフェラチオ指導する2Bをよそに、どこか他人事のように感じていた俺だった……この後2回ほど絞られたけど

「うーん、一応、手がないことは無いんだが……」

「ちよつとどころじゃなくて危険です」

「ちなみにどんな方法なんだ？」

昨日、2Bとホワイトに相談した「俺も戦う」という話。戦闘に関してはあきらめたが、それでも皆の戦ってるそばで応援とかできないか？ と今度はデボルとポボルに相談した。

「ちよいと昔の技術にな、『魂と体』を別けるって言うのがあつてな」

「でも、結局戻れないとかなんとかでイマイちな話になったの」

「魂つて……急にオカルトじみてきたな」

「それに、理由があつて別けるだけだから、基本は元の体に戻すのが目的なの」

「こそ。それを一応応用すればなんとかだけど……」

「最悪戻れない？」

もしも、魂の出し入れが自由ならって考えると体は無事なんだろうけど、「魂の入った器」が死んだらどうなるんだ？

「魂の部分はもう触れないけど、神経というか感覚の共有っぽいのはできるんだよね」

「ああ。でも、私達のように自我のあるアンドロイドには色々邪魔が入って無理なんだよ」

「あーそうなのか……」

何となくわかる。そら自分の中に何か別の人がいれば、気持ち悪いよな

「出来たとしても、感覚が2倍になったりして、こつちもきついんだよ」

「そう。だから、『一応』なの」

「うーん……うん？ 一応？」

この二人なら、出来ないことは出来ないって言うよな？

「方法はあるってことか？」

「うん……」

「でも……なあ」

「話だけでも聞かせてくれ、あまりに危険なら忘れることにする」

「……デボル？」

「うん……マスターの望みなら、お話だけでも……」

「ありがとう」

要約すると2つの方法があるそうだ

その1 「自我の無いアンドロイド、若しくは壊れたアンドロイドへ『接続』する」

その2 「自分の子供の自我が芽生える前に、『接続』する」

その2は……子供を間接的に殺すからやりたくないな。この方法は却下だ

その1も自我の無いアンドロイドなんていないだろうし、壊れたのだと繋げても意味がないな……

「だから、一応、なのか……」

「そう。出来ないことはないけど、って話」

「うん……デボルちよつと……」

「あん？　なんだよ？」

「あのね……」

二人が通信？　を始める。こうなると人間の俺では話に入れない。少し待つとデボルが大声を上げた

「確かにそれ、できつけど、普通にやばいぞ?!」

「うん……でも、現状これが一番安全」

「そら、まあ……」

「何？ 何か方法があるの？」

『……………』

二人のアンドロイドが見つめ合って、同時にうなづく

「感情が凍結されている、男型アンドロイドに接続すれば、一番負担がないと思う」
それもまた、危険な賭けであろうと、双子の表情が語っていた

主人公参戦！（仮

2Bとホワイトのいたらだら寝室。

以前、二人の前で泣いてしまったことから、この二人と寝る時は、特にセックスはな
く……その、授乳とかフェラとかなんか二人が全力で甘やかしてくる

そんな中、次の任務に関しての話が出てきた

「ぐく、ぐく、ぐく……」

「ま、マスター。私の母乳を楽しんでいるところすみませんが、今日は種付けが……でき
ません」

「んぷ……んぷ……じゆるじゆる……じゅぼじゅぼ」

俺は2Bの母乳を飲みつつ、ホワイトのフェラを受けてる状態。すごく残念そうな2
Bの声のが続く

「次は、レジスタンスの補給……うん。ま、マスター？ 話をあつはあ……」

つい、飲んでいる乳首を嘔んで話を遮ってしまう。それに対してホワイトが逆に反応
して、フェラを強くする

「ん！ んん！ ……ぶはっ……ちよ、ホワイト？」

「じゆるじゆる……ぷはあ……話を聞かないからですよ？　ご主人様？　はぷ。もごも
い」

フェエラをすることはやめず、少し力を緩めたホワイト。それに続いて2Bが話を続ける

「今度の任務で遠出をします。レジスタンスの補給船の護衛なんですが……」

「うん？　戦闘ぐらいなら妊娠しても……」

「海の上での戦いが想定されます。そして今回は10日を超える可能性があります。なので……」

「ああ、そっか。途中で産む可能性があるとなると……」

「はい……」

2Bが、今まで見たことないような悲しい顔をする。つい先日ホワイトが7Hを産み、2Bが8Hを産む。そして今日のはてつきり新たな種付けと、ちよつと期待していた。「はい。なので私も我慢します……」

「2B……」

彼女の頬を優しく撫でる。いつもはここまで悲しそうな表情をしない2Bに対して、かなり胸がどきどきしてしまった

「マスターああ……」

2Bの「女性」というかメスというか、この蕩けた表情は何度見ても癖になる。でも、今回は俺もちよつと考えがあつて『あの事』を相談する

「デボルとポポルに相談したことがあつて……」

話を告げた後に、ホワイトにチンポを結構な勢いで噛まれた

「いい!!」

「んつつぶ……ご主人様? 前にも申しましたがそんな危険なことは……」

「わかつてる。君たちが言いたいことも、愛してるつて言葉の意味も、でも……」

2Bの頬を片手で撫でつつ、ホワイトの頭を撫でて言う

「ただ待ってるつて言うのも……その、少し辛いんだ」

彼女達には、弱みを見せられる。そんな甘えともとれる俺の言葉だった

「パパ? ターミナルがどうかしました?」

「え? ああ1Hか」

大分大きくなったお腹をした彼女がいる。もう10日は過ぎているのにまだ産まれない。

「今……何日目だ?」

近づきお腹を撫でながら聞く。おっぱいと違って固いと言うかハリのある感触だ

「14日です。どうやら私達第一世代は、ママ達より時間がかかるようです。2Hも同じ大きさですから」

「予想では20日だな」

「人の因子がさらに混ざったためですね」

「来たか……二人とも」

「デボルとポボルがやって来る。俺のお願いのために。」

「本当にすんのかよ……」

「ああ」

「気がのらない……」

「だ、大丈夫だって。ちよつとでも違和感があったらすぐやめるから」

「パパ？ 一体何を……」

「1Hも不安な表情で見つめて来る。俺は笑顔で返事答える」

「なーに、ちよつとした『訓練』さ」

部屋に戻り椅子に座ると、ヘルメットのような物を渡された。

「コイツからマスターの脳波と電気信号読み取って、アンドロイドに接続する」

形はバイクの頭半分だけ奴に似ているが、目の辺りにゴーグルの様な部品が付いてい

る。そのゴーグルは完全に視界を封じているので、普通なら何も見えないが……

「で? 誰につなげるんだ?」

「9Sだ。今の所2Bとよく行動しているからな」

そういうえば、俺を最初に救助してくれたのもあいつらだったな……

「……9Sによりしく頼むと伝えてくれ」

「ああ」

ヘルメットを頭につけてデボルが手を握ってくれる感覚を頼りに待つ。視界を塞がれるだけでここまで不安になるとは思わなかった。でも、この力強さが心地いい

「頭部機器より、電気信号の受信成功」

「電気信号の視覚部分を検索……完了」

「対象9Sの視覚部分への共有接続開始」

「電気信号ノ受信ヲ確認」

「9S? 問題ねえか?」

「二ツノ視覚ノ為、ノイズガ発生。微調整中」

「そう? 無理ならちやんと言っただけ?」

「……問題ナイ。マスターの為」

「そう……もう少しだから頑張れ」

「了解」

「おお、おお。な、なんか、頭がピリピリする」

何か強めの電気風呂に入ってるような、そんな刺激が頭にピリピリと走る。正直ちよつとやつてしまったか？ と後悔しそうになると、その刺激がすつと消えた。

「マスター。こつちは接続完了だ」

「ゆつくり目を開けて。見えるものを言つて」

おつかなびつくりで目をゆつくり開けると、ポポルが見える。頭や目玉を動かしても視線は変わらないから、ちよつと気持ち悪い

「ポポル。君が見える」

「よつしや成功だ！」

「提案。マスターノ声ハ僕ニ入ルノデ、間接的ニ会話ハ可能」

「お？ それは予想外だな」

と、こつちは成功して喜んでいるが、最後まで反対していた二人が来た

「本当にそのまま行くの？」

「どんなフィードバックがあるかわかりませんかよ？」

2Bとホワイトだ。9Sへ彼女達へ伝言を頼む

『大丈夫だ。痛みは無い。ちよつと視界が自由じゃないのが気持ち悪いけど、なんだか

ゲームしているみたいでワクワクしている』

「マスター……」

「VR？ でしたっけ？ 擬似体験ゲームですか？」

『そうそう！ それに近い！』

『はあ……』

自分達の心配などどこ吹く風。この状況楽しんでいるともとれるマスターの態度に、安心するもため息が漏れる二人だった

初の空中戦！

9Sの視覚へ接続して、2Bの今回の任務について行くことにした。

しかし、これは……酔う。どんなに頭や視線を動かしても視界は変わらないのに、自分の意思とは違うところを見る。乗り物酔いってこんな感じだろうな

「うっぷ」

ちよつと吐きそうになって口に手を当てる

『マスター？ 何力御用デスカ？』

9Sが通信してくる。俺のさっきのが会話と取られたみたいだ

「いや……ちよつと酔ってな？ 吐きそうになっただけだ」

『ハク？』

「あー……嘔吐って言えばわかるか？」

『嘔吐。体調不良や毒性ノ物ヲ摂取シタ時ニ行ウ行動』

「ああ、大丈夫だ。そのまま行ってくれ」

まだこれぐらいなら耐えられる。もつとひどい二日酔いとかもあったからな……そう言えば酒って無いな……

「2B、小休止ヲ提案スル」

「9S 私たちに休憩なんて必要ない」

「マスターガ酔ッテイル」

「酔う? お酒でも呑んでるの?」

「否定:予想:他人ノ視覚情報ニヨル脳ノ誤認識」

「何!?! マ、マスター大丈夫なのか!?!」

2Bがあわてて9Sに詰め寄る。

『大丈夫と伝えてくれ。乗り物酔いの一種だと』

「乗り物酔い?」

「飛行ユニット使用後、マレニ動ケナクナル、アンドロイドガイタ」

「ああ……何かバランサーがエラーを起こしたとか……」

アンドロイドでもあるのかよ。まーヘタすれば人間より敏感だかしようがないか。9Sのおかげで休憩、6Hが持つてきてくれた水を飲んで落ち着いた。

多少ペースを落としつつ進んでいくと、崩壊したビル郡が並ぶ場所へ出た。

「ビルから……滝? なんじゃこりゃ?」

構造としておかしい。ビルの高さは30階を超えてるように見えるが、その途中から水が流れ出ている。そのまま少し進んでもらうと……海にビルが沈んでいるというな

んとも理解の範疇を超えた景色が見えた

「以前遭遇シタ、強化個体ト見ラレル」

「うん視認した。破壊しよう」

大きな金色の個体と、2B達と同じぐらいの大きさの機械生命体。戦闘が始まるが

……

「ちよちよちよーおおお!!」

人間の反射神経を超える高速の視界に、俺は普通に吐いてしまった……

「マスター、すまない……」

戦闘を途中で終わらせることは出来ないため、俺が吐いたことは戦闘後9Sの報告でばれた。

『ああ、大丈夫だ。今は目を閉じてるから』

線路の見えないジェットコースターや、顔を無理やり動かされて振り回されてるような凄さだった。ちなみに俺がやらかしたのは6Hが掃除、着替えも手伝ってくれた……トイレの世話までしようとしたから、さすがに止めたけど

しかし、これからはどうしよう……今後大きな戦闘に限らず、正直途中の戦闘でも地味に来たからな……ちよつと考えよう

「マスター脳波ノ安定ヲ確認」

「落ち着いたという事か？」

『ああ。このまま寝ながら続けるよ』

今ホワイトに膝枕されながら寝ている。多分これ言うと2Bが怒るからここは黙っている。目を開けると再度海が見えた。色々、ビルが生えてるからおかしい景色でもあ
るけど、久々に見た外の世界にため息がもれた

「マスターハ海ガ好キナノデスカ？」

「特別に好きってわけじゃないけど、久々の景色だったからな……今度は家族全員で見
に行きたいものだ」

「……行ケマス」

「ん？」

「僕たちがギット、ダカラ、行ケマス」

「ああ……。ありがとな」

「ハイ」

「9S? ミサイルの防衛にいくよ?」

「了解」

さっきの金色の個体を撃破したところから、沈んだビルを飛び越えて船の近くに行く

と、再度戦闘があった。さつきよりゆっくりではあったがやっぱり吐きそうになった。しかし、次のホワイトの指示が今回の事を後悔させることになる

「2B、9S。補給船が機械生命体に襲われています。飛行ユニットを送りましたので、それで救援へ行ってください」

おうふ……………そ、空を飛べるのか……

「マスター……………問題方……………」

「いや、大丈夫、夫だ。ドッグファイト。Gの影響受けないから、きつと純粹に楽しめる……………はず」

「了解」

……………もつとFPSというか、コックピット視線のゲームやつとけばよかったな……………2Bが飛行ユニットに乗る。乗るといふよりパワードスーツのように装備しているように見えた

9Sの視界もそれに近づき、くるつと後ろを振り向いてユニットに乗り込む。

心臓が痛いぐらいどきどきしている。緊張とちよつとした楽しみ。色々な感情が渦巻くけど

「9S……………ちよつと楽しみだ」

「……………了解」

そして俺は空を飛んだ

「お、おお、お、おおお!」

言葉がこれしか出ない、どうやら飛行している時は地面を向いているようで、今は海が高速移動しているように見える。頭の上や横から何かの爆発音がすることから、戦闘中であろうとは思える。

すると空中で視線が回転した、今度は正面に敵が見える。空中で変形するなんてかっこいいじゃねえか! でも、この視線は結構くる……そうやって空中戦を繰り返していくと大きな船が見えてきた

「こちら空母ブルーリτζジ2!」

船上に炎が見える、結構攻められてる雰囲気だ。さつきから救援の信号というか通信が入ってる。2Bと9Sが小型の敵を大方倒すと

「大型エネミー接近」

「あれか!」

円盤というか、Uの時のような形の敵が来た。が、動きが遅いため2人の敵ではなかった。

「大型兵器の破壊に成功。これより周囲の警戒に移行」

「……イイエ。マダ大型ノ敵ノ反応」

「それはさつき破壊を……」

「……ソレヨリサラニ巨大……コレは!？」

巨大な空母、それが海の中から突き上げられて『食われた』。巨大なんてものじゃない。表現するならクジラ。巨大クジラだ

何か体に黄色い輪があつて、なにかそれによつて攻撃がうまく当たらないみたいだ。そのバリアの発生源と思える黄色い物体をいくつか破壊して衛星攻撃を当てる。しかし、奴はまだ倒れない

「……本体内部二モ、EMP装置ノ可能性」

『さつきのビームでも死なないつてののか!？』

「ムシロ、電磁波阻害装置ノタメ」

『……じゃあミサイルか何か物理攻撃じゃないと当たらないつてか!？』

「……物理……」

どうにか小さい敵を蹴散らしつつ、なんとも状況が開けないが心強い増援が来てくれた。しかし、彼女達の攻撃も決定打になっている様子もない

「どうすれば……」

「……提案……沿岸ノ迎撃装置ニヨル攻撃」

「沿岸? 上陸阻止用の何か?」

「肯定: 検索……発見。マップへポイント」

「行こう!」

また変形して飛んでいく。正直大分きつい……でも、命を張ってる人たちがいるのに、弱音は吐いてられない。……全部終わったら、俺何も吐くことできないだろうけどな

海岸の淵に、巨大な砲台がある。

「これか!」

「肯定: コチラデアシストシマス。コノレールガンデ」

「わかった!」

2Bが何発か撃つ。頭に当たってもはじかれるが、敵が攻撃を仕掛けようと開けた口にぶち込むことが出来た。口の中に何発かぶちこむと……奴が立ち上がった!

さつき破壊したと思っていた黄色い装置が、背中にびっしりについていた。それが光ると周りに飛んでいた増援部隊が落下していく。

「防衛!」

「9S!」

9Sが2Bの前に出て、波のようなものを防ぐ。見えている視界に不快なノイズが入

る。テレビを見ているときに電波の受信がおかしくなった時のようなノイズで、頭が痛くなった

「早急二回避」

そう言つて飛行ユニットに二人が飛び乗るが、奴の手の方が早く、レールガンが破壊されて、かろうじてユニットに乗った二人が吹き飛ぶ。ユニットの起動が間に合わず、そのまま墜落かと思いきや……

「大丈夫ですか!!? 2Bさん!?!」

なんかえらく可愛い声が聞こえたが……機械生命体??

「パスカル!?!」

空を飛んだパスカルと、彼女? の仲間によつて9Sのユニットを空中で受け止めてくれていたから助かった

「あれだけ攻撃してもまだ動くのか……」

「あれは私の記録にも残ってます。最後は暴走して私たちも手に負えませんでした……」

「……物理……」

「9S……」

「……提案……再度物理攻撃」

「でもレールガンは……」

「サツキ護衛シタ、ミサイルノ利用。シカシ、背中ノEMP装置ノ妨害ガ予想サレル」

「それを壊せばいいんだな？」

「肯定……2B才願イシマス」

「……わかった……」

9Sが戦線から離れる。マスターに見守ってもらえないのは寂しいが贅沢は言ってもらえない。装置を壊さないと！

「うう……うう——」

きつ、い……視界だけのはずなのに、なんだか風を感じているような錯覚だ。でも急がないと2Bが危ない。結構長い間飛んでた気がするけど、なんとかミサイルの所にまで戻れた

「ミサイルノ状況ヲ確認……発射可能状態」

『9S行けるか!?!』

「肯定……発射します」

でかいミサイルが大きな火を吹いて飛んでいく。固唾をのんで見守っていると無事命中。思わずガッツポーズをするが敵が大きく光ると、俺の意識がそこで途絶えた

ココロ ツナガル

「……………う……………」

体が……………うまく動かない……………巨大兵器にミサイルが着弾したら、広範囲攻撃を展開されて……………

「少し……………マシになってきた……………」

起き上がれるほどに再起動出来た。体のシステムチェック、戦闘システム……………異常なし、行動可能……………バンカーへ連絡を取ろう

「2Bよりバンカーへ、応答せよ」

「オペレーターより2Bへ……………2Bさん無事でした!？」

「ああ……………現状はどうなっている?」

海岸で停止している大型兵器を見つつ、情報を整理する。やっぱり最後の攻撃はEMP攻撃であれのせいで私は8時間も機能停止していた。近くに他のアンドロイドが見えない……………見え……………ない?」

「バンカー!! 9Sは!? マスターは!？」

「……………はい、かすかなブラックボックス反応はありますが、場所の特定は……………」

「わかったすぐに搜索任務に移る。司令部に許可申請を」

「すでに司令官からは、探索救助の指示は出ています」

すぐに行動を。周りを目で探したがアンドロイドそのものが見つかからない

「ポッド。付近のブラックボックス反応の感知」

「付近にブラックボックス信号は感知できず。微弱な信号の場合特殊なスキャナーが必要」

『2B? 目が覚めたか?』

「司令官!」

『……9Sの搜索も指示するが、まずアジトに帰ってきて欲しい』

「しかし、9Sには……」

『それにつながる事だ……マスター殿が目覚まさない』

「……!」

全速力で走りだす。途中の機械生命体に目もくれず。戻るだけなら数時間もかからないと思う。正直、時間なんて感じなかった。アジトの入口に着くと司令官が出迎えた

「……今、6Hが看病している」

「す、すぐに……」

息が切れている。アンドロイドにそういったのは無いはずなのに、息が詰まる

司令官に手を引かれいつもの部屋に入ると、あの頭部装備を付けたままのマスターがベッドに寝ている。6Hが常に手首を触り何かをしているようだ

「ま……マスター？」

「母さん。おかえりなさい」

あと数日で産まれるであろう大きなお腹をした6Hが返事をする

「……父さんは、生きています。私はずっと脈を測っているので間違いないです」

「では……なぜ？」

「多分、例の接続のせいだ」

後ろからポボルと離れたデボルが答える。

「あ、あの接続は視覚の共有だけで、こんなことは……」

「脳への信号を同期させていたところに、EMPによる強制停止がかかってしまって、おそらく9Sさんに残ってしまったと思います」

「じゃ、じゃあマスターはもう？」

9Sへ切り離されたことにより、マスターはもう二度と起きないのではないかと怖いことを想像してしまう

「いいや。切れたのなら、もっかい接続すればいい。だから2B」

デボルが、ずっと何かを取り出して私の前に出してくる

「ポッドから連絡を受けた。このスキヤナーで9Sを探してくれ……頼む」

デボラの今にも泣きそうな顔、それに反して私の手へチップを渡したその手は震えながらも力強く握られた

「まずは海岸を探そう……」

大型兵器の攻撃で私も気を失った。一番可能性があるとするればあそこだ。急いで行こうとすると、外から3H1と4H1が帰ってきた。二人とも6H1と同じ大きなお腹をしているのにも関わらず、狩りにいらっていたようだ。

「かあさま。おかえり」

「うん、ママ」

「二人とも、無茶しちやダメじゃない」

私でさえ、産まれる2日前にはあんまり動けなかったというのに。

「だって。とうさま起きたらご飯作らなきゃ」

「うん。いっぱい食べればすぐ元気」

「二人とも……」

二人の顔は、お腹のせいだろうが少し苦しそうだった。でも、「父親が起きる」ことを信じているように見える。多分、デボラたちはそこまで詳しく言っていないからかもしれ

ないけど……

そう言えば、人間の文献に女は弱いが母は強しってあった。よくわからなかったけど、今は少しわかる。娘たちの前で、私が弱弱しくしてはいるはこの子たちに心配させてしまう。私がマスターを目覚めさせる

「そうね。まだ少し任務があるから行ってくる」

「いつてらっしやい」

マスター。私はまだあなたのそばにいたいです……

夢を見ている……のか？

何かよくわからない物体が色々動いている……ああ、さっき見たパスカルっていう機械生命体に似てるから、多分それだ。なんか一匹？ 一人？ が一番高い所にいて、みんなお辞儀していたり。そうかと思うと一人の大きなドレスのようなものを着たものが舞台の上で回っている。

そう言えば、2Bからそういった連中がいたと聞いたのを夢に見ているのだろうか？

それにしても「映像がはつきり見える」

何か声が聞こえる……一人は多分9S。もう一人は聞いたことない男の声。なにや

ら言い争っている

男が9Sの心を煽るように話す。9Sが声を荒げて否定する

『お前は2Bを○○したいと思ってる』

「何を言っている?」

『お前は憎悪によつて2Bを……』

「2Bを、あいしているのは、マスターであり、2Bがあいしているのはマスターだ」

『……は?』

「お前の言っていることは理解できない」

『お前は2Bに対して何も……』

「何も? 信頼のおけるパートナーであり、マスターの妻であり、僕の……」

9Sの顔は、例の目隠しで見えない。唇をかみしめるようにも見えて、そして「こつちを向いた」気がした

「友達であつて欲しい人だ」

———
なんだ……? この街? は……

9Sの捜索で海岸を探したが、見つけたのは傭兵のみんな。嬉しくはあつたが、どんな焦りが募る。残念ながら海岸には9Sは発見できず、最後に見つけたヨルハ部隊の

一人に別の所へ飛ばされたことを聞く。すぐに場所へ向かうと、マスターと出会ったあの場所に近い所に来た

あの時、開かなかったもう一つの扉が開いた……

その中であつたのは「白い街」

奥に進んでいくと、いくつものアンドロイドの行動停止した死体がある。街道と思える広い部分を進んでいくと何か高い建物の前に、広場があつた

そして、そこには……ヤツが、アダムがいた

「ようこそ、わが街へ……」

アダムが自分の考えを述べる。人間に対しての興味。エイリアンの船で会った時、こいつは人間を殺してみたいと言っていた。戦いながら持論を述べていく……今、こいつの相手をしている時間は惜しい。でもこいつは見逃してくれないだろう

「奪い、殺し合う、それが人間だ！」

「違う！ 人は、マスターは誰よりも優しく！ 誰よりも強くあろうとする弱い人！

だからこそだからこそ!!」

「……まさか人間がいるのか……？ さっきのあいつの話は……？」

「私達アンドロイドは、『人間を愛している！』」

「愛とはなんだ！ 人は殺し合うことで、愛を実感できるのか!」

「違う！ 私にもわからない！ でも！ 支え合い、与え合いそして何より、暖かいものだー！」

「なんだそれは!? 私が知りたいのは人間の死だ!？」

しつこい……どんなに攻撃しても、効いているのかわからない。でも、止まらない！
こいつを倒してマスターを探す！

「お前にかまつている時間はない!、ま……9Sを探す!」

こいつにこれ以上マスターの事を言うわけにはいかない

「君の発言と『彼』の発言からもしやと思っているが、それは後に取っておこう」
「彼……?」

「そう……『彼』だよ」

アダムの後ろの壁が崩れその中から……礫にされた9Sが出てきた

「ま……ま、9S!」

まだ、耐えられる、まだ……

「戦う為には、それにふさわしい理由があるだろう?」

「あああああ!!」

冷静にありたい。そうでなければ助けられない。それは思考として知っている。でも、目の前にマスターが、何より、誰よりも愛しく、ただただ触れてほしいと思う人が

そんな姿になって我慢なんてできない。

「いい！ つうびいいい！」

何か……音が聞こえる……。俺はどのくらい寝ていたのだろうか？ どうにもぼんやりとして、なにかはつきりしない。

「マスター。2Bが救出に来てくれました。もう少し、もう少し頑張ってください」

「2Bが……？」

「はい。僕の視界から見えると思います」

ぼやっとしていた視界が少しづつ輪郭をとり戻し、白い空間が見えてくる。その境界の先に何かぶつかっているような爆発しているのも見える

「2Bが敵対しているアダムと戦闘と行っています」

「また……俺は助けられて……」

半分は俺の好奇心、半分は俺のプライド。そのせいでこんな状態になって、2Bに危険を及ぼしてる。俺……何やってんだよ……

「マスター、僕は貴方と共有してもらって嬉しかったです」

「え？」

「貴方と話が出来て、貴方と一緒に『戦って』とても誇らしかったです」

「でも、俺は何も……」

戦闘中吐いたり、全然ついて行けなかったり、情けなさだけ感じた共有だった。でも彼は違った

「人間がアンドロイドを作ったのは、誰よりも強くありたいと。でも戦えないという思いから生まれたと僕は感じました。実際、マスターはどうあっても戦おうとしてくれました。それが僕には嬉しかった」

ずっと、9Sに嫉妬していた。戦闘面で彼女を支えることが出来る彼に。きっと彼女にとつて傍にいたことが出来るのにふさわしい相手だと。人間、という事だけで俺は彼女に『愛されてる』は彼女の傍にいていいのかと？　でも

「マスター。僕たちは人間に作られました……それは……やつぱり……何よりも誇りです。貴方の強くありたいと思う心。僕たちに守らせてください。そして……」

なんだか、9Sの声に涙が混じっているような、言いづらいような濁った声になっていく……ああ、これは知ってる。悲しいときの中でも、それでも、前に進むうとする強い気持ちだ

「僕の親友の2Bをお願いします」

「あああああー！」

私の武器がアダムを貫く。とどめを刺すためにさらに押し込み、斬りつける

「これが……死……暗く……冷たい……」

アダムの体から血のような体液が大量に漏れて、地面を濡らす。アンドロイドや人間なら活動不能になっているはずだ。それより

「マスター!!」

ちゃんと奴が死んだのか、磔にされていた9Sの体が開放されて地面に転がっている。

……怖い。もし返事なかったら？　そういう不安も抱えつつ優しく9Sの体を抱える。

「……9S。マスターの状況はわかるか？」

「2B……多少衰弱しているようですが、問題はありません」

「9S? ……」

「ただ、時間的余裕はさほどないかと……僕もサポートするので、再接続をお願いします」

「あ、ああ……」

9Sの変化に違和感はあったが、今はマスターの救出が先だ。9Sの体を抱えてすぐにアジトに戻る

でもなぜか私には確信があつた、マスターは助かる。と

心の重さ。想いの重さ。愛の強さ

あー……あたま、いてえ……

何か、脳みそが浮いて、頭蓋骨の内側に当たる度、痛みが走っているような……

頭動かすのが、凄まじくしんどい……頭を撫でて、少しでも痛みを和らげようとすると、その手が掴まれているのに気がついた。

「とうさん?」

ん? 父親? なんだっけ? えーつと……ダメだ、何か考えようとすると、今度は驚掴みにされたような痛みが来る。

「ああ……うう……」

また、声が出ない……ん? また?

「……大丈夫です。もう少しお休み下さい」

女の子声が聞こえて、手首を掴んでいた手が離れ、俺の手を両手で包んだ。

「……よかった……」

その安堵の声を聞いて、俺は眠りについた

「マスターに反応があったって？」

「はい。かすかな応答と、手を握り返してくれました」

「他は？」

「何か苦しそうで、言葉になっていませんでした」

病室としていつもの部屋を使っているため、この部屋にはデボルさんポポールさんと私しかない

「6H1。他には？」

「頭が少し動きましたが……そう言えばその時に呻き声を上げました」

「そうですか。鎮痛剤と鎮静剤を用意しましょう」

まだ予断は許さないが、ひとまずの前進に二人は気合を入れなおしたようでした。

「とうさまはどう？」

「パパ、お魚、食べられる？」

「まだぐっすり寝ているから、干し肉と干し魚にして、いつでも食べられるようにしておきましょう」

「お野菜は……漬物って出来たかな？」

「うーん……海水から取ったお塩を使いましょう」

3人の姉が、父さんが起きた時のために準備を怠らない。自分たちももう出産寸前な

のにずっと動いている。

「1H1姉さんや、2H1姉さんもすでに予定日を超えてるのに
「パパに出産を見てもらいたい」

その一心で耐えている。お腹の中では成長は止まっているらしいけど、私も正直動くのがしんどい時がある。でも、父さんの方がもつと苦しいと思う。さつき手を握り返してくれたけど、いつも撫でてくれるあの強さはなかった。呻くように、なにもしゃべれない父さんを見て、胸の中が掴まれたような苦しさに追い込まれた。なんで私がこんな思いを？ つらい、もう見たくないと苦しくなった

「だけど、みんな言ってくれた

「6H1がいてくれるから私たちは自分たちの仕事ができる。ありがとう」

「つて……その顔はみんな辛そうできつと私も同じ顔してると思う。」

「……ねえ？ 父さん、早く起きてよ……」

「いろんな人の声が聞こえる……みんな、聞いたことがある女の声……元気な声、物静かな声。変わったしゃべり方、事務的なしゃべり方。大人の女性で母性にあふれる声、そして、無機質なしゃべりのはずなのに、感情が見える声……ああ、彼女は、きつと……」

「マスター、私達一同、お帰りをお待ち申し上げます」

ぼやけていた感覚がどんどん集まってくる。起きなければ。まだ頭は重いけど、これ以上彼女達につらい思いをさせたくない。なにもできない俺でも、安心させることぐらいは出来る。てか

「あたまが、まじで重い……」

そうつぶやくと、そばの誰かが驚く？

「父さん!?! 起きました!?!」

あー、目を開けてるよな？ 俺？ なんで真っ暗なんだ。手首をつかまれているほうと逆の手で頭を触ろうとすると何か硬いものにぶつかった。それに触れて急速に思い出してきた。……戻ってこれた？ のか？

「あー。その声は6Hか？ そこにいるのか？」

「はい……はい……」

「見えないのは……これのせいかな？」

そうだ。あの時、一緒に戦いたいわがままからヘルメットをかぶったんだ。でも何も見えないってことは？

「父さん。まだその装置は外さないでください。二人を呼んできます」

「ああ……」

手が離れていく。少し寂しいけどすぐに扉が開く音がする。

「おい！ マスター!? 無事か!？」

「デボル大きな声出したらダメ」

手をすつと上げて、とりあえず起きていることをアピールする

「待っている、接続を確認して、問題なければ外すから」

二人に支えられて、上半身を起こしてもらう。なにやら頭の装備を調べている二人。しばらくたつと、ガチャガチャという音が聞こえ、それが外れた

瞼は開いているはずだ。でも真つ白で何も見えない。つい両手で回りを探ってしまった
うと、両手がそれぞれ両手で握られた

「大丈夫か？ 目が見えてないのか？」

「落ち着いて。接続は問題ないです。まばたきをゆっくり繰り返して」

言われる通り、瞬きを繰り返すと白いカーテンとなつて視界の白さが薄れていく。その中で赤い何かがゆっくり浮かんできて、そしてやっと二人の顔が見えた

「デボル……ポポル……？」

俺のわがままを聞いてくれた頼もしい双子が、今にも泣きそうな顔で両手を掴みつつこつちを見ている

「ああ……さつさと……起き、ろよ……」

「……おはよう、ごいませ……」

二人が俺に抱き着いて迎えてくる。まだ、うまく体が動かないが二人をゆっくり抱きしめる。ま、動かなかったのは二回目だ問題ない。と思いつつ二人の頭を撫で続けた

「二人とも迷惑かけたな……」

「そう思うならさっさと起きろよな」

「面目ない……」

「デボルの減らず口もなんだか懐かしいぐらい。俺は2日ほど寝ていたようで、まだよく体が動かない」

「ふふ」

「ん？ どした？」

「いや、初めてここに来た時を同じだなんてな」

あの時も、こうやって動かない俺を、2Bや二人が支えてくれたな……ま、こいつら、俺の生殖機能に細工しやがったがな

「そういうえば、あの時もこうやって世話したな」

「ふふ……おしつこの世話もしましたね」

「……ノーコメントで」

色々、看護というか歩けないからしょうがないけど、シモの世話はガチで恥ずかし

かった

「……改めて、二人とも、俺のわがままのせいですま……」

「私たちはマスターの願いを聞いただけ」

「謝るんなら、私達じゃないし、それは自分の決断を否定するぞ？」

「……そうだな。ありがとう。だな」

「おう」

二人が綺麗な笑顔を向けてくる。泣いたような目元も濡れている。でも、綺麗な笑顔だ……

「迷惑かけた詫びに、なんでも言ってくれ。出来る事ならなんでもやる」

「!？」

二人が驚いて、お互いの顔を見合わせてゆっくりこつちをみて、にやーつと笑う。あ、地雷踏んだかな……

「私たちの願いつちやーねー？」

「ねー？」

あ（察し）

「『子供くれ』ください」

アツハイ

俺が目を覚ました事は、その日のうちにみんなへ伝えてくれた。双子は一日待った方が？　と言われたけど、みんなの顔を見たいというわがママを聞いてくれた。娘たちも泣きながら喜んでくれた。みんなとても大きなお腹をしていて、1Hと2Hに関しては予定日を超えており本当にしんどそうだった。2Bの娘たちも1Hらと同じぐらいの大きさでもう産まれそうさ。

俺が本調子じゃなかったから、という理由だけで全員の出産が翌日に持ち越された。

……アンドロイドすげー

そして、翌日。まだ歩けない俺のため、部屋で全員の出産が始まった。

出産が始まると、全員苦しそうだったけど、産まれる途中から産まれる瞬間はとても気持ちよさそうな声が響いて、俺のチンポにダイレクトダメージだった

こうして、俺はさらに6人の孫？　娘？　産まれ、そのにぎやかさに自由の効かない体に不思議と活力が生まれた。……子供って、すごいな……

『人形』の価値

全員の出産を見守って翌日。前の時とは違ってもう歩けるようになった。

ただ、体はまだ重いけど。皆が孫を見せながら挨拶をしてくる。いやー本当にみんな可愛いなー

「おー改めて見るとちっせーなー」

「デボル。今度は私たちだから」

二人が俺の横で支えながら歩いてくれる。さすが看護と治療をメインのアンドロイド。かいがいい世話が心地いい

「えーと。予定では私が5回？」

「ええ。私も5回。アソコとお尻に2回とお口にもらいましょう」

……そんな計画、口にしないでいいからね？ ほら、道具屋さんの後ろの休憩所で2

Bがいじけてるから

「マスター……」

……可愛すぎると思いつつ、チンポが大きくなってくる節操なしの俺だった

そして夜。二人をともしないつつ部屋へ戻る。

「そ、そういえば9Sはどうした？ 姿を見てないが？」

「ああ。あいつは体の損傷が激しくてな。私たちでは直せないんで、バンカーへ上げた」

「そ、そうか……無事ならいい」

「私達を目の前にしてその話ですか？ ちょっとシヨックです」

「い、いや……」

部屋に入った瞬間、二人がすぐ脱ぎだした。それに気づかずベッドに腰掛けて二人を見ると全裸の二人がいて、つい話をそらしてしまった

二人とも、出る場所は出ているが、2Bのお尻やホワイトのような迫力はない。が、整った美しさがあつた。大きいアンバランスも素敵だがこういうのもいい

「へー私たちみたいに、大きくなってもいいんだ？」

「そうみたい」

ついガン見していると、二人が嬉しそうに体をもじって、おっぱいの先を手で隠した。手ブラ状態……エロい

「なんかおっぱいに視線かんじるから……」

「お前のほうが大きいもんな」

ん？ 俺の見た目では変わらないように見える。ただ、乳首の向きがデボルがちよっ

と下向き、ポポルが逆に上向きだった

「じゃあ、私が吸ってもらってデボルは揉んでもらう?」

「そうすつか」

二人が手ブラしながら近づいてくる。ポポルが正面に来ようとするが

「あ、まって、二人とも正面に来て」

「あん?」

「はい?」

二人の行動を制して正面に来てもらう。それぞれが俺の脚をまたいで近づいてもらうと、二人のおっぱいが目の前に来た。ブラをしてる手をペロつとなめると「きゃん」と可愛い声が聞こえた。ポポルが中々手ブラを外してくれないから手の甲にキスをする。ちゅつちゅつと何回かキスをすると手ブラは外さず人差し指と中指が開いて、可愛い乳首が見えた。

「なんか……恥ずかしいです」

照れるポポルをよそに乳首にキスをする。体をもじもじするポポルを可愛いと思いつつ、次はデボルの手ブラにキスをする

「お、おい。吸うのはそっちだろ?」

気にせずさつきと同じようにキスをする。うん……あ、んとあえぎ声が聞こえてくる

と、同じように人差し指と中指が開いて乳首が見えた

「ど、どーすんだよ?」

顔を赤らめながら、デボルが聞いてくる。口に近いそれぞれのおっぱいを手で掴み、乳首に近づけると、思いつき「二本の乳首」に吸い付いた

「あ! あああああ」

「い、一緒なんてええ」

手ブラをやめた二人。片手はお互いの腰を支え、もう片手は俺の頭の後ろで手を繋いで支える。俺は口で乳首を固定させて、手はそれぞれ空いたおっぱいを揉む。大きさは確かに変わらないが、デボルのほうがちよつと固いような感じがした

「あ、ああ……流石100人を超える父親」

「本当だぜ。吸われるのが、うん、ふ。こんなに気持ちいいなんてな」

「ちゆるちゆる……」

「この刺激も素敵ですが……」

「ああ。さつさとヤつちまおうぜ」

言い方が不穏なんです? 味はしないはずだが、美味しい乳首を堪能していると、服を脱がすため中断を余儀なくされた。……勿体ない。

二人にすると服を脱がされ、真つ裸にされる。またベッドに腰掛けると、それで

れ膝に片方はデボル、もう片方にポボルがまたがり腰を密着させてくる。かすかに前後に腰が動いているから、角オナ状態なのか？

「マスターのこの体温、気持ちいい……」

「ああ。例の博士から貰った、デイルドも中々だけど、やつぱあつたけえのが、いいな」
あの双頭デイルドを作った人か……直接会って依頼したらどうなるだろうか？ とぼんやり考えていると声をかけられた。

「さあ。マスター。私達はいつでも大丈夫です」

「ああ。ずつぽしいつでもいいぜ」

言い方はアレだが、顔を赤らめて言うデボルが可愛くて、その腰を掴む。

「じゃ、じゃ私からだな」

ポボルはすつと離れたが、デボルの腰の動きが大きくなってきた。すでに太ももの半分あたりまでデボルの愛液で濡れてきた。腰に回した手をお尻の方にうつしてその感触を楽しむ。やつぱり他のアンドロイドより固い気がするが、揉みごごちは負けてない。

「2Bのお尻のほうが……あん。いいだろうに」

無視して揉みしだく。円を描くように回したり、上下にタップタップと揺らしたり。

「もう……遊ぶなよ……な？ もういいだろ？」

つい夢中になって遊んでいた。顔を見るとデボルが今まで見たことないエロい顔をしていた。

「そうですね。早く私も欲しいので、デボル？ ベッドに四つん這いになればマスターもやりやすいよ」

「あ、ああ。じゃあ、後ろから……なら顔見られなくていいか」
「ん？」

最後の方は聞こえなかったが、俺の足を離れデボルがベッドに移動する。ベッドに乗りこつちにお尻を向けて腰を振る姿は、女豹と言うひ表現が合うしなやかさを感じた。

「な、なあ？ マスター？ ほ、ほら遠慮なくぶち込みなつて」

なんだか強がっている女の子見えて、とても可愛い。だが俺はそんなギャップの可愛さに欲情しか抱けず、ゆっくり近づいていった。俺が近づくと揺れていたお尻がピタツと止まる。体も強張っているように見えた。緊張をほぐそうと足からゆっくり撫でながら触つてゆく。足、ふくらはぎ、太もも。お尻に両手がたどり着いて、左右にゆつくり割るとよだれを垂らしているように見えるデボルのマンコが見えた。

「ま、ますた？ は、はやく」

「デボル待ちきれないようですね」

「あ、ああ。そうだけ」

「どうやら逆効果だったようだ。それならとちよつと強めに腰を掴んでチンポをマンコ当てると、一気に押し込んだ。デボルの体がぴーんと伸びて固まった。ぴくぴくと痙攣すると、そのまま前に倒れた」

「大丈夫か？」

「あ……はひ……」

「体から力が抜けているようだが、マンコはチンポをずっぽり啜えて離さない。少し無茶しすぎたかな？」と思ひ、根元まで入れたまま円を描くように腰を動かす。徐々になじめせるように動いているとデボルが催促してきた

「な、なあマスター……その……だな」

「どうした？ つらいなら休むか？」

「ち、ちげえよ。その、なんだ……さっきのもう一回頼む……」

「ん？ さっき？」

「うう……さっきはさっきだよ！」

「デボル。はつきり言わないとどれの事かわからないわ」

「うう……その、さっき入れてくれた、時みたい、にだな……こう、ずぼって……恥ずかしい……」

「多分、俺は今すごく悪い笑顔をしていると思う。でも要望に応えるべく、再度腰を

しっかり掴みゆつくり抜いて……思いつきり突き込む。ずぼんと言う音とともに「んひいひい」と言う女の子が上げてはいけないような声が響く。ただ、動いたのは「一回」だけそしてまた腰をぐりぐりと回す

「ま、マスターあ。頼むよお……私のマンコ。がんがんに犯してくれよお……マスター専用オナホ人形にしてくれ……」

「オナホ人形って……ラブドールじゃあるまいに」

「ラ、ラブ、ドール？」

「ええつと……あ、あつたあつた。検索によると、人間が等身大の人形を作つて、それにオナホ等をつける事で性欲処理用の人形とした。つてある」

「性欲処理人形……」

「いや、まあ間違いじゃないけど……」

そういやそんなのあつたな……何かお昼の有名番組で紹介した男がいたから、ちよつと気になって調べたんだが、一体で車買えるぐらいの金額だったり、よく考えたら保管場所に困るとかでやめたんだよな……

か、買うか迷つてないぜ？

「いい……それ……」

「ん？」

デボルの声で考え事からこつちに意識を戻すと、肩越しに売るんだ瞳で見つめてくるデボルの顔があった

「ラブドール、性処理人形……それ、マスターの『モノ』になれるって事だよな……」
「ま、まあそういう事になるのかな？」

「じゃあ、所有者の証として、デボルに一杯注いで『登録』してください」

「は、はやく『登録』してくれ」

「あ、ああ」

どちらにしても、こののまま抜くなんてのは考えられない。デボル本人の希望もあるから、今度は止まらずガシガシとピストンした。結構強めに動いているが、デボルは受け入れる。それどころかそれにドンドン馴染んできているようで、「あひい」「おほお」とどつかのエロ本みたいな下品な声を上げつつも、腰は落とさず、むしろ押し付けてきた。マンコがどんどんしまつてきて俺も耐えられなくなり

「デボル……もう、射精る！」

「はひ！ ひやい！ きてえええ！」

最後の一突きで腰を密着させ、俺も前に倒れこむ。体全体を密着させて、腰だけはぐいぐいと奥に奥に入れようと動かす。

※アンドロイド、デボルの所有者登録完了※

「あ……ああ……今、『キタ』

「どれどれ……あら本当。おめでとうデボル。これで貴女は今日からマスターのおもちやよ」

「えへへ……嬉し、いなあ……」

おもちゃつて……言い方と思いつつ、チンポは抜くつもりは無い。射精はもう終わつてるが入れたままゆるく動いている

「あふ……すごいぜポボル。マスターのチンポまだ固くて、私のマンコの中でぐりぐり動いている。自分のモノだつてしみつけてるみたいで、気持ちいい……」

「うふふ。マスター？ どうでした？ ラブドールデボルの、使い心地は？」

「あ、ああ。気持ちよかった」

「それは何より。じゃあ、次は私の使い心地をお試し下さい」

ポボルが続いてとデボルに並んで横になる。ポボルは仰向けに寝て自分の足を抱えて正常位の姿勢をとる。まだデボルに入れたままだが、そのエロい姿を見るとチンポが固くなる気がした。もうちよつと入れておきたいがまだ後で楽しめると思い抜いていく。ちゅぽんと、デボルのマンコも名残り惜しそうだつたが、ポボルのマンコはすでに口を開けて待つており、つい生唾を飲む。ふらふらと誘われるようにポボルのマンコに近づき、チンポを当てるとするつと先が入った。ポボルが「うん……」と小さくあえぐ。

ポポルのマンコを味わうようにゆっくりゆっくり挿入していく。

「徐々に、徐々にマスターの物になっていく……」

「なんだよ。私みたいに一気にしてもらえよ」

「ふふ。私はこういうのがいいです」

そのまま腰を進めていくと、ぬぶぬぶとチンポが優しく入っついていき、俺の腰とポポルの腰がびったりくっつく。

「さ、さあマスター。ラブドールポポル、存分にご利用下さい」

デポルと違ってゆっくり動かす。つ、疲れたからじゃないぞ？　ポポルは足を抱えたまま動かないが、マンコのうねりは異常で、入れる時は波打って迎え入れて、抜く時は入り口がすぐく締まる。

「ぼ、ポポル器用だな。気持ちいいぞ」

「光栄ですマスター。さあ登録いただければ、もつと貴方専用になります。遠慮せず所有者になって下さい」

女の子を自分のモノにする。彼女とかそういうのではなく物理的な意味で。ついさつきデポルに射精したばっかなのに、ポポルのマンコの具合にもう限界を迎える。ポポルの腰の下に手を回し一ミリでも深く繋がろうとする。無言で出したにも関わらず、ソコは咀嚼するようにチンポを甘噛みして射精を手助けする。

※アンドロイド、ポポル。所有者登録完了※

「あ……私にも『キタ』わ。デボル」

「その感覚、最高だよな」

「ええ。とつても……」

二人が恍惚の表情を浮かべる。この二人のアソコは、なんと言うか優しい。激しく体を動かしたのも久しぶりで、大息が上がった。休憩のためベッドに仰向けに大の字になつて寝る。片方の胸にデボルが頭を乗せて添い寝して来る

「なあなあマスター？ 次、何して欲しい？ 手コキ？ 足コキ？ パイズリは……と、とにかく好きだけ使ってくれよ？」

「デボルがこんなに懐くなんて……」

そう言いつつ、ポポルも反対の胸に頭を乗せてくる。嬉しくなつて二人の頭を撫でると「ふにゅー……」とデボルはとけて、ポポルは気持ち良さそうに目を閉じている。そのまま、ゆつくりした時間を楽しんでいると、二人手を繋いで、その手でチンポをしゃいだした

「二人一緒だと、なんだか気持ち良さ倍増だな」

「お？ そうか？」

「じゃあ、お口も二人でしますね」

そう言つて優しくチンポをしごく二人の目が、情欲光つたような気がした。……約束してないが、十発頑張るか……

この後も二人の体を、いや、使い心地を堪能した。二人はどうしても、モノとしての扱いを喜ぶので、俺も割り切つてモノ扱いしている

こうして、色々感謝を込めたセックスは、普段よりまったりと終わった。

※監視対象を特定※

※暴走を防ぐため、他アンドロイドの憎悪を緩和※

※全ての情愛と罪悪感を所有者へ向けるよう調整※

※……本人達の希望により、所有者の『ラブドール』として登録※

垣間見える世界

「このデータは……一体……？」

アダムの戦闘の後、僕はレジスタンスアジトでマスターへの再接続を手伝う。それは無事終了したが、僕自身修復とデータのオーバーホールのため月に上がっていた。

マスターの目覚めの時にいられないのは残念だけど、アダムに囚われている間に、ウィルスなどを仕込まれていては大変だからしょうがない。

だけど、月に上がってすぐ、デボル、ポボル二人からマスターが目を覚ましたことを聞き安心した。今度は僕の番だ、しっかりオーバーホールを行ってすぐに戻らないと……

しかし、オーバーホールの時に、不審なノイズを発見。サーバーに侵入した時、意味の分からないデータを複数発見……この意味は一体……とデータを探していると2Bより救援要請が入った。

今から地球に行っても到底間に合わな事を考えて僕は、バンカーのターミナルからハッキングを行い、2Bの近くにいる機械生命体へアクセス。彼女の支援に向かうことにする

少し時間はさかのぼって

「和平を申し出て機械生命体？」

「デボル、ポポルへの登録を完了し、無事俺の体に異常が無い事も合わせて実証できた。第一世代の娘たちは、俺から言うところの孫にあたる第二世代の世話が忙しく、まだ種付けが出来る状態ではないようだった。妊娠期間と同じく、第二世代の成長には時間がかかる事と、今回のように全員が同時期に妊娠すると、俺の護衛などが難しくなることから順番や時期をずらす事も考えられている。そこで第一案として出たのが……2Bやホワイトのように『第一世代』を産めるアンドロイドを優先にして、数を増やす事だった。」「ええ。私も子供を授かったら一旦月へ上がろうと思います」

「んっぶぬぶぬぶ……ぶはっ。れろれろ……」

2Bがホワイトの報告と指示を聞きつつフェラをしてくれる。もはや2Bのフェラは、チンポと一体感になってるぐらいの吸い付きと気持ちよさで、昼でもついこっちからお願いすることもある

「ううん。ふう……2Bにフェラしてもらうのが、もはや日課だな」

「むー私も負けませんよ？」

「ホワイトはこっちがあるだろ？ はっぶ。ちゅー……」

「あんー… ご主人様だったら……もう」

寝ている俺のチンポをしゃぶる2B、胸に吸い付いた俺の頭を膝枕しながらおっぱいを飲ませてくれるホワイト。このまま寝てしまいそうだが今日は久しぶりに二人への種付けだ。なんだかんだ言ってこの二人とのが一番心躍る

「ちゅ……ちゅ……本当は口にも欲しいけど……今日は全部種付けに回して欲しい」

「そうですね。でも、2B？ 種付けは一回づらずで十分ですから、残りは全部お口でもいいのでは？」

「うーん……それもいい。悩む」

「いいよ。今日は久しぶりだから、その。二人が満足するまで……」

『本当に!?!』

二人のキラキラした、いや、欲情にぎらついた目を見て、ちよつと失敗したかな？と後悔した

2Bとホワイトが、背中合わせて横になり片足を持ち上げる。二つ、いや4つの穴がくぱくぱと動いている

「さあ、マスター？ 今日はこちらの穴からお召し上がりになりますか？」

「ご主人様、今日の私のオマンコは、他の娘たちの経験をもとにアップデートしております。以前よりお楽しみいただけるかと」

「む。私だつて、天才博士に数々のデイルドを作らせていつもケツマンコを鍛えている」
甲乙つけがたい二つの穴。まずは指を入れてみる「あん……」「ご主人様あ」と二人から甘えた声が聞こえる。2Bのお尻は、相変わらず入口はきつく、入れる瞬間は抵抗するが、入れるとするする入って行く。しかし、抜く時はきつちり食いついて指1本でもむしゃぶりついてくる。対してホワイトのマンコは2本、3本と指を優しく指を受け入れてくれて、調子に乗った俺は5本の指を、鳥のくちばしみたいな形にして入れようとする……手首までぬるつと入った

「あつあああああ」

「ほ、ホワイト!?!」

流星に調子に乗ったと思ひ慌てて抜こうとするが、ホワイトの手が俺の腕をつかみ阻止した

「まさか、手をお入れになるとは……驚きましたが、ご主人様の一部が入っているというこの快感。素敵です

「……マスター。私にも」

「え?」

2Bが抱えている足をさらに広げ、腰を少し上げて挿入しやすいか角度にしてくれる。「んっんん」と2Bが力を入れていくと2Bのアナルが開いていった

「さあ。私にもお手をどうぞ。」

「あ、ああ」

言われるまま、ホワイトにしたように指を5本まとめ2Bのアナルへそえて、挿入をしようとし力を入れていく。チンポの時と同じように、いや、それより大きな抵抗を感じたが、ずぬぬ、と第3関節までは入った。一番大きい拳の部分でつかえてしまったが、2Bが抱えた足をくいと自分の方へ持ち上げると、連動して穴が開いたのかごぼつと拳が入った。一番大きい所が入れば後は手首まですつと入った。

「おおおほほ！」

「ね？ 2B？ おチンポと違ってこれはこれで素敵でしょ？」

「え、ええ。マスターを受け入れるこの感じ。さらにマスターの物になれる感じがして嬉しい……」

俺の手が、二人の美女のマンコとアナルへ消えている。男の本能だろうか、もっと奥へという欲望が出てしまい、力を入れていく

「お、お、お」

「あああああ」

二人の喘ぎ越えの二重奏が響く、俺の手がずるずる入って行くが、手首から数センチ入ったところで行き止まりに当たった。

「ご主人様あ？　そこは何か、あん。わかりますか？」

「さ、さあ？」

多分と予想はあるが、そこがそれとは思わなかった

「マスター、そこは貴方のための大切な場所『子宮』の口です」

チンポを入れると、必ず食いついてくる二つ目の口。指で中を探ると、何かくぼみのような感触がある。

「ふふ。いつもはマスターチンポをしゃぶしゃぶしている口ですが、今日は手を啜える」

「あら？　いい話ね？　2B。じゃあ私も」

足を抱えている方とは違う空いている手でそれぞれが俺の手を掴む。その手に力が入っていくが、中々進まない。それでもあきらめない二人が、さらに力を込めると、ぐにゅつという感触が指から拳、そして手首にまで伝わった。その瞬間、二人が手を放し背筋が伸びる。体が小さく痙攣していることからイったようにも見える

「あ……あ、あ・ま、ますたーが、私の、一番奥まで……」

「ご、ご主人さまに、奥まで、触っていただけ、なんて……」

お腹が少し膨らんでいるような感じがする。手を回転させるように動かすとお腹が動きに合わせてうねる。動かすたびに二人から「お、お」という声が響く。前後させてみたり、手首を回したりと色々感触を楽しんでいると。二人から声をかけられた

「ま、マスター。手も大変気持ちいいのですが……その……」

「早く種付けしてください……」

よだれを垂らしているようにも見える蕩け顔で二人が懇願してくる。その要望に応えるべく、ゆくつり手を抜いていくが、手首の感触は外れない。大丈夫かな？ と思いつつそのまま抜くと、子宮もそのまま出てきた。いわゆる子宮脱な状態だが、二人は苦にもなつてないようだ。

「うん……私のお口は上も下も、欲張りですいません」

「うん、私も。マスターの物ならなんでも欲しい」

二人の股間から出た子宮にはまだ俺の手が入っている。俺も我慢が出来なくなつてきているので、少し強引に引っ張ると、にゅつと抜けた。二人の股間から、ピンク色の洋ナシのようなものがぶら下がっていて、コミカルだがとてもエロく見える

「こ、これ戻さないと……」

「いい。このままでえ……」

「ええ。私もそう思います」

もう一度、開いている手で自分たちの子宮を掴み、その口に人差し指と中指を入れる。そしてその口をゆっくり開くと中身が見えた。中はなんの変哲もない袋のように見えたが、なんだろうチンポを入れたくてしょうがない

「さあ、マスター。いつもは先っぽだけしか入らないけど」

「これなら、全部入ります」

『どうぞ存分にお楽しみください』

どっちから犯したか覚えてない。子宮に直接入れる。そんな状態に興奮しきつた俺は、子宮をオナホのようにつかむと一気に挿入、ぐにゅぐにゅした感触を楽しんでたっぷり種付けした。

そして翌日、2Bはパスカルと一緒に、中立？の機械生命体と接触へ、ホワイトはバンカーへ上がった。なんだかんだ言って、どっちかは大体いたから、二人一緒にいなくなるのはとても寂しかったが、これも彼女たちの仕事だ。俺は二人を信じて、娘たちと待つことにする

この幸せがずっと続くと信じて

『決着』

「一体どうなっているんだ!?!」

パスカルと共に来た廃工場。そこに和平協定を結びたいと言ってきた機械生命体がいるから、パスカルと一緒に来たのだが……

「なんと物騒な話ですね……死んでカミになるなんて」

「どう言う意味だ!?!」

「わかりません。ただ、彼らにとって死ぬ事が救いと認識され、それを他者に強要するようになってしまったのでしょうか」

奴らの言う教祖とやらのいる所に来てみれば、すでにそいつは死んでいて、それきっかけに襲って来た。途中、機械生命体へハッキングした9Sとも合流し、彼のサポートにより無事脱出。一応事なきを得た……

「ふー」

月からのサポートでなんとかなった。流星はマスターの2Bと言ったところかな? しかし、さっきのデータ色々気になるけど、今は判断がなんとも出来ない……そこに

「9 S……司令部にすぐ来て欲しい」

……あー多分、サーバーの事言われるんだろうな……と思いつつ司令部に赴く

「9 S、君がサーバーにアクセスした痕跡が見つかった」

「……その事で聞きたいことがあります。司令官」

サーバーで見つかった異様なデータ、その事から僕なりの見解をぶつけてみる。結果

は……さらに上だった

「……その通りだ。月の人類会議は『我々』が作った」

「じゃあ、今までの通信や会議のあれは……」

「人類は、もういない……正確に言えば、人類は月には行っていない……はずだった」

そう。今地球にはただ一人マスターが、人間がいる

「あの通信は人類がいる、というダミーだ。月には人類の遺伝子情報のみ」

「僕たちは今までなんで……」

「理由もなく戦えるものはいない」

……ずっと僕たちは「人類」のためにと聞かされてきた。無論、作られた存在だからそれは当たり前だと思うし、マスターに出会ってそれは確信に変わった。だけど、その事を知らない他のアンドロイドにとってこれは……

「……どうするかは、自分で決めるといい。だが」

「だが？」

「……私にとつて、ご主人様は人類というより、ただの個人として守りたいと思う」

「それは……そう思います」

自室に戻り、この事実にはショックを受けながら、どこかほつとした自分がいた。僕たちは月じゃなくてマスターを守ればいいという目的がはつきりしたことに。みんなへどう説明すればいいか悩んでいると、今度はバンカー全体にアラートが響く。今度は全域みたいだから、前みたいにハッキングだけではどうにもならない。飛行ユニットにすぐ乗り込み救援に向かう。マスター、2B、僕はどう説明すれば……

そんな迷いを抱きつつ、救援に向かう……

和平の連絡を入れてきた機械生命体を排除し、無事脱出したが急な連絡が入った

「うん？　なんかノイズが激しい……？」

「レジスタンスキャンプより連絡、通信妨害により受信が不安定」

「……急ごう」

キャンプに向かうが、今まで以上に機械生命体の抵抗を受けてままならない。なんとか近くに着いたが、アジトの近くに着いたが中から悲鳴が聞こえてくる

「あああ……来るなあ……」

「キヤード服を破かないでええ」

「オレ、オトコ、意味不明」

中に入ると機械生命体に襲撃を受けていた。がしかし

「アンドロイドを……襲ってる？」

確かに攻撃をしているようではあるが、なんとというか、データにあった『レイプ』しているようにも見える

あるアンドロイドは動物のように押さえつけられて、後ろから機械生命体がへこへこ腰を振っているし、ある生命体は男アンドロイドを複数で押さえつけている。意味も目的もわからなかったが、娘たちの声で思考が戻る

「かあさまー！」

「ママー！」

「3H1! 4H1!」

二人が私の傍に来る。3H1は私があげたナツクルを、4H1はダガーを用いて戦っていたようだ

「こいつら、なんか気持ち悪い」

「うん。やたら腰振ってる」

皆を守りつつ、戦っていた娘たちは、多少ダメージはあるようだが問題は内容だった。

どうしても気になったことを聞いてみる

「ま……マスターは？」

母親としては、多分最低な質問だと思う。でも気になってしょうがない。でも娘たちは

「とうさまは奥の方で避難してもらってる」

「5H1と2H姉、二人ついてる。6H1は、第二世代の護衛」

「……うん。ありがとう」

本当に出来た娘たちだ。これもマスターの血だろうか？ そんな誇らしげなことも思いつつ、襲撃してきた機械生命体を殲滅。アジトに被害はあったものの、マスターや私の家族、司令官の家族は大丈夫だった

いきなりの襲撃で驚いた。だが、娘達の冷静な判断で部屋から脱出。奥の倉庫へ非難して静かに待っていた。外から悲鳴や爆発音、戦闘音が聞こえる。正直かなり怖かったが、二人の娘がそれぞれの手を握ってくれるから少しは落ち着ける

「……うん、うん。……5H1。2Bママが来たようです」

「とーちゃん。かーちゃん来たから、もう大丈夫」

「ああ……」

その通信が入ってすぐ、近くで大きな爆発音を最後に音がやんだ。どうやら襲撃は終わったようだ。2人の娘が通信を繰り返し外の状況を調べているみたいだ。

「パパ。もう大丈夫みたい。いきましよう」

娘に連れられていつもの部屋へ向かう。途中火の手が上がっていたりと、予断を許さないがひとまず敵の姿はないようだ。部屋に向かうまでの広場で、2Bとアネモネさんが話しているのを見かけた

「2B!」

「あ! マスター!!」

駆け寄ってくる2Bをつい抱きしめた。身をよじりつつも払う事はせず、お互いの生存を喜んでいると、大きな音と地震のような振動が来た。

はっとして2Bから体を離し周りを見るが、アジトには影響が無いようだ。

「外から聞こえたぞ!」

2Bが、俺から離れて音の原因を探りに行こうとする。が、その両肩を俺が掴んでしまった。

行って欲しくない……その思いでつい掴んでしまった。最初に出会った時のドレスを着ているが、スカートの端がところどころ切れていたり、スリットに見えるぐらい避けているところもある。顔も少し汚れていることから、さっきの戦闘だけではないよう

だ。大事な人を戦地に送る。出来ればこのまま連れて行きたい……でも……

「2B……行つて、こい」

出来る限り笑顔で送りたいけど、多分ひどい顔なんだろうな……でも、2Bはその顔に手を添えて

「はい。行つてきます。マスター」

眩しいまでの笑顔で答えてくれた。すぐに振り返り、出口へ向かつていく。アジトの外で、激しい戦闘の音が聞こえる。今までで一番大きな音が聞こえたと思つたら静かになった。

「終わったのか……?」

「……いいえ。まだです。とうさま」

また戦闘音が聞こえる。大きな音が聞こえると、巨大な蛇のようなものが空を飛んでいた。それも消えたことから、おそらく2Bの活躍だろう

「パスカルから通信です。襲撃を受けていたようですが、2Bのおかげでなんとかつたとのこと。しかし、まだ終わっていないようです」

「アネモネさん」

三度目の大きな音。というより、台風の時のような大きな風の音が聞こえてきた。どうにも、待っているのが我慢ならない。思い切つて娘たちに声をかけた

「3H、4H。2Bの所に行きたい」

「駄目です。近づけば人なら死んでしまいます」

「わかってる。わかってるけど……」

アンドロイドへ機械生命体への攻撃を指示した人類。地球を侵略する機械生命体。その機械生命体がまるで全軍特攻のような行動から、もしかしたら終わりなのか？ と期待もしている。だからこそなのかもしれない

「戦いの決着を……見届けたい」

「とうさま……」

皆が見つめてくる。無謀なお願いをしているのはわかる。きっと止められると思う。が

「3姉、4姉、5姉と、1姉がいけば、不測の事態にも耐えられるはず」

6Hが提案してくる。しかしその顔は今にも泣きそうなほどだ。娘を悲しませるなんてことはしたくないけど、行かなきゃいけない気もする

「6H1、ありがとう……」

「後でご褒美を要求します」

「あ！ ずるーい！ とうさま!?! 私もー」

「……くいくい」

少しだけ空気が和んだ気がする。こつちを氣遣つてくれたのか、單純なおねだりか。娘のおねだりとは父親冥利に尽きるな。

「じゃあ、みんな……頼む」

4人がこつちを見て頷いてくれる。本当に俺にはもつたない娘だよ

外に出た瞬間、俺は絶句した。目の前に嵐の玉と言つていいような塊が見える。中で雷のような光が点滅して見える

「……パパ。あの中で2Bママと9Sさんの反応があります」

「あの嵐の中で!？」

一体どうなっているんだ……? 少しでも近くにいかなきゃ。

「問題ないところまで案内できるか?」

「……すでに問題ですが、なんとかします」

「ありがとう」

1Hの先導で、嵐の玉へ向かっていく。途中、機械生命体に遭遇することは無かったが、近づくにつれ立っているのもしんどくなってきた

「とうさま、これ以上はもう……」

「ごめん。私も無理」

3 Hと4 Hが俺を支えながら言う。

「とーちゃん。私の後ろに」

5 Hが前に出て俺を風から守ってくれる。後ろは1 Hが支えてくれる。もう少し……もう少し進みたいが……くそ……

「2 B……待つてるからな」

嵐の中で光る何かむかつてつぶやく。この思いが届くと信じて

単なる偶然だと思う。たまたまタイミングが合っただけだと思う。俺がそう念じると嵐の玉が勢いを無くし消えて行った

ほぼ真ん中と思われるところで、2 Bと見たことない男がいて、2 Bがとどめを刺した

「あれが、機械生命体のボス？」

「はいパパ。ネットワークを統括していた個体イブと思われます」

「勝ったのか……」

ほっとしたのもつかの間、近くで倒れておいた9 Sの周りに鉄の塊が近づいていく。

2 Bも慌てている様子だ。俺は3 Hにおんぶしてもらい、すぐに駆け付けた

「マスター!? なぜここに？」

「マ、スター、離れて……」

「……9Sが、ウイルスに侵食された」

9Sの首筋に金属なようなものはいずれあがってくる。あれがウイルスなのか？

「2B、マスター。僕をこ口してくれ」

「9S……」

「しかし、それでは」

「大丈夫。バンカーにバックアップがアルから」

「そ、それなら……」

「でも、この戦いをしてくれた君はいなくなる」

「!?!?」

てつきり、ゲームのセーブ&ロードみたく、簡単に復活できると思ってた。やっぱり死ぬって事実はそんなに軽いもじゃないのか……

「この汚染データを、バックアップすルワケにはいかないから……」

「かーちゃん……出来ないなら私が」

3Hが名乗り出てくれる。でも、彼女の……いや俺たちの決断は

「9Sいいんだな？」

「うん。マスターに迷惑かけられないから……」

「……わかった」

2 Bがゆつくり9 Sの首に手をかける。俺もその手にの上から……9 Sの首を絞めていく。力が入っているのかいないのかわからない。でも、彼の覚悟を受け止めたからには、俺も覚悟を決める。

時間は数分も経ってないと思う。9 Sの体の浸食が止まり、同時に動かなくなる。2 Bからすすり泣くような声が聞こえる……

「いつも……こんな……」

誰も声をかけられない空気が漂う中、何か信号音のようなものが聞こえた。すると近くの機械生命体の頭にある目の部分が光っている

「パ。パ。こつちにー！」

「かーちゃんー！」

4人の娘が俺たち二人をかばうように周りを囲ってくれる。

「アレを……倒さなきゃ……」

2 Bがボロボロになった体で、再度攻撃をしようとするが……

「待って！ 2 Bママー！」

「何!？」

「……通信?」

他の周りにある停止している機械生命体が光り合っている。不謹慎にも綺麗だと思ってしまった

「これは……データが共鳴しあつて？」

不思議な光景に呆気にと取られていると、がれきの山が動いた。中から大きな機械生命体が出てきて、全員に緊張が走る、が

「ま、待つて」

まさかの機械生命体の命乞い？ かと思つたら、その説明から9Sとわかつた。まつたくデータつて便利だな……こいつ

「9S……よかつた……」

「うん……」

ちよつと妬けるけど、ここは戦友としての二人の姿を見届けよう

「さあ。戻ろう2B。マスターも僕に乗つて」

こうして、機械生命体による一連の騒動はひとまず幕を閉じる。アジトに帰つた後、2Bに説教を食らつたり、通信の回復したバンカーよりホワイトにも説教を食らつたりと色々精神的ダメージはあつたが……

「2Bおかえり」

「はい。貴方の2Bただいま戻りました」

この後も、まだ戦いは続くそうだ。そう、続く……

大規模侵攻作戦

私は今バンカーにいる。機械生命体イブの暴走によるアジトの強襲。またパスカルへ襲撃も無事防ぎ、イブ本人も撃破。今後の作戦を立てる事となり、一度全員招集がかかった。私のお腹五日目だから、大分目立つ大ききだ。帰ってくるなり、他のヨルハ部隊やオペレーターも見物や触りに来た。まだ大きくなる事を言うともんなえらく驚いたな……。初産の時は4人だから今よりすごかったが……。私も万全を期す為、今の状態をバックアップしておこう。

「思い返せ！ 故郷を奪われた苦しみを！ ……」

エイリアンが現れて、機械生命体を送り込まれ、地球が人のものでなくなつて幾星霜ずっと、ずっと想い焦がれていた。いつか取り戻す日を。私自身、司令官として、色々な深いことをしたとも思う。ただただ取り戻したいと。それは自分の気持ちなのか、人に植え付けられたものか。もはや長い時間の末わからない。

でも、この気持ちは、たとえ植え付けられたものであつても、アンドロイドだからとしても関係ない。

あの人の傍にいたい。あの人のためにありたい。ずっと抱えてきた心を癒してくれ
るあの人。誰かが自分を求めてくれる。そんなウイルスのような心理に悩まされなが
ら、ずっと戦っていた。

でも、でも……ご主人様……ホワイトは貴方のために存在することを嬉しく思いま
す。

そして、きつと取り戻します。貴方の住まう地球を……

「人類に栄光あれ!!」

「このスーツ……きつい」

いつもの戦闘服とは違い、全身を覆うスーツを着用するが……お腹がものすごく目立
つ。ぴっちり肌にくっつくからだと思うが、それゆえにきつい。

「やっぱりいいなー子供」

「オペレーター……」

60が私に近づきお腹を撫でてくる。

「早く私もマスターの子供、産みたいー」

「ふふ。もう少ししたら出来るさ」

「えー？ でも順番待ちが多くない？ 特に今回降下作戦に参加した人たち全員でしよ

? それだけでも結構な数なのに……」

「そ、そうだな……」

そういうえば、さっきのミーティングの後、みんなであらう白熱したじゃんけん大会があったが……もしかして種付け順番でも決めていたのか? ……正妻二人を差し置いて……いやいや、何を考えているんだ? 私は……

「2Bさん……なんか、恋人を取られたみたいな怖い顔してますよ?」

「な!?!」

ワ、ワタシが!? ましゆたーのこいびと!? いやいやあの人は、愛する人ではあるけれど、子供を授けてくださる大切な方であり……子供を作るには結婚する必要がある……あ、あれ?!

「うわー……2Bさんがそんなに顔を真っ赤にするなんて……うらやましいな!」

「か、からかうな!」

私はごまかすようにヘルメットをかぶり、格納庫へ行く。まったく何を言ってるんだ……でも、恋人か……えへへ……今度の種付けの時はもうちよつと甘えてみようかな……少し重いお腹を撫でつつ、気持ちが安らぐ想像をする……そして、自分の中で戦闘用のスイッチに切り替える

「先行した9Sへ合流する」

そう通信し、飛行ユニットに乗った私は出撃する

マスターと2Bへ、人間が月にいないことを言えないまま、侵攻作戦が開始された
今この話をしてもしようもないので、そのまま作戦に参加する

「えーつと……先行したスキヤナー部隊は、後続の降下のため、防空システムのハッキング」

「その通りです。よく出来ました」

「……なんか子ども扱いされてる？」

「気のせいです」

オペレーターさんにより、ハッキング対象の機械生命体をマーキングしてもらおう。何
体かハッキングを終わらせて後1体となった時、他のメンバーから通信が入る

「11Sヨリ、9Sへ」

「はいはい。どうしました？」

「現状報告ト提案。コチラノ工程ハ終了ソチラハ？」

「えーつと……後1体だね。で、提案は？」

「データ同期」

「あー……忘れてた」

前にノイズを発見した時に、同期を保留したままだった

「了解。この作戦が終わったら対応する」

無事最後のハッキングも終了すると、2Bとの合流を開始。ほどなくして、飛行ユニットに乗った2B他戦闘部隊が無事降下。地上の殲滅作戦を開始する

「2B!」

「状況は?」

着地すると9Sが合流地点で待っていた。すでに交戦は始まっており、私達の役目は遊撃部隊。周りで苦戦している他の部隊の救援との事。

「先行部隊の交戦地域をMAPに転送しましたので、それを見ながら行きましょう」
「了解」

コントロールする本体がいなくなったというのに、機械生命体の抵抗は激しい。戦闘部隊も苦戦しているようだったが、私達の救援で体制を整えていった……の、だが

「何? この音?」

機械生命体が周りを囲み、首を伸ばす。すると大きな音が響き、体が動かなくなる

「至近距離からの……EMP攻撃……」

「そのままじゃ……」

「2 B!？」

機械生命体の奇妙な行動の後、2 Bを始めとした他のヨルハ部隊が倒れた

「至近距離からの……EMP攻撃……」

まるで自爆攻撃のような行動だったから、戦闘部隊も咄嗟に動けなかったんだ。離れたところで見守っていた僕は助けに向かう。今までしてこなかったジャミング攻撃に苦戦を強いられたが、なんとか周りの機械生命体は排除できた

「2 B！ 大丈夫？」

みんなゆっくり起き上がる。2 Bもヘルメットを外して一息つこうとすると、周りのメンバーが苦しみます。

「これは……広域ウイルス？」

それに合わせて2 Bも苦しみます。まずいこのままだとウイルスでどうなるかわからない！

「2 B！ ハッキングして、ウイルスを除去するから動かないで！」

すぐに2 Bへハッキング。ウイルス自体は大したことなく、すぐに除去できた……が
ふふ……ふふ……あははは……

「みんな……」

他の部隊員へは間に合わず、ウィルスが根付いてしまったようだった

「アハハハ!! こわせ! コワセ!!」

「ヒヒヒ! オカセ! レイプしろー!!」

すると、部隊員みんなが何故かスーツを脱ぎだした。

「な……………」

見たことのない女性の裸に戸惑っていたが、さらに異様な行動に移った。

あるものは近くの機械生命体にまたがって股間をこすりつけたり、あるものは他のヨルハ部隊のメンバーの手足をもぎ取ってその体を殴り続けたり。

複数のスキヤナーモデルが1人のヨルハ部隊員を犯していたり。そんな光景に呆気に取られていると

「コツチにも男ダー!」

「女モイルゾー!」

「オカセー! 壊セー!」

思わず迎撃しようとしても、識別信号のため手も足も出ない

「司令部に通信、救援と状況報告!」

「2B、識別信号を焼き切るから迎撃を!」

再度ハッキングを行い、識別信号を認識できないようにした。なんとか襲ってくる連

中を退けながら、バンカーへ連絡を試みるが、なぜか通信が出来ない

「バンカーに一体何が……」

「2B！ 僕に考えがある!!」

2Bへ、バンカーのバックドアからデータをアップロードし、そっちへ強制的に戻る作戦。そして

「ここをブラックボックス反応で吹き飛ばそう」

「……わかった」

2Bが迷ったような顔をした。きつとお腹の、マスターの子を心配したんだと思う。前にバックアップを取っているからきつと大丈夫だ

「アップロード完了……2B!」

2Bへ近づいていく。ウィルスに侵されたヨルハ部隊が邪魔をしてくる。押し倒され、服を破かれた僕は、狂ったヨルハ部隊の人に逆レイプされた。

「チンポオオ！ マンコオオ!!」

「くおお!!」

なんとかブラックボックスを取り出し2Bへ近づく。2Bも倒されてしまい、裸に剥かれアソコ同士をこすり合わせているように見える。

「は、な、れ、ろおお」

両足を抑えられてる2Bだが、幸いにも手は抑えられてない。なんとかブラックボックスを取り出し、僕の方へ差し出す。次から次へとアンドロイドがのしかかり動けなくなったが……なんとか反応を起し自爆出来た

心、命、想

バンカーの自室で目が覚める。起きる時にお腹の圧力を感じて、撫でて確認する。子供は無事……ほっとしたが、すぐに現状を思い出して部屋を飛び出す

9Sとも無事合流でき、司令官のいる所へ急ぐ

「司令官!!」

「2B!? なぜここに!?!」

司令室は特に異常が見られず普通だった

「地上のヨルハ部隊がウイルスによって暴走しました」

「そんな報告は届いていない」

「そんな……」

確かにあの時通信はまったく出来なかったが、一切の報告が無いなんておかしい
「そもそも、命令も無くなぜ戻ってきた?」

「それは、地上の部隊が……」

「ウイルスに犯されているのはお前たちじゃないのか?」

「な!?!」

「こここんな言い争いをしてている場合じゃないのに……どう説明すれば……」

「2B、9S。お前たちを拘束する」

司令官が指示を出す。下手に抵抗してはかえって疑いが増す。しかし、時間もないだろうすれば……と迷っていると周りのヨルハ部隊が苦しみだした。この症状は……

「ふふふ……せーいかーい」

「どうして……まで……」

周りのヨルハ部隊だけではなく、オペレーターの目が赤く光る。汚染の症状だ

「オラ！ ヌゲええー」

「ハヒハヒ……ポテバラレイプー!!」

「な……な……」

いきなり脱ぎだす周りの異常に、司令官が固まってしまう。

「司令官!! 回避します!!」

彼女をかばって周りの部隊員を制する。司令室を脱出するが、その外にいる部隊員もすでに手遅れのように、こちらに襲い掛かってくる

「どうして、二人は汚染されてないんだ?」

「……以前僕がサーバーに入った事覚えてますか? あの時不自然なノイズを見たので、データの同期を見送っていたんです。多分その為かと」

「同期……そう、か……」

「司令官！ 飛行ユニットで脱出します！」

司令官を連れて格納庫へつくと、司令官が入り口で立ち止まった

「司令官!？」

「……私はいけないよ……」

ゆっくり司令官が目を開けると……その目は赤く光っていた

「私もデータ同期していたからな……」

「それなら9Sが!？」

「時間がない……お前たちまで巻き添えになつては駄目だ。それに私は、この基地の司令官だ……せめて最後まで上官らしく……」

「バカ言わないで!!」

「っ!？」

気がつくと呼んでいた。ウイルスの怖さも、司令官の言うこともわかる。でも

「どうせ死ぬなら、マスターに会ってから死になさいよ！ ホワイト！」

「あ、あ……」

地上で9Sを殺してから、マスターが特に死に対して敏感になつたような気がする。

これは私のわがままで。このまま司令官を見殺しにしたら、マスターの心に深い傷を残

すと思う。

「し、しかしウィルスが……」

「9Sも、デボル、ポボルがいます！」

「で、でも……」

「貴女はマスターに会いたくないんですか!？」

後ろでは9Sがユニットの準備をしてきている。でももう時間が……焦る私だったが泣き声が聞こえてきた……司令官が泣いている……

「……ぐず……私も会いたいよお……」

戦闘状態の司令官ではなく、マスターといえる時の『ホワイト』がそこにいた

「行きましょう!」

「……うん……」

いつもの司令官ではなく、まるで小さな女の子のようだった。きっと私の判断は間違っていない。そう思い3人で脱出する。無事脱出した後ろでバンカーが爆発して崩れていく。

地球への降下中、飛行ユニットに乗った他のヨルハ部隊に襲われた。地上を目指して回避、撃破を繰り返すが一向に勢いが衰えない。このままでは……

「……9S、司令官。この空域を離脱します。私に操作権を委任してください」

「え？ あ、うん」

「ええ……」

今は、この手しか思い浮かばない。これが一番確率が高いし、司令官をいち早く治療しないと……

「操作権限委任により、9 S機、指令機、2 Bの指揮下に入る。……コースの自動設定により離脱コースを取ります」

「え？ ポッド!? 2 B!?!」

「2 B貴女!?!」

「私は大丈夫!?! 9 S……司令官を頼む……」

2人の機体を逃がして見送ると、私はステルス機能を解除して周りのヨルハ部隊をひきつける。下を見るとまだ海上だった。せめて地上まで行ければ……だけど、ユニットにドンドンダメージが蓄積していった……なんとかぎりぎりのところで、ミサイル船があった海上都市の所へ不時着できた。

不時着した場所には機械生命体が待ち構えていた。私へのダメージは……うん。戦える。

数は多くなかったので、捌くことが出来た。すぐに合流しな……

「ウイルス汚染を検知。推奨、早急なワクチン投与」

「な……」

一瞬、体の中を何かがはいずりまわったような不快感を感じた。同時にマスターとのセックスの思い出がフラッシュバックした。

「わ、私も急いでアジトに……」

「汚染速度から、アジトへの帰還確率は……10パーセント未満」

「……」

どんだんマスターとの思い出から、体のうずきがつながっていく。今すぐにでも服を脱いで、自分のオマンコとケツマンコに刺激をあたえたい。そんな気持ちにどんだん上書きされていく。頭を振ってそんな欲情を抑えようとするが、体が熱くて服を着てるのももどかしい。

「こ、こんな状態でマスターに会ってしまうと……」

多分、マスターが死ぬまでセックスに溺れてしまう……でも、他の連中に犯されるなんて持つての他……ああ……司令官に、マスターに会ってからって言ったのに……

「ポッド……私が死んでもウィルスの影響が少ないところへ……」

「……了解」

ああ……マスターを犯したい。一晩なんて言わず一生犯し続けたい……駄目だ、駄目じゃないけど駄目なんだ……

ごめんね10H1。貴女を産んであげたかったけど……本当ごめん
(ママ……タスケル)

何か声が聞こえたような気がする。アンドロイドが幻聴なんて……通信機能までおかしくなったかな……

どんどん視界がゆがんでくる。敵が襲ってきてても反撃が出来ない。ポッドに誘導されてある場所につく。ここは確かショッピングモール？ だっけ？ ほとんど目も見えないけど、確かそのはず。まだ進まないと……でも他のヨルハ部隊が行く手をさえぎる。ここまでか……と覚悟すると、そこに彼女が来た。

「A………2?」

彼女がなぜここにいるかはわからない。けど、一応は助けてくれたみたいだ……でも、もう限界。彼女を押し倒したくてしょうがない。その顔を、殴りたくてしょうがない。オマンコに手を突っ込んでぐちゃぐちゃにしたくてしょうがない

「お前……そのお腹、前もそうだったな?」

「ふふ……これは子供。ワタシ、マスターにハラマされてるの」

「マスター?」

「地球に残った、ただ一人、レイプしたい人類」

「!!」

A2の顔が驚いている。ああ、ソウじゃない。もつと泣くか喘いで欲しい……

「ごめん……もう限界……A2、お願いマスターを守って……」

今まで一緒に戦ってきた武器を彼女に託す。マスター……やっぱり最期に会いたいよ……

(ママ……マモル)

その言葉を最後に、私の意識は途切れた

人間……だと？ 確か月に上がっているはずだが……。だがコイツのアンドロイドに似合わない大きなお腹の説明が出来ない。それに孕まされている？ 子供と言うことか？ いろんな疑問をよそに彼女が私に言ってくる

「ごめん……もう限界……A2、お願いマスターを守って……」

人間を守るのは、アンドロイドにとって当たり前。興味もあるしな。しかし、コイツの目……赤いのは多分ウィルスに犯されてる。さつきから時々言動がおかしいのはその為か……除去できないのであれば、殺すしかないな……

彼女が地面に刺した剣を手に取り、一気に貫こうとすると

ガキン

と言う金属音がした

「……なんのつもりだ？ 箱？」

「2 B 内部のウイルスが急激に減少……いや、一部に収縮中」

「は？」

「腹部に収縮中。提案、アジトへの搬送」

「はあ!?! 私が運べってか!?!」

「ワクチン精製の可能性。今後の戦況に大きな影響が出ると予想」

「……確かに、この変なウイルスはかなりきついみたいだし。対抗手段が出来るのはありがたい」

「しょうがない……」

彼女を運ぼうと近づくと橋のほうから男の声が聞こえた

「A 2!?! お前何を!?!」

「9 S?」

ああ、ちょうどよかったこいつに運ばせようと、思ったが

「2 B から離れろ!!」

あちゃー……確かにこの構図。私が2 B に止めを刺すようにも見えるな

「誤解するな。私はコイツを……」

「うおおおおお!」

聞いちゃいねえ……しかし、大きな地震が起こり9Sは橋ごと落ちて、こっちに來ることとは出来なかつた。私の周りにも変な隆起が起こり2Bを抱えて逃げた。

「ポッド042より、ポッド153へ。現状確認を要求」

「ポッド153より、ポッド042へ。9Sは損傷はあるものの行動可能。アジトへ戻り修復予定。そちらは？」

「2Bは休眠状態。可動は現時点では不可能。A2はじきに再起動予定」

「ではアジトで」

「了解」

「……はっ!？」

目が覚める。さっきのは一体なんだったんだ……2Bを抱えて走っていたが、急に盛り上がった地面に阻まれて、意識を失つた。EMP攻撃で受けたのか？ その辺がはつきりしないが、セルフチェックを行う。……うん。多少汚れとダメージはあるが、攻撃に支障はない。

「おはようございますA2」

「お前はさっきの箱……」

こいつは2Bといたヤツだな。!? 2Bは!? 慌てて周りを見ると、岩陰に隠れて寝ていた。

「2Bは現在、ウィルス進行遅延のため、休眠状態に入っている」

「こんな時に寝るなんて、呑気なヤツだ」

「否定。ウィルス除去まで起動が出来ないので、呑気ではない」

「わかつてるよ、それぐらい……」

2Bに近づき持ち上げる。両手が塞がるからちよつとめんどいが、コイツ戦闘を任せか。

「おい箱。敵が出たらお前が倒せ」

「了解。撃破より逃走を推奨」

「わかったわかった。こっちは『病人』抱えてるからな。無茶はしない」

こんな奴でも、役には立つだろう。出来る限り2Bへ衝撃を与えないよう行く事にしよう。

途中遭遇した機械生命体は大した事なく、箱だけでなんとかあった。そういやこのアジト、一度も来た事なかったな……来る必要もないんだが。特に門番がいるわけではなくすんなり中には入れた。

「2B!? と……どちらさん?」

横から男の声が聞こえた。振り向くとそこにいたのは『人間』だった。

ああ、こいつがマスターか……なんか、アンドロイドと違ってだらしが無いと言うか、しまりが無い顔と言うか……コレは確かに守ってあげないとダメだな。

「貴方は？」

「あ、ああ。俺はその2Bのマスターと言うかなんと言うか……」

「そうか……」

と言つて視線を逸らす。なんか顔を見るのが恥ずかしい……なぜだ？ そんな自分の状態に戸惑いを覚えていると昔に聞いた声が聞こえた

「A2? ……貴女がなぜここに……?」

「司令……官……」

色々と思うところはある。こいつが何を考えて私たちを見捨てたのか。必要な事だったのかもしれないが理解できない。でも、今は主の事が優先だ

「2Bを届けに来た。色々あつてな」

抱える彼女を奥のベッドに寝かす。まだ目を覚まさないが生きている限り救いはある。そう……救いはあるんだ

「そう……ありがとう……うう……」

「お前もお腹……」

「ええ。ご主人様の子供よ」

すつと、主を見ると、主は照れたように視線をそらした、なんとも可愛い人だ。そんな胸が気持ちよくなるひと時もあつたが

「A……………2?」

9 Sが帰つて来ていた。ああ、そういうえばこいつの誤解を解いていなかったな……

「貴様！ なぜ！ ここにいる!？」

「え？ え？」

周りはいきなりの激高に戸惑う。しかし、助け舟をよこしたのは意外にもホワイトだった

「9 S、落ち着、きなさい。彼女は敵ではありません」

「しかし!!」

「疑うのであれば2 Bをスキャンな、さい。生きていますから……」

「A 2……………その……………ごめん」

「いや。気にしてない」

色々ドタバタしたが私の疑いは晴れた。まーあの現場を見ればわからなくもない上、

2 Bはまだ眠ったままだ

「一体、どうなっているんだ……」

主が2Bの手を握りながら言う。なんとも苦しそうな声だ。この人はどうして他人に対して気をかけることが出来るのだろうか？ それを私にして欲しい……と何考え
てるんだ？ 私は？

「推測、体内にてワクチンの生成もしくは、何かしらの回復状態の発生」

「ええ……私も、ウイルスにかかっていた時より幾分か楽になってます」

「ホワイト……なんでそんな無茶を……」

「ふふ……その2Bに、『死ぬならご主人様に会ってから』と言われましたから」

なんだか二人でいい雰囲気醸し出しているが、ちよつとイラつと来てしまった。なので話題をこつちから振る

「おい箱。ウイルスは除去されてないんだな？」

「肯定。2B内のウイルスは除去されていない」

周りがざわつく。多分ヨルハ部隊やそうじゃない面々が離れていく

「同じく。コマンダーも除去はされていないが、腹部に集中のため、本体への影響が減っていると思われる」

「なんだ？ そりゃ？」

意味が分からない。が、主がぶつぶつとつぶやいている。顔色もよくない。心配に

なつて声をかける

「主？ 何か気になる事でも？」

「あ？ ああ。いや、その、ウイルスが腹部つて事と、子供が気になつて……妊娠してる人が薬物とかそういうのに犯されると……」

その説明を遮るように苦痛の悲鳴が『二人分』響いた

「あああああ!!」

「あう！ うううう！」

ホワイトと2Bだ。二人ともお腹を抱えてのたうちまわっている。

「いい痛い!? 今までこんなことわ！」

「お、お、お腹があああ」

ホワイトは立っていられずうずくまり、寝かせていた2Bはベッドの上で体を左右に寝返りをうちのたうっている。見ているこつちも痛くなりそうだ

「とにかく！ 体を押さえろ！」

「司令官、ベッドへ!!」

赤い髪のアンドロイドが指示をだすと、何人かアンドロイドが出てくる。数人は2Bに似て、数人はホワイトに似ていた。2Bとホワイトがとても苦しそうにもだえる

「なんで……今まで出産で……今まで苦しうなんて……」

「わからん。でも何があってもいいように準備だ」

赤い髪のアンドロイドも大きなお腹をしながら冷静な指示を出す。そして出産……
時間はそこまで長くなかったが……

「……機械生命体……？」

二人から産まれたのが、機械生命体に酷似したものだった。

「どういう……ことだ……？」

主が顔色を真っ青にしている。今すぐにも支えてあげたいが、私は主の剣。現状の
確認と傷害の排除のため、全力で考える

「箱！ 報告！」

今多分、私が分析するよりこいつや9Sが分析した方がいい。そう判断して指示する
「……多分……ウィルスの影響かと……」

「推測。体内のウィルスをすべて吸収した結果」

「ああ……」

主が膝をついてうなだれる。なにか心当たりがあるようだ。アンドロイドが機械製
生命体を造る。こんな異常事態だったが、それに対して以外に冷静な声をあげたのは
『本人』だった

「ママ……アリガト」

「ウン。ワタシ達。二人ノタメに産マレテキタ」

「はあはあ……9H1? 10H1? ……」

2Bはまだ虚ろな表情を浮かべているが、ホワイトが答える。そして産まれたばかりの赤子が言うことは、あの時を思い出すような心をさす言葉だった

『ワタシを殺シテ』

あの時、森の王を名乗る機械生命体を殺した私。あれは敵だから何とも思わなかった。確かに同じ存在。そのはず……そのはずなのに……主の子供というだけで、殺すという言葉にとてつもなく重圧を感じる。

「推奨、早急な破壊もしくは機能停止」

「ポッド……何を……」

ホワイトが否定する。しかし9Sが続く

「……2Bと、司令官のウィルス反応は消え、ました。多分、子供たちが全部……」

お腹に集中した……この子たちは、母親を守るために自分たちに毒を集めて……

「ウン……私たちハ、また作レルけど」

「ママは、モウ修理デキるかわからない」

とても合理的だ。確かに子供はその気になれば何回でも作れる。母体さえあれば。

アンドロイド的な思考に納得しかけた私に……

「ばかやろーおおお!!」

主の声が響く。それは怒りのような慟哭のような

「何度も……違うだろうが……お前たちはただ一人の9Hで10Hだ……たった一人の、娘なんだよ……」

機械生命体。人にとっては自分を滅ぼす存在のはずなのに、主は産まれたその二人を抱きしめる

「……命は……一つなんだ……どんなにセーブ、ロードが可能でも、『今』を感じるの是一つなんだ……お前たちは俺の娘だ……だから……何度でもなんて言うなよ……」

「パパ……」

……改めて確信した。この方は私の守護すべき存在。すべてをささげ、この人のためにすべてを賭けるお方。A2は貴方の剣となりましょう

どこかでやっぱり納得できなところはあった。自分たちを作った。そのアドバンテージだけで上位にいる人間。でも、あの共有、2Bや司令官に寄り添おうとする姿。そしてこの命に対しての悲しいまでの想い……

9S改めて誓います。貴方の心を守る盾となります

「パパ……」

産まれた9日と10日が俺を見つめてくる。機械生命体であろうが関係ない。この子は俺の娘だ。しかし、この子たちからの話は俺の心を深くえぐった

「ワタシたちを破壊してクダさい」

「な……」

「私達ハ、ママのウイルスを全部吸収シマシタ」

「コノママだと暴走して、みんなに迷惑がカカリマス。だから」

『壊して下さい』

……昔、不思議に思ってたことがあった。

それは、障害や知恵遅れの子供を持つ親御さんに対してだ。その時の俺は障害や寝たきりの子供を世話する人を見て、それが人間として生きているのか？ 死んだほうがいいのじゃないのか？ 動物以下じゃないのか？ と考えていた。だって、本人がそれを望んでいるのか？ なんて考えてた……でも、今なら俺は、その時の俺をぶん殴ってやる。命も心もそのために頑張っていたんだと。確かにその子たちは、外に対して何も伝えられなかったかもしれない。親にとつても、自己満足なのかもしれない

でも、そこには「生きている」という心がある。だから、精一杯家族で頑張っていたのだと……

「お……俺は……」

あの時の俺なら多分、迷うことなく壊していたと思う。でも、数多くの娘とその想いと愛情を感じ、命の重さを実感してそんな事は出来ないと思う。しかし二人にの決意は

……

「パパ……ママはいつも言っていました。パパは弱いけど、強く優しい人だと」

「そんなパパだからこそ、ママが必要なんだって」

2Bとホワイト。俺にとつて初体験ともいえる二人。いなくなるなんて想像できない存在。でも、そのために……

「ママは、産んであげられなくて、ごめんって言ってもらいました」

「ママは、貴女だけでも無事に産んでみせるって言ってもらいました」

『それで充分です』

2Bとホワイトが泣き崩れる。他の娘たちも声を出していないが口を押えて泣いている

「マスター……このままだと、ウィルスが拡散される可能性があります」

ポッドが無慈悲にも状況を伝えてくる。逆に冷静になれてありがたかったが……

『ぽぽ、お願います』

心を殺す。あの時9Sを殺したように。傍にあった武器、何かわからないがそれを手

にして、娘の心臓と思えるところに向けて……向けて……動かない。この子を殺さない
と、他の人に迷惑がかかる。それは自分が背負えばいいって話ではなく、疫病のような
話。自分だけでは何ともならない話。それでも、やっぱり手に力が入らない……

ずいぶん迷っていたと思う。でも、それを砕いたのは金属音だった

「9S!?! A2!?!」

二人のアンドロイドが俺の娘を「殺して」いた

「A2ネーチャンありがと……」

「……気にするな」

「9Sおにーちゃん、パパを……」

「うん……」

その日、初めて失った事に、俺は絶叫した。頭ではわかってる。何かを助けるには、何
かを差し出さなければいけないことに

でも、娘か嫁か。そんな選択誰が出来るのだろうか？ 両方と選ぶのがほとんどじゃ
ないか？

そんな俺の慟哭に対して、誰も答えはくれなかった……

剣と鞘

私は戦闘用アンドロイドA2。随分昔に地球へ送られて、『ちよつとした事情』で脱走兵扱い。本部に命を狙われていた。何か大きな戦闘があつたかと思うと、機械生命体が急に活発になり、息を潜めていた所、今度はヨルハ部隊がウイルス汚染。状況がつかめずにいたが、2Bに再度遭遇。色々あつて、アネモネのいるアジトに今落ち着いている。

「2B、ホワイト司令……なんとというか、無事か？」

「ああ……体は問題ない」

「私も、さつきまでのウイルスの熱はなくなりました」

先ほどの騒動も落ち着き、アジトにいるメンバーは色々壊れている箇所を修繕しているようだ。

「メンタルにはちよつとノイズはあるが、マジで健康体だな」

「ええ。本当にあの子たちがウイルス全部、引き継いだのね……」

「……」

産まれたばかりの子供を殺す。ただ機械生命体を殺すだけの私でも、今回のはちよつと堪えた。なにより主の子供というところで一瞬迷つたが、主が手をかけようとしたと

ここで吹っ切れた。多分9Sも同じで、その命の重さを、主に抱えさせるわけにはいかない」と決意した

「2B、司令官、こんな時になんだけど、さっさと子供作った方がいいぞ」

「ええ。今後も考えと……」

「出来ないよ……」

「私も今すぐはちよつと……」

「あ………違う違う。9H1や、10H1のような事じゃない」

「もしかしたら、あなた達には『抗体』が出来ている可能性があるの」

何の事だ？　そういえば、ポッドが2Bのお腹に向かってワクチンがどうか言っていたがそれか？

「どういう事？」

2Bも同じような疑問を持ったのか聞く。私も、小難しいのは苦手だ。二人の赤い髪の毛のアンドロイドによると、感染して、除去したのではなく、そこから回復したことから、慣れが起こっている、もしかしたら次の子供からウイルスに対して強い子供が生まれるかもしれないと言う事。その子達の事を調べれば、今後ウイルスに対抗できるワクチンが出来るかもしれない。という事だった

「9Sに調べてもらえば、かなりの確率でウイルスに対して対抗手段が出来ると思う」

「9Sがいれば、感染してもなんとかなるが、いつも一緒とはかぎんねえだろ？」

「うん……でもマスターは……」

主は目の前で子供を失ってから、今は部屋で休んでいる。お世話のために、2Bによく似たおっぱい丸出し痴女が付いている。アレも娘だというのだから、少し主の趣味を疑った……私もあんな恰好しなければダメなのか？

「マスターには酷だけど、今、立ち上がってもらわないと……」

「そうだな。私たちの子もそろそろ産まれるから、産まれたらたつぷりラブドールとして癒してあげられる」

「らぶ？ どうる？ 何だそりゃ？」と思いつつ、今の主に必要なのは癒しと時間。し

かし、周りはそれを待ってくれない。

「私が話してみよう」

「A2……」

「主にとつて、私は憎むべき存在だ。もしかしたらそれを糧に立ち上がってくれるかもしれない」

「A2その結果、貴女に死ねと命令されたらどうするのですか？」

「……あの人の子供を殺したときから、私の命は主の物だ。その命令が下っても後悔はない」

機械生命体として産まれた存在を、子供と言い切った心の強さ。その強さを私は信じたい。二人に決意を告げて主が休む部屋へ向かう。もう一度、会いたい。そんな気持ちもあるがあの人のためにつくそう。何をされても私は受け入れる。そんな思いでドアをノックした

「どうぞで」

不意にノックされて、素で反応した。昨夜は6H1に世話をしてもらい、今日も朝から外に出る気が起きず部屋で過ごししていた。

2回食事を摂ったから、おそらく昼過ぎ頃だろう。昨日のアレも少し落ち着いて、ゆっくりしている所にさっきのノックだ。そして入ってきたのが……

「A2……」

体に力が入ったのがわかる。子供を殺した。そんな感情が渦巻くが、同時に、彼女達がいなければ俺が殺していたかもしれない。いろんな感情がぶつかって、一瞬吐きそうになったが耐えた。

「なんの御用ですか？」

6Hが間に入ってくれる。この子の将来は、本当に優秀メイドになりそうだ……色々格好は問題だが

「様子を見にきた。それと……」

「それと？」

「改めて誓いを立てに来た」

そう言つてA2が俺の前に来てかしづく。

「ヨルハ、アタツカー二号。今後貴方の剣となり、あらゆる障害を排除いたします」

「その最初の仕事のアレか……」

「はい。主の決意をしかと感じました。それ故に貴方が手を下してはダメだと判断し、私が殺しました」

胸が痛くなる。つい殴りかかりそうになつたが、彼女のボロボロな姿と対象的な目に強さに止まつた。まるで泣いてるような顔と裏腹にとても強い目の光。不覚にも可愛いと思つた

「ふう……」

「父さん？」

「どうして俺は、女の決意に弱いんだらうな……」

「あら？　いつもの事じゃないですか？」

「えええええ……」

くすくすと二人で笑う。なんか少し心が軽くなつた気がした。

「その？ 主？」

居心地が悪いのかA2が声をかけてくる。……まだ整理はついてない。けど、この強い光を俺は知っている

「まだ、許せるかどうかはわからない。けど、お前の気持ちはわかった」

「はい……」

「この先一緒に暮らして見極めさせて欲しい」

「!? では!?」

「父さん甘いです……」

「うっさい。美人に優しくがモットーなの」

「え？」

それを聞いてA2が急にもじもじします。……なんか可愛いじゃねえか

「では、『剣』の所有者として、登録が必要ですね」

「え？」

「はい……」

顔を真っ赤にしたA2が、消え入りそうな声で答える。登録ってまさか……

「さあ父さん。遠慮なく、ずっぽしやっちゃってください」

片方の親指と人差し指で丸を作り、もう片方の手の人差し指で、作った丸に抜き差し

する。……娘よ、そんな下品な表現はやめなさい……

『父さん、ちよつと待っててね』

と言われて約30分。俺は今部屋に一人きりだ。6Hが「そんな格好でお相手なんかさせません」と言いA2を外へ連れ出した。

かく言う俺も服を脱いで待つてる時点で、期待してるの言うまでもない。

コンコンとまたノックが聞こえた。返事をして入室を促すと、A2だけが入ってきた。さつきまでの薄汚れた格好から一変して、体は綺麗に拭かれた様子で、髪も整えたのかさつきより綺麗に見える

服も2Bと同じレオタードを着ていて見違えた。

「綺麗になったな……」

「そんな……」

自分の体を抱きしめつつ、A2が近づいてくる。目の前に来ると腰掛けている俺の足元の蹴き、股間に手を伸ばす。まだ大きくなっていないチンポを掴み

「では誓いの口づけをします」

そう言つて大きく口を開けると、勃起していないチンポ丸ごと口に含んだ。急な快感のため息とつい腰を突き出してしまい、A2の鼻が俺の下腹に当たる。A2が嬉しそう

に鼻息をもらすと、俺の腰に手が回ってきても腰が固定された
「んふう。……はぶはぶ、もぐもぐ……はぶはぶ、もぐもぐ」

咀嚼するように唇が縦に動き、歯軋りのように横に動く。根元をひたすら刺激され、
A2の口の熱さチンポにうつりどんどん勃起していく。

「ん！ ふうん……」

「気持ちいいぞA2」

頭を撫でて褒めると、顔を上げて潤んだ瞳で見つめてくる。目が合うと腰に回っていた手が背中の方まで回り、更に深く啞えようとしてくる。すでに顔の位置は俺のお腹くっついていてため、勃起していくチンポはA2の上顎をなぞり、喉を貫いてゆく。

「んん！ ……んふうんふう」

鼻で大きく呼吸するもんだから、ちよつとくすぐつたい。完全に勃起したチンポは、恐らくA2の喉の奥にまで入っている。ちよつと気になってA2の喉を撫でると、首越しに自分のチンポの感触あった。

※人類の陰茎の挿入を確認※

※……長期メンテナンス不足により、人工子宮の生成が困難。推奨：オーバーホール

※代替として慰安特化型への改修※

※陰莖挿入可能全ての穴を、マイクロサイズまで合う様に調整※

ああ、一体化していく。私の喉が主の陰莖にどんどんくつついていく。それこそシワの一本一本の間まで、浮き出る血管から血の流れを感じる……

美味しい？ 気持ちいい？ いやこれは……嬉しいだ。私の全てが主の物になっていく。主に頭を撫でて貰うたび、もつともつとも思いつい頭を振ってしまう。その度に主が気持ちよさそうな声をあげるから、余計に嬉しくなる。

だが私は欲張りだ。さつき6H1に聞いた『アレ』が欲しくしようがない。主と一つになっているこの感覚は素敵だが、味わう為にも喉を動かす。頭は一切動かさず『喉だけ』脈動させて陰莖をマツサージする。主の声が大きくなってくる。ふふふ、私は戦闘型だからな。相手の弱点を見つけるなんてのは得意だ。

主の背中に手を回し、頭は全く動かさずそれを続けていると、主から「出る」と言われ頭を掴まれた。陰莖がビクビクつと震え、渴望をしたソレが喉の奥に直接注がれる。

ビクン、ビュク、ビクン、ビュク、何度か陰莖が痙攣し、その度精液が注がれる。体の中に注がれる温かさ……先程の主の優しさに触れているようでとても嬉しかった。

何度かの痙攣の後射精も終わると、主が大きく息をついた

「A2の喉……なんと言うか凄いな」

「んうっふー」

唾えたまま答える。主褒められる事がなんと心地いい事か。だけど目的これだけじゃない。これから本番登録に向けて口から陰茎を抜いて行く。名残り惜しく、つい先っぽを唾えたまま舐めてしまったが、口から離し主へと背を向けて立ち上がる。

「主……私の使用者としての『永久登録』をお願いします」

そう言つて女性器を主に向けて両手で広げて入れやすくする。

さっきのフェラと言うか喉コキというか凄かった……。頭は全く動いていないのに、喉が波打つて電動オナホみたいだった。我慢出来ず、つい頭を抱えて奥に射精してしまつたが、A2にとつてもよかつたのか、二人一緒に抱きついてしばらく動けなかつた。ゆつくりマッサージをしながらチンポを口から抜いたA2が、俺にお尻を向けてマンコ手で広げてくる

「主……私の使用者としての『永久登録』をお願いします」

立ち上がつてがしつと腰を掴む。「あん」A2が可愛い声を出し、俺もチンポの先をマンコに当てる。A2はマンコを広げたままじつとしている。俺の決断を待っているよ。うだった。

「A2。永久登録つて言う事は……」

「はい。主が死した後は、後を追う所存です」

「何もそこまで……」

「剣は所有者あつてこそです。所有者がいなくなれば、武器ですらありません」

他のアンドロイド達とは違う覚悟。確か彼女は俺の子供を殺した。でもそれも覚悟のうち。そんな戦士としての気高さに俺は愛おしくなつて一気に挿入した

「あ、あ、あああつあ」

「おおおう？」

さつき口に入れたように、とにかく吸い付いてくる。溶けて一つになつたような錯覚を覚えるほどびつたりだ。こつちも上の口に負けず劣らず、波打ったりしてグニグニ動いてくる。

「こ、これが性行……」

「ああ……」

ぴーんと背中を張りつつも広げた手は離さない。そんなA2のお尻を見るとアナルがちよつと開いていた。いたずら心を刺激されてしまい、つい指を入れる

「んん！——」

「うおう」

さらに締め付けられてしまい、声を上げてしまった。でもそのまま指を増やしていき

3本4本……そして拳をゆっくり入れていた。

「あ、主……何を……」

「ん……ちよつと、試してみたくて……」

手首まで入った拳を広げてA2のマンコに入れた自分のチンポを挿んでみた。そのまま腰は動かさず、手を動かしてチンポをしごく。まさしくオナニー状態。それでもA2のマンコは俺のチンポにどんなにじんてくる感じがする。A2は手を動かすたびに「あ、あ」と苦しもうにも気持ちよさそうに見える

「もつと……もつと……」つにしてください……」

そんな懇願をしつつ、A2は体を動かさずさっきの喉と同じように、マンコは俺のチンポにびったりくつついてうねりだした。そんな快感に耐えられず、そのまま中出しをした

「んんー!!!」

A2の体が激しく痙攣する。他のアンドロイドと同じように射精と同時に絶頂しているようだ。マンコも俺が握っている以上に収縮、波打ちを繰り返えし、射精を手助けする

「ああ、見事な『登録』です……主……」

びゆくびゆく射精が終わっても、A2のマンコはうねりをとめず、尿道の中まで絞

り出すようだった。俺も半分無意識でお尻に突っ込んだ手で自分のチンポを腸越しにしつゝ

※A2の所有者の登録を完了いたしました※

細身で華奢。ホワイトのようなおっぱいもなく、2Bのようなお尻の弾力もないけど、この俺にぴったりと合わせてくれる献身さは、別の満足を与えてくれた

その後も、A2はフェラを大変気に入ったのか、口でしばらく愛してくれた

変わりゆく形

翌日、デボルとポボルが無事出産。案の定女の子で、名前はID1、IP1と二人の要望で名付けた。なんでも、自分達の名前は罪の証だからと言う。

そして二人にお乳をあげているのはホワイト。何故かデボルとポボルは母乳が出ず悔しがっていた。

「確かに小さめだけど……」

「司令官には負けるけど……」

と恨めしそうに見ていた。

A2は俺が起きた時にはすでに部屋にはいなくて、9Sとコンビを組んで地震の原因を調査しに行っている。

……そう、9Sの今のパートナーはA2なのだ。話は俺が起きる前、A2がアジトを出る前になる……

「本気なんだな……2B?」

「A2……今の私は戦う事が出来ない……」

2Bが辛そうに答える。ウイルスの影響なのか？ とか、9Sに調べてもらったが、その影響ではなく何か別の要因だそうだ。

「武器を持つと手が震えてしまう。君がさつき殺した娘達の姿が頭に浮かんで……」

「そこだけ記憶消去すれば？」

「それは駄目だ！ ……マスターが同じ苦しみを背負っているのに、私だけ忘れるなんて……無責任すぎる」

確かに……私も言つて後悔した。

「ポッド、操作権限を2BよりA2へ譲渡」

「了解」

「……」

「譲渡完了。ヨルハ随行支援ユニット。ポッド042これよりA2の支援に入ります」

「別にいらないつての……」

「そう言うな。役に立つ」

私の軽口に、はにかんで反応する2B。まだ表情は暗いが、少しは手助けになったよ
うだ

「では、2B。貴女のもう一つの申請も併せて許諾します」

「？ 司令、なんだそれ？」

「司令官……ありがとうございます……」

その申請は、正直そこ変われ！ って言いたくなる、羨ましい話だった……

その話を聞いてほっとした。戦っている姿を見たのはあの時だけだったが、傷を負って帰ってくる度に、とても苦しかった

「ひとまず、ご苦労様」

簡易診療所となった、ポッドのパーツ売りの後ろ。そこに座っている2Bの横に座り手を握る

「はい……でも、まだ機械生命体が……」

「それでも、区切りは必要だよ。2Bひどい顔してる」

魂が抜けたような、目に光の無い表情。今までずっと戦って来た子が、自分の意思に反して引退するとなると、ショックも大きいのだろう……

「そうですね。今の貴女に戦闘は任せられません」

「ホワイト……」

いつの間にか近くにあったホワイトがはつきり言う。司令官として冷静な判断だがホワイト顔も、随分疲れているように見える。

「それに貴女の申請を許諾したのです。新たな任務に専念して貰わないと困ります」

「ホワイト……こんな時に」

今、彼女達に必要なのは休息だ。俺もまだ本調子じゃないが、とても任務が出来るとは……

「はい……」

と、消え入りそうな声で2Bが答え、手を握り返してくる。心配になって顔を見ると今度は赤くなっている

「コホン。戦闘用アンドロイド、ヨルハ二号B型は、本日を持って、ヨルハ二号繁殖用アンドロイドB型として換装。今後も2Bの名称は変わりませんが、ご主人様との子供をより多く作り、またその育成、教育に従事しなさい。子宮が二つあるあなただから出来る任務です。心してかかるように」

「はい」

俺の手を頬に持っていき、頬擦りする2B。腕を組んでその姿を凝視するホワイト。ちよつとした修羅場な雰囲気なりつつも、今の俺が置いてけぼりだった……

『初』任務

俺の部屋として使っているここに、三人いる。

戦闘型あらため、繁殖型として変更した2B、そしてその娘8H1……。他の娘はそれぞれ特徴があつて見分けがつくが、8Hは母親に瓜二つ。もはや双子と言ってもいいぐらいそっくりなのだ。

「今日は、顔を隠してるのか？」

更に今、二人とも目を覆い隠すようにしている。初めて2Bと会った時につけていたアレだ。

「今日はちよつと考えがあつて……」

両手を胸の前で組み、もしもじする2B。かろうじて見分けるには口調か、俺の呼び方しかない

「私も、ママの役に立てて嬉しいです」

「ええ。ありがとう8H1」

「どういうことだ？」

2Bが、娘への性教育(実技)はいつもの事だが、娘が役に立つというのは初めてじゃ

ないか？。疑問に思っていると、二人がベッドの方へ向かい仰向けに寝る。膝を立てて、アソコが見えやすくして、レオタードを8日がずらす。そこはぴったりと閉じた毛が一本もないつるつるなマンコが見える。毛が無いのは全員一緒だが、ぴったり閉じているだけでなぜか背徳感を感じる

「さあ、マスター。まずは娘マンコをほぐしてあげてください」

「あ、ああ」

そう言われ、スジが一本入っているそこに手を添えて、指で口を開く。すると二人からため息がもれる。

「パパあ……もつとお……」

娘の淫らなおねだりに嬉しくなり、よく観察してみる。2Bと比べてクリトリスが大きいようだ。それにキスをする、また二人同時に声上がる。やっぱりおかしいと顔を上げると、手を繋ぎながら二人が答える

「ふふ。気がつきました？」

「ママへ感覚を共有しているんです」

「どうして？」

「その……どうしても叶えたい事が……」

足を閉じて照れた様子で2Bが説明する。

「処女喪失を、どうしても体感したくて……」

「ママ……可愛いです」

「ああ……」

足を閉じながらも、手でオマンコをいじりだし、くちくちと粘着質な音が聞こえる。

「さあパパ？ 親子処女をどうぞ味わって下さい」

真横になるぐらい大きく足を更に広げ、父親を誘う娘。相変わらずこのシチュエーションは躊躇ってしまうが、抗えない興奮もある。はあはあと俺の息づかいが荒くなり、ガツチガチに勃起したチンポを娘のマンコへ挿入していく。少し抵抗を感じたが、龟头だけにゆんと入って、いつもの壁を感じる。

「入っていないのに、『ある』感覚……不思議……」

「パパチンポ、熱くて素敵です……」

「でしょう？ 孫までとりにこにする最高のおちんちんです」

「な、なんか言い方がいやらしいな……」

「何を言ってます？ 孫もひ孫もやしやご、らいそん、こんそん、とずーつと種付けするんですから」

「あん！ チンポがびくんって動きました」

それ、一応わかっただけだが、孕ませる相手が全部実の娘でそのさらにつてなると、父

親としても嬉しいしやっぱりくるものがある。事実今も血のつながった娘の処女を奪おうと先っぼだけ入ってる状態だ。これが普通になりつつある俺も異常かもしれないが、これから増えるこの行為に気持ちが高ぶってくる

「じゃ、じゃあ入れるぞ？ 8H、2B？」

「はい。パパチンポでずぶつと来てください」

ゆっくり腰を進めようとするが、やっぱり膜が当たり抵抗を感じる。ゴムのようにながのびるのを感じながら進めると、チンポの半分ぐらいで、ぶつんと急に抵抗が無くなった。

「ん!!!」

「いっ!!!」

二人が体を強張らせる。やはり破瓜は痛いようだ。奥までぶち込みたい衝動を抑え、お腹を撫でる。少しづつ力が抜けていき、握り潰されるかと思うぐらい締め付けていたマンコも緩んできた。

「マ、マ？ どう？ 一度限りの、初体験は？」

「想像以上に痛かった……」

「う。すまん……」

「いいえ。確かにまだ痛みますが、『貴方のモノ』だと刻まれた痛みと、おちんちんの熱

さが相まって、とても嬉しい……」

アソコを隠すように手を当てている2B。血は出ていないようだが、まだ慣れないようだ。二人の緊張をほぐすべく、8Hのおっぱいを揉みつつ、2Bへキスをする。

しばらく二人の反応を楽しんでいると、8Hが足を俺の腰に回して来た。腰も小さく上下に動き催促しているようだ。そんないじらしさを可愛く思い、2Bへのキスを中断して8Hと向き合う。胸から手を離し、体重をかける様に覆い被さり、ゆっくりゆっくりチンポを娘に入れて行く。硬い。そんな印象を受ける娘マンコだが、くにゅくにゅとマンコ独特の感触と共に奥へ入る。

全部入ると亀頭が啞えられるような感触がする。これは多分子宮に入ったんだと思う。腰が密着し、動かなくても亀頭が甘噛みされて気持ちいい

「パパあ……チンポ……すごい」

「当たり前よ？ 貴女を作ったおちんちんだから」

「8H？ お前の娘マンコも、俺のチンポに甘えて離さないぞ？」

「だってえ……パパ、大好きだもん……」

そう言つて今度は抱きついてくる。体が密着して、8Hのおっぱいが俺の胸に挟まつてつぶれる。腰は円を描くように動き気持ちよさが上ってくる。こう刺激が増えてくるとオスとしての部分が反応して腰が自然と動き出す。ずっと……くちゅくちゅ……

ばんばん……どんどん加速する腰の動きに、8Hの喘ぎ声。それに合わせてすぐ隣でも2Bが気持ちよさそうな声を上げる。こうなるともう腰は止まらない。娘を氣遣つてゆっくり動いていたが、同時に娘を犯しているというシチュエーションは、男としても父親としても頭が沸騰しそうになる。

「パ・パ……も、気持ちいい？」

「はあはあ。ああ、8Hのマンコ、気持ちいいぞ」

「マスター……さあ、血のつながった実の娘に、たあつぶり種付けしてあげてください」
2Bがわざと興奮する言い方をする。その言葉が引き金になり射精を始める。腰ががちり掴み、チンポを根元までねじ込んむと、カリ首に感じていた子宮口の感触が竿の真ん中あたりに感じた。どくどくと流し込んでいる充実した時間。8Hも他の娘と同様、射精を感じるとイクようで体を痙攣させて「あ、あ」と悶えている。それに合わせてマンコと子宮が痙攣するから射精が止まらない。

時間的には1分もかかって無いと思う。でもいまだ痙攣を続けるマンコと子宮が俺のチンポから精液を催促しているようで、このままもう一回続けたいと思ってしまう。抱きついていて8Hの手足が離れぐったりする。顔は例の目隠しのせいで見えないが、口はだらしく半開きになって、氣絶しているようにも見える

「マスター、お疲れ様です。そして私の『初めて』の人になってくださり、ありがとうございます」

「ございます」

すぐ横で寝てる2Bも体をびくびくと小さく震わせている。そして次は、と思い8Hからチンポを抜き、2Bと覆いかぶさるが……「あ……」と声を出し足を閉じられてしまう

「? どうした? やっぱり体つらいか?」

「いえ……その……」

ちよつと前までウィルスに侵食されてた。いわゆる病気の状態から、先日あの事件。まだ色々本調子ではないのだろう

「……10H1の事が頭から離れません……」

「ああ……」

産まれてすぐ、自分を殺して欲しいと言った娘。それは客観的に見れば正しい判断で、それに応じたA2の判断も、その決意もさつき聞いた。それでも、やはり俺達の中ではまだ納得できてない部分が多い。

「2B、俺もあの子の事は決して忘れない。自分の命を懸けて母親を守るなんて、俺にも出来るかわからない。本当にすごい娘だよ」

「はい……」

「10H1に一杯妹を作ってやって、お前たちにはすごい姉がいたんだぞって自慢した

い。あの子のおかげで俺は2Bを失わずにずんだんだって……」

「……」

「その……ただ単に、2Bに子供を産んで欲しいって言う俺の欲求もあるけど……妊婦姿の2Bが一番綺麗に見えるし……」

「ふふふ……変態マスター」

「うっさい」

くすくすと笑う2B。目隠ししているからその表情は深読みできないが、少しは力になれたと思いたい

「本当につらいなら、今後は子作りより、子育てに専念するのもありだと思う。……俺はちよつと、いや、かなり嫌だけど」

「それは私の存在意義に反します。何せ『繁殖型』ですから」

「じゃ、じゃあ?」

「はい……私も、やっぱりマスターの子供を産みたい……」

ゆつくりと足を広げていく2B。M字開脚のように広げた足の間から見えるオマンコとアナルは、すでに口を大きく開いており、準備は万全のようだ

「どうぞ……マスター専用繁殖型アンドロイド二号。どうかお使い下さい」

相変わらず、俺の股間と欲望を刺激するおねだりだ。そのまま犯そうと思ったがふと

思いついたことがあったのでお願いしてみた。それは、最初の時と同じように四つん這いになって後ろから犯すという体位だ。

四つん這いになった2Bのお尻を揉む。この尻肉本当に揉みごこちが最高で、おっぱい大好きな俺でもはまる。いつまでも揉んでいられるが、俺のほうが我慢できなくなり、次はお尻に挟んで尻コキをする。パイズリには負ける柔らかさだが、2Bが時々力を入れるたび、きゅつと挟まって気持ちいい。

「あん……はあはあ。何だか、初めての時みたい……」

「そうだよ。あの時と同じ。なんせ今日は『繁殖型』として初めてなんだし、処女も貰ったし。やっぱし2Bはバックから思いつき……」

「はい？」

2Bの顔に近づいて、耳元でねちっこくささやく。さつき俺の興奮を上げたお返しだ「処女ケツマンコを、ずっこずにチンポぶち込んで、どろっどろの子種流し込んで、たっぷり妊娠させてやる」

「んん——!!」

2Bがシーツを掴んで体を痙攣させる。まさか……

「言葉責めでイったのか……?」

「だ、だってえ、そんな情熱的で、素敵なセリフ……気持ちいい……」

まだ軽く痙攣している2Bが、あの時と同じようにお尻に手を当てて開いていく。挟まっていたチンポが開放され、そこには呼吸をするようにアナルが開いては閉じてを繰り返し、チンポをねじ込んで欲しそうに見えた

「マスターのおちんちんが、欲しくて欲しくて仕方ないって、私のケツマンコの言ってるのわかります？」

「あ、ああ……しゃべってるみたいに、くぱくぱ動いてる」

「はい……来て下さい……マスター……」

チンポを掴んで、アナルに添える。先っぽはなんの抵抗も無くぬるりに入った。しかし、入った後、形を確かめるように全体が甘噛みをしてくる。

「は、早く全部挿入してください。マスターおちんちんの形に合う様調整しますので」
「今でも十分、気持ちいいよ」

そう答え、2Bの腰を掴みゆっくり入れていく。レイプするようにがんがんにつくのもいいが、こうやってゆっくり馴染ませるのも、俺の形を刻み込んでいるようで気分がいい。

「マスターに……一歩一歩……征服されてる……」

2Bも気に入ったようで、そんなゆっくりな蹂躪を根元まで続けた。そしてゆっくり動こうとすると、アナルが吸い付いたままチンポにくっついてきた。まるでひよつとこ

のようにくつついてきてちよつと驚いたが、さすがにどこまでも伸びては来ず、本当に口ぐらいだけ伸びた。

「ふふ……驚きました？ 私口のマンコの能力を、そっちにも反映させてみたんです。おかげで、前よりおちんちん大好きになってしまつて……」

「本当、2Bはエロいな……」

「最高のほめ言葉です」

そうやって、ひよつとこアナルをゆつくり楽しんでいたが、だんだん抑えが効かなくなってくるのが男。いつの間にか思いつきり腰を打ち付けて2Bのアナルを犯していた。そんなスピードでも、アナルの吸い付きは変わらずチンポに食いついてくる。もうちよつと感触を楽しみたかったが、当然限界を迎え最後の一突きをする。2Bのお腹に手を回し、腰を出しつつ体をひきつける。8Hには悪いけど、さつきより出た気がする。射精も終わり、2Bがまたびくびくと痙攣している。

「やっぱり、2Bのアナルは最高だ……」

「あ、ありがとうございます……」

その後も、一度と言わず何度も種付けし、2Bは久しぶりに両方で妊娠。8Hも一回だけじゃ足りない！ と今度は母親の真似をしてアナルでも俺のチンポを受け入れた。

そして翌日。疑似処女体験をした事をホワイトが聞き。「自分も考えてましたのでお

願います」となり、母親そっくりに育った7日とホワイトとの初体験を味わう俺だつた……

交錯する想いと運命

バンカーが壊滅して、ヨルハ部隊もほとんど全滅状態。かろうじて残っていると思われる面々もウイルスに侵食されているため、現在は救出不可能。マスターの娘である9 H1と10 H1の命を懸けた機転により、2 Bと司令官を失うことなく済んだ。

残念なことに、2 Bは戦闘機能を消失したのか、戦闘はA2へ委任。今後は彼女をパートナーとしてだそうが……

「9 S。私は単独の方がいい」

と言われ、今は別行動を取っている。なんというか、協調性が無いというか、なんか拒絶されているというか……

彼女の方はあちこちに赴き、機械生命体の破壊を徹底して行っている。僕の方もバンカーみんなの仇を討ちたいから、見つけたら必ず倒す様にはしているが、どちらかというと調査がメイン。先日橋が落ちた原因調査にあたっているが……

「成長？ 修復？ この建造物は一体……」

以前イブと戦闘を行った窪地。そこに、見た事のない物が出来上がっていた。いや、現在進行形で『建築』されている。

「ハッキング……いや、危険だ。とにかくもう少し調べて報告に戻ろう」

どんどん上へと積み上がって行く謎の建築物。目的が見えない状況ではあるが、バックアップの取れない今は慎重に慎重を重ねよう

各地に発見されている謎の建築物。手を出せず経過を見守るだけだったが、アジトの方では新たに子供が産まれた。

2Bから11H1、12H1、司令官から13H1が誕生。僕とデボル達とで検査を行った結果、他の子供には見られないプログラムが発見。おそらくワクチンであろうと推測になった。汚染されたアンドロイドが現在発見されず、機械生命体にいくつか試すが、効果が出たとしても襲ってくる事に変わりがないので、効き目のほどがわからない。そうやって身の回り守備を固めている所にポッドから報告が入った。

「報告：建造物の建築が停止」

戦闘の出来るアンドロイドで様子を見に行く。やたら縦に造られた建築物。一際大きいのと複数の尖った物が完成されていた。近くと機械生命体の反抗を受けたが、それ自身は特に脅威では無かった。しかし

『「こんにちわ！ 塔へようこそ！』

思い切ってハッキングを試みると、妙に甲高く馴れ馴れしい女性のような子供のよう

な声があたりに響く。

まわりの小さなオブジェにも試したが、ハッキングそのものを受け付けられない強固なシールドに守られている。何か手が無いかと考えていると、その声が妙な事を言うてくる。

塔に入るにはアクセススキーを取得しろ

……ここまで強固なシールドを備えて置きながら、わざわざ解除方法を伝える手口。どう考えても罠だが、これをそのままにも出来ないかと判断し、アジトへ通信報告。アクセススキーの名称から、ここ以外の土地に出来た別の建造物の所へ向かう。A2はと言うと……

「ハッキングなんてめんどい。まかせた」

と言つて単独行動……僕には彼女の制御は難しそうです

「おいポッド。さつき言つてたアクセスなんとかがある場所はわかるか？」

「疑問：あと一文字をわざわざ長く聞く理由」

「なんでそう言う返しなんだよ……」

主の事は信用しているが、まだ他のアンドロイドは信用出来ない。手伝いはするが一緒に行動は遠慮願いたい。

「どこに行けばいい?」

「提案: 9Sと行動。連絡のタイムラグの解消」

「……さっさと教えろ」

アクセスキーは9Sがきつと手に入れるだろう。ただアイツはスキャナーモデル。露払いぐらいはしておかないとな

資源回収ユニット。さつきハッキングを試みた小さな建築物が言っていた建物。それは以前A2と初めて会った城の所にあるようだ

内部への侵入はあっさり出来た。しかし内部にはまだ敵が多く撃破しつつ進む……とどこどこ壊れている機械生命体があるが、なんだろう?

「エレベーターがあったり、複雑だったり……ここは一体?」

どうやら上が目的地のようだけど、時々、機械生命体が「痛い」とか「苦しい」とか言いながら襲ってくる。油断を誘うための嘘なのか? 行動が理解できないまま最上階とおぼしき場所に到達。中央に台座にのった光の玉があり、円形に広がった大きな部屋のような場所。そしてその部屋の端に何本か柱が動いているように見えた。よく見ると……

「機械生命体の……部品?」

「予想：機械生命体の武器、資源の製造工場」

「まずいな……早く停止させないと」

武器の供給を止めれば、多少なりとこつちが有利になるはず。光の玉がさつきから助けてと連呼しているが、意味がわからない。こつちも助けて欲しいぐらいだよ。そう思い、ポッドに射撃命令を出す。

無事破壊は完了。さつき動いていた柱も止まり、アクセスキーも入手。確か三つ必要だったな……次へ向かうとするか

二つ目は水没都市と命名した場所。ここはマスターとアクセスして戦ったな……。あの時はマスターに悪いことをした。僕たちの戦闘が人間にとってあそこまで負荷のかかるものとは……でも、僕にとっても貴重な体験で、お陰で感情が復活した。

「こつちは『魂の箱』でさつきのが『肉の箱』……機械生命体のネーミングセンスがわからない……」

ここも同じく上を目指すような構造をしていた。さつきと違うのがやたらとハッキングで扉を開けるための手順を要求される。ただその中で見過ごせない情報も出てきた

「射出……？ あの塔を名乗った建築物は何かをは発射するもの？ バンカーはもう無いから……月面サーバを狙って？」

そしてもう一つ、衝撃の事実が出てきた

「そんな……まさか……僕達ヨルハ部隊のブラックボックスが、機械生命体のコアで出てきている……？」

確かに、不利な状況を覆すのに敵の武器を鹵獲するのが手っ取り早いけど……

「……ポッド、この情報は嚴重にプロテクトをかけて、他の人たちに見られないようにしてくれ」

「了解」

削除しても、いつかはサルベージされるかもしれない。この情報は一旦僕が管理しよう

最上階では、さっきの肉の箱と同じ用に光の玉があつたので破壊。2つ目のアクセスキーを入手できた。

最後の資源回収ユニットは……遊園地のところか。あそこのジェットコースター、マスタールなら楽しめるのだろうか？ そんな事を考えつつ三度入る。今までより抵抗が激しく、かなり苦戦した。魂箱は謎解きのような構造だったけど、こっちの『神の箱』は戦闘ばかりだ。

なんと最上階についたが……

「あああ……」

「…………え？」

目の前に現れたのは見た覚えのあるアンドロイド、210だった

「オトコおおお！」

そう叫び『赤い目』を光らせながら蛇のような機械生命体を呼び出す。ここまでの度重なる戦闘に加え、見知った相手との戦闘しかも

「オペレーターさん！」

「210。侵攻作戦の時、戦闘型Bへの換装を希望。21Bとして作戦に参加するも4時間後に行方不明」

「なんで!？」

さすがに戦闘型へ変えただけあつて強い！ こつちもかなりの戦闘を経験したはずなのに……

「オス…………レイプ…………座標…………転送…………コダネ…………ハイは、一回で…………」
「くっそおおお」

彼女の攻撃は熾烈。今までの蓄積したダメージもあつたがひとまず動きを止めた。戦闘中の相手の独り言が気になって破壊は出来なかつた。

疲労困憊。表現としては多分これが一番合う。尻餅をついて大きく息を吐く。どうしたものかと考えていると相手が動き出した！

「オスううう」

「くっ！」

武器を振りかざされて思わず頭をガードする。ここまでか……と覚悟した

「何をやってる!?! 9S!?!」

武器は振り下ろされず、前を見してみるとA2に羽交い締めされたオペレーターさんがいた

「A2!?!」

「何をしている!?! さっさとハッキングしろ!」

「しかし……」

「壊すか直すかさっさと選べ!」

壊す? それは嫌だ。今、僕に出来るのは……

「ハッキング! ワクチン投与!」

一発勝負。こっちが感染するかもしれないけど、悩んでいる時間は無い。一人でも助けたい

「やっと止まったか」

なんだか9Sの動きがおかしかったが、知り合いだったのか。なら、あの動き納得出

来る。今、二人は再起動待ちだ

「報告：9Sと21B。バイタルに乱れはあるものの、メンテナンスで改善可能」

「わかった。起きるまではここにいます」

露払いと万が一を想定していたが、なんとかなったな。自身のシステムチェックをしながら起きるの待っていると9Sが起きた

「ううん……ポッド状況を」

「お前は寝てた」

「は!？」

身も蓋もない言い方だが、事実だからしょうがない。声をかけられて驚いたのか9Sが戦闘態勢をとる。勘弁してくれ……

「A2か……?」

「それぐらいわかるだろう? それに横に寝ている奴も」

オペレーターと呼んでいたことから、多分Oシリーズなのだろう。なんか武装が違う気がするが……

「その……A2? 君はなんでここに?」

「ああ……その、なんだ」

「報告：敵勢力の排除。および露払いだあああ! たまたまだ!」

こいつは本当、言わなくていいことを言う。

「それより、『そいつ』大丈夫なのか？」

「え？ ……ああ!!！」

傍に寝ているオペレータータイプと思うアンドロイド目を向ける。多分、スキャンだつたり何か検査してるんだろう

「ウィルスの反応が……ない……」

「いい事じゃないか」

正直、かなりほつとした。これで方が一昔の仲間を見つけても、壊す一択じゃなく助けられる可能性が出てきた。まー私の方じゃなくて9Sや2Bの方になるだろうが。すこし気が抜けてしまったが地震のような振動が起こる。9Sとオペレーターのいたところが抜けて下に落ちてしまった

「おい!!」

追いかけてようとするが、新たに機械生命体がこつちを襲ってくる。特に驚異でもなかったが、にいちやん、にいちやんと連呼する変な奴だった……

「う……ううん……」

「()は……？」

「9Sの起動を確認。おはようございます9S」

「ああ……ポッド……」

気を失う前のメモリーを呼び出す。A2に助けられて、床が抜けて……それで……ああ
「オペレーターさん!？」

慌てて周りを見ると、すぐ近くに210もとい、21Bが近くで寝ていた

「ポッド、状況の報告を」

A2の助成により、なんとか21Bさんへのワクチン投与は成功。その後、塔の一部崩落に巻き込まれ機能の一時停止。ポッドが救出してくれたという……

「ありがとう……オペレーターさんはどうしたらいいと思う？」

「現状。ウイルスの感知は無し。デボル、ポポルタイプによる診断があれば、確定可能と予想」

「……なんとか連れて帰るか……」

こういう力仕事は苦手なんだよ……と思いつつ、やつと誰かを助けることが出来るかもしれない。そんな期待をしつつアジトに戻って行った

進むため、重なる決意

「遅かったじゃないか9S」

「君ねえ……」

オペレーターさんをおんぶして、第3の資源回収ユニットからなんとかアジトについて一番最初がこれである

「9S。そいつがワクチン投与に成功したヨルハ機体か？」

「え、ええ……何故それを？」

「A2から報告を聞いていたのよ。検査の準備もオツケーよ」

「……ふん」

顔を逸らし奥へ向かうA2。なんだか怒った時の2Bに似ていて、ちよつと嬉しかった。

「さ、奥へ行くぞ」

「ええ」

デボルとポボルに連れられて、診療所と化した道具屋の裏へ行く。オペレーターさんをベッドに寝かせて、改めてこちらもスキャンしてみる。僕の結果ではウイルスの感知

はなし。ポッドの方も発見出来ず……

「結構危ないとこまで感染してたっばいな……」

「そうなの？」

「ええ。言語中枢の所まで侵食された跡があつて、もうちよつとでロクに喋れなくなる
ところだったかも」

「侵食された連中は……確かにひどかった……」

バンカーの時といい、あの時といい下品な言葉オンパレードだったもんな……

「でも、他の機体は侵食が早かったですが、なぜオペレーターさんだけ？」

「さあな……ただ、何重ものプロテクトというか抵抗の跡もあった」

「そうね。どうしても負けたくない。そんな信念を感じたわ」

静かに横になるオペレーターさんを見つめ、成功しているか不安を感じつつも、やっ
と一步踏み出せた。そんな気持ちを抱いていた……

「と言うわけで、なんだか怪しい塔へ入れるかもしれない」

「記録を見ました。資源を回収し、何かを射出する……。目的はわかりませんが、放置し
ては敵の増援を許すでしょう」

「アダムは間違いなく私が倒したと言うのに……」

定時報告は行なっていたが、私のは大体撃破関係。今回の救出や調査に関しては9Sが頼りだ。ただ、敵の目的がどうにもハッキリしない。恐らくは月面の人類を狙う算段らしいが、そこまで人類狙う理由もわからない。

「どちらにしても内部の調査、必要であれば破壊する方向で行きましょう」

「それまでは……控える、のですか？ 司令？」

「誠に遺憾ですが、ここを攻められた時の事を考えて、塔の問題が片付くまで子作りは……禁止いたします」

どうにもここにいる連中が沈んでると思つたら、そつちか……

「そ、そうか……」

主もなんだか沈んでるし……。ま、私は妊娠出来ないから、帰還する度に目一杯して
るからいいけど

「終わるまでは私はお尻中心に、2Bは残念ですがお口のみでご主人様のお相手をして
下さい」

「せっかく、繁殖型へ替わつたのに……」

今、なんの話してるんだっけかな……。

いつの間にか、ローテーションの話とか、回数の話とかかなりずれてる会議は、その
後しばらく続いた

翌日。オペレーターさんの容体は落ち着いているが、まだ目を覚ます様子はない。闘型へ換装したと記録上あるので、出来れば一緒に塔へ来て欲しかったが、これ以上敵に猶予を与えるとどうなるかわからない。

アジトの守りは2Bを始めとする一家に任せる形になり、僕とA2そして……

「現場での治療は任せろ」

「ええ。負傷しないのが一番ですが……」

デボルとポボルがついてくる事になった。

「娘達はもう一人前に看護出来ます」

「まだちつちえのにな」

「大きさは関係ないです!」

見送りに来ていたメンバーの中から、二人によく似た赤い髪の女の子が出てきた。

「そうよデボル」

「わりいーわりいー。ちよつと前までお腹の中にいたと思うとなー」

「母さん達こそ失敗しないですよ?」

「お? 言うねえ」

「私達の出番が無い方がいいのよ。それより……」

「うん。患者さんは任せて！」

そんな見送りを受けて最後にマスターが来てくれた

「9S……出来ればまた『一緒に』戦いたかったけど……」

「ダメです。今度は本当にどうなるかわかりません」

敵の本拠地と思える所に乗り込む以上、マスターの危険は可能な限り排除しなければいけない。

以前でさえトラブルで危なかったのだ。今度こそ……と考えると到底出来る事ではなかった

「……わかった。無事に戻ってこいよ？」

「……善処します」

そう言うのが精いっぱいだった。そうマスターに告げて僕たちは塔の場所へ向かった

「やっぱり敵が集まってるな……」

「でも、まだ少ないような？」

塔を見下ろすことが出来る位置から状況を観察する。正直、もつとこう大軍団を想像したが、下手すれば僕だけでもなんとかなるレベルな気がする

「万全を期すため、私達が露払いってことでいいか？」

「そうねそうしましょう」

「戦うの、久しぶりだな」

そう言つて3人が先行して機械生命体の排除に向かった。特に大きな抵抗も見えず、塔の周りがある小さな『サブユニット』に近づく。手に入れていたキーが反応してハッキングが可能な状態になりそのまま行こう。

一つ、二つ、三つとサブユニットは問題なく解除出来たが……

「おい！ 数が増えてきたぞ!」

「さすがに本体はつてことじゃない?」

「ちよつとマジになるか!」

敵がどんどん増えてくるが、三人のおかげで塔本体にハッキングができた……しかし「な!? この防壁は!」

多分ここが最奥だと思うけど、最後のハッキングがうまくいかない。どんなに攻撃してもはじかれてしまう。今までのハッキングなら、どこか別の所に壁を消すための柱のようなものがあり、それを壊せばはじかれることがなくなる

しかし、どこを探してもただの部屋。そこにどんなアクセス攻撃をしてもはじく壁を身に着けたヤツだけ出てくる。

しかもそいつらは一切攻撃もしない。つまり、カウンターを狙う事も出来ないからハッキングを一切受け付けない状態なのだ

「警告：閉鎖系防御システム」

「閉鎖……どうやって突破すれば……」

「予測：当該自我データを暴走させる。その自爆エネルギーで防壁を麻痺させることが可能」

「……それだと僕は入れない……か」

おそらく、塔の中は今以上の激戦になる。となるとスキャナーモデルの僕よりA2が適任だ。21Bさんが目覚めれば、さらに楽になるかもしれない

と、考えてると、ハッキングを中断されて塔にはじかれてしまった

「うわっ!!」

「9S! 何をしている!?!」

「大丈夫!?!」

3人がこちらを気にしながら戦いを続ける。扉を開ければみんなが入れる。……マスター、申し訳ありません……

「ポッドより、ハッキング結果を共有」

『自爆だど!?!』

「こら!?! 何を勝手な事を!」

ポッドがなぜかさつききの自爆の事を他のメンバーに伝える。伝えたところでどうにもならないのに……

しかし、それを聞いて『同じこと』を考える人がいた

「……デボル……」

「ポポル……やるのか?」

「……うん」

僕が再度トライするより先に、ポポルが塔に近づいて『ハッキング』を شدした

「ああああああ!!」

「ポポル!?! 何を!?!」

「私達はあ! やつと! 罪を償う機会がもらえたんだ!」

ハッキングをしているポポルと塔の間に、大きな火花が見える。徐々に徐々に開いていくが、まだ足りない

「やめるんだ! 君の回路が……心がもたない!」

「デボル……ごめん、たり、ない、みたい……」

「……大丈夫だ」

「ま……」

デボルもポポルに続きハッキングを開始する。火花がさらに激しさを増してあたりが白い光に包まれる

「デボル!? ポポル!？」

かなり強い光のため、視界が遮られてしまう。大きな音ともしており、どうなったかわからないが声が聞こえた

「9 S、後悔しないようにな……」

「娘と……マスターをお願い……」

時間は多分一瞬だったと思う。戦闘音はまだ続いているからA2が戦闘中なのだろう。「強烈な光のため、視覚回路の修復中」

ポッドの事務的な解説が聞こえる。ゆっくり視界が回復し、塔を見ることが出来るようになる、その扉はしっかりと開いていた。そして、その入り口には二人のアンドロイドが倒れていた。

「デボル……ポポル……」

急いで二人に駆け寄ると、すでにポポルの方は動かなかった。デボルも体が思うように動かないのかぎこちない動きだ

「9 S……これ、を……」

「何? データ?」

「私は……私達は……役にたったか？」

「……これ以上ないぐらいだよ……」

彼女の手をしつかり握り感謝を示す。僕一人の自爆だけでは多分開けられなかった。それをポポルが示してくれて、デボルが後押しをしてくれた。まさか入口でいきなりこうなるとは思わなく、悔やんでも悔やみきれないが……

「9S!! 先に入って調査してくれ! また敵が増えてきた!!」

A2の声に意識が戻される。さつきより強化されたような機械生命体があふれてくる。この数はさすがにA2といえどと思うが

「侵入を防がないと挟み撃ちになる! 早く行け!」

「わかった……!」

出来れば二人を巻き来れない場所に連れて行きたかったが、そんな余裕もなく僕は二人を置いて先に行く

「A2ちゃんと来いよ!」

「そつちこそハマするな!」

徹底的に調べてやる……それがスキャナーモデルの僕の仕事だ。そう決意を胸に塔の中へ入っていった

塔の方から強い光が見えてやっと扉が開いたようだ。ポッドから自爆が必要とか意味不明な情報が流れたが、9Sがなんか適当にやっただろう。こっちはこっちで敵がどんどん増えてそっちに行けない

「そっちこそハマするな！」

出来れば同時に入りたかったが、こいつらを掃除しないと後ろから攻撃される。少々きついが何とかなると判断し、9Sに塔へ先へ入ってもらうことにした。あいつのことだ。ちゃんと調べて、私に楽をさせてくれるだろう。そういう目論見もあつて、そのまま戦闘を続けているとようやく終わりが見えた。

外に戦力を裂く余裕がなくなつたのか、必要ないと判断されたのかわからないが、ひとまずは終わつた

私も続いて入ろうとすると……

「デボル……ポボル……」

動かなくなつた二人のアンドロイドを見つける。あの光はこの二人の仕業だったのか……

「……負傷を治す衛生班が、最初に死ぬって……バカだろう……」

「推測：塔攻略に置いて最良の選択」

「……死ぬのが最良なんて……アホ言うな……」

動かなくなった二人の手をつないでやり、私も中へと向かう。結構時間がたったからここで合流できるかわからないが急ごう

「ポッド……アジトへ、二人の死亡の報告を」

「了解」

「二人は……最高の仕事をしたと……」

「……了解」

1D1と1P1になんて言ったらいいかわからないが、決着がついたらきちんと話そう。必ずだ

今一度2Bより預かった武器を握りしめ私も先へ進む

ここで決着がつくと信じて

眞実のカケラ

後ろの激しい音を気にしながら、塔の中へ進んでいく。入ってすぐエレベーターに乗り込み、上へ向かう

「デボル、ポポルの残存データを確認しますか？」

「うん」

そこにあつたのは、お世辞にもいい思い出ではなかった。旧時代、マスターが生きていた時代より少し後。彼女達は人類の監視者として作られていた。ただその時には「人類」と呼べる存在はなく、体と魂に分けられていたと言う。そして、彼女の同系機のミスにより二度と戻らなくなってしまう、その時人類の滅亡が決定してしまった

その致命的なミスを繰り返さないために、本人ではない同系機の彼女達へ罪の意識を植えつけ、他のアンドロイドはそんな人類を滅ぼした彼女たちを憎悪した

その結果、彼女達はどこへ行つても迫害を受け、アンドロイドの集落を転々としていた。お互いを支え合い、お互いに死を意識した時ようやくアネモネのアジトへと到着。

それでさっきの「償う」って言葉になるのか……

「疑問。デボル、ポポル両名はなぜ、二人で死ぬ事を考えたのか？ データからは単独離

脱は可能でそれにより……」

「ポッド……君にわからない事を祈る」

「了解」

きつとそれも「罰」の一つなんだろう。お互いが監視して、片方が逃げようとすれば……でも、きつと違う。二人でいる時のあの雰囲気はきつと違う……そう思う

エレベーターも止まり通路に出た。中は、白い大理石のようなものでできており、虫食いがある階段で上へ上る構造だ。予想と違って敵の襲撃が無いと思っていたが、そんなに甘くはない。しかも

「汚染されたヨルハ機体!?!」

降下作戦後、行方不明になっていたメンバーが襲つて来た。相変わらず下品な言葉でこつちに向かつてくる

「提案：破損させず機能停止」

「そんな無茶な!?!」

向こうは遠慮なんかせず襲つてくる。それを機能停止だけ狙うなんて無理がすぎる。

一人目は残念ながらそんな器用な事は出来ず、ポッドの射撃と僕の攻撃で破壊した

「9 S。次は確保を推奨」

「なんでそんな無謀な話を……」

「今後の9S達の修繕、改修に必要と判断」

「ああ……そういう……」

確かに、今後もし手足の破損などが出た場合修復は出来ない。その時の予備としてつて事か……地味に残酷な事を考えるな

「もしくは、ハッキングにて治療、回復」

「それは……きついな」

以前、オペレーターさんこと21Bさんを治療出来たのは、A2が抑えてくれていたからであって、戦闘中にウイルスを駆除しつつ、自分の感染を抑えるというのは正直無理だと思う

ヨルハ部隊はあまり数が残っていないのか集団で来る事はなかったが、それでも強敵なのは変わりない。

ポッドの言う通り確保を試みるが、やはり無理だった。手足を狙って行動不能を期待するも、動かなくなろうがおかまいなし。運良く心臓を貫いても数秒後に爆発と、どうにもならなかった

『こんにちは！ 塔システムサービスです！』

入り口で響いた女性とも男の子ともれる甲高い声が聞こえる

『最後のサブユニットを解除した来場者様へは、ファイナルワン賞をご用意しております』

す』

「一体なんだってんだ……」

初めて塔に接触した時、なぜかヒントをくれたこの声。しかし、実際に入るためには誰かの犠牲が必要だったことから善意のほすがない。そんな案内に少しイラつきながら進むと、大きな扉が現れた。おそらくここが「用意」している場所だろう

「……敵の誘導と見れる行動……予想……畏」

「だろうね……でも、いかないと」

ゆっくり扉を開けると、中は薄暗く広い部屋のような構造だった。注意して中に入ると、上から何か降ってきた。すぐに戦闘態勢をとるが出現した敵に驚く

「2B……タイプ……?」

出てきた10数体の敵は、全部2Bと同じ機体で、一目見ればまったく同じに見える。どうするか一瞬迷ったが込み上げてきたのは怒りだった。僕の友人であり、マスターの大事な人。それをこういう風利用することに。

彼女たちが襲い掛かってくる。しかし、戦ってわかる。しよせんそれは「2Bの形」をしただけだ。それでも攻撃を当てる時に戸惑うことがある。何とか一体だけでも確保できれば……そんな事を考えるが、戦闘データはヨルハ機体の物を使っているのかスキはない。

一体、また一体と行動不能には出来ても、自爆機能でもついているのか機体の確保は出来なかった。

そして最後の機体にとどめを刺した瞬間、「ソレ」は爆発した

「うわ!!」

爆発に巻き込まれ、僕の視界は白く閉ざされた

デボル、ポポルを弔う間もなく私も中に入る。先行した9Sとは大分離されただろうか？ 少し心配しつつ入ったすぐのエレベーターで上に登る

エレベーターから降りると左右にうねった白い階段が続いている

「とどころどころ、爆発後や何か部品のようなの……う？」

「予想……先行した9Sの戦闘跡」

「ふ……私が露払いをされるなんてな」

彼の死体を無い事を祈りつつ、中央が大きくくぼんだ部屋を抜けるて進むと、やけに大きな扉が出てきた。その扉は簡単に開き中に入ると広く、整理された空間が広がっていた

「なんだ……？ へこは？」

「予測……図書館を模した施設」

「としよ、かん？　なんだそれは？」

「過去の人類が建設した、情報保存施設」

確かこれは「本」とかいうやつだな。それが壁一面にぎっしり詰められている。近づくとその本は取ることはできず、只の見た目で中を見るにはハッキングで出来るようだった

「ポッド」

「ヨルハ機体A2にハッキング権限を付与」

「よし……」

かたっぱしから……するには時間が無さすぎる、目についたものをとにかく見て行こう

見ていくと、おかしい情報がいくつも出てきた。アダムやイブと言った機械生命体の情報は当たり前だが、ヨルハ部隊でさえ見たことのない、月面の人類サーバーの記録。過去の人類の記録。そして

「ヨルハ計画における二号モデルの、運用概略？」

なんで、私達の部隊のデータまで……すごく気になり、そのデータを見るとそこには私の想像の上の運用方法だった。驚いたのもつかの間、上から何か聞こえたと思うと天井が崩れ巨大な何かが降ってきた

『ハツハツハハハ。コロス……コワス』

「なんだ!? こいつは!？」

巨大なボールのような機械生命体。その声は男と女が二人同時にしゃべっているようで、発声機関が壊れているのか? と思うほどだ。しかし、狭い空間ではそいつも思ったように動けなかったのか、ある程度ダメージを与えたと思ったら入ってきた入口から出て行った

私も先に進むべく、部屋に入った時に最初に見えていた扉から図書館を脱出。壁に装飾の施された廊下を進むと、目立つように「コンソール」のようなものがあつた。それに不用意に触れたのが間違いだつた。ハッキングをしている……いや「されている」状態に陥ってしまった

「クソツ……」

「敵のハッキング攻撃。推奨：早急な離脱」

「わかつてる!」

普段のハッキングは、自分の分身を送り込み、空から見下ろすような感覚だが、今は自分の視線で進んでいる。特に通路は長くなくすぐに行き止まりに着いた……が

「貴様は……」

赤いワンピースを着た少女。しかし、その声はその姿からは予想できないほど低く男

の声だ

「久しぶりだな……二号。いや、今はA2と呼ぶべきか？」

こいつとは、昔会ったことがある……そう「昔」に

「私達のような概念情報にとつて、時間の意味はないが懐かしいよ……君たちの部隊を全滅させたことは」

アタッカー二号として地球で戦っていた時。こいつらによつて私の部隊は全滅させられた

「正式採用される「ヨルハ」のために生み出された、捨て石の部隊」

「うるさいー！」

相手の言葉と存在を否定するために攻撃する。少女の姿をしたそれは、一度の攻撃で霧散するが、手ごたえが無い。消えては現れ、消えては現れを繰り返し、どんなに攻撃してもそれは続く

「私達は殺せない……そう言ったはずだが？」

「クソツ……」

攻撃が当たれば消える。それは確かだが当たっているというより、避けられているようにも見える。さつきまでは空間には2人以上出なかつたが、3人、4人と増えていき、私の攻撃スピードをどんどん上回ってくる。

「提案：敵の論理学習機能を利用して弱点の形成」

「全然わからない！」

「疑問：ヨルハ機体A2の学習機能」

「私の手助けなのか、茶化すのかどっちなんだ！」

「敵の論理思考をインタラプトして、演算を遅延させる作戦」

「つまり!？」

「敵への攻撃、破壊をしてはいけない」

「はあ!？」

「ここにきて、敵を倒さない事が倒す条件？　なんだそれ!？」

「敵が一定数、一定時間存在することが条件」

確かに、このまま倒し続けてもじり貧だ……倒すこと自体はなんとかなるから、ひとまずこいつを信じてみるか。そうしてこちらが攻撃をやめると、増殖するスピードが上がりつつ来た

「敵自我データ飽和率30パーセント」

こっちが攻撃しなくても、敵の攻撃は続く。数が増えればもちろん攻撃の数も増えるから、躲すのがだんだんきつくなる

空間は決して広くない。それでもなんとか躲し続ければ「60パーセント」とポッド

が言う

「人類が残したアンドロイドが、まるで人類になりたいかのように振る舞う。エイリアンが残した機械生命体も、まったく同じように振る舞う。私たちは似ている……」

……違うな……お前のように、自分のためだけに行動するヤツと、子供を殺した私に對して、その憎しみを抑えて許してくれた主。あの人の優しさだけは違う

「だが、ネットワーク化された私達のほうが優れている」

奴が話を続ける……なぜ抵抗するのか？ あきらめて死ぬことが、終末ではないのか？ 理屈ばかりこねてくる。

「敵の自我データ飽和率90パーセント」

周りの空間に、巨大な少女の影が出てきた。

「私達こそが、完成させられた精神のありようなのだ……私たちは進む、先に、未来に……」
「生命の多様性を学習」

まだなのか……？ 攻撃そのものはまだ避けられるが、このままだと本当に勝てるのか怪しくなってくる

「自我データ飽和率100パーセント。予測、敵自我が分裂を開始」

攻撃が当たりそうになり、まずい！ と思った瞬間、敵の影がすべて消えた

目の前に赤い服の少女二人が、お互いに見つめ合うように立っている

「我々には敵が必要だ。このアンドロイドを残しておけば、さらなる困難が訪れる」

「敵は危険だ。このアンドロイドは排除すべき」

「その困難を乗り越えれば、我々はさらに進化できる」

「こちらが破壊される可能性は排除すべきだ」

二人の少女が静かに見つめ合う

「我々の勝利を疑う存在は……敵だ」

「勝てると思っているのか？」

片方の顔が、醜く笑ったようにゆがむと二人が攻撃しだした。さっきまで引つ込んでいた他の赤い服の少女も、どんどん現れるが、お互いに攻撃し合ってつぶし合っている
「報告：飽和した自我がお互いに闘争を開始」

「は……まるで……まるで……」

増えた人類が、お互いの意見が合わないから殺し合う……主を連れてこなくて正解だな。この戦闘内容は報告しないでおこう……。どんどん、減っていく赤い服の少女。最後の一体を私が倒した時、ハッキングが終了した

さっき触ったコンソールがスイッチになつていたのか、乗っている床がエレベーターのように上昇を開始。すると、さっき逃げた丸い機械生命体が再度現れた

「しつこいのか、潔いのかどっちだよ!？」

そんな悪態をつきつつ迎撃を開始。さつきと比べると動作が遅く感じるが、腑に落ちない。さつきの赤い少女がこいつらの親玉で、あいつがいなくなつたから、機械生命体が動かないんじゃないのか？

「予測；敵サーバーの残存データによるもの」

「結局、全部倒せつてことか……！」

さつきは殺すだ壊すだ言っていたが、今度はさらにわけのわからない事をしゃべる。二つの砲台を壊し、本体に攻撃を加えると動く床から離れまた逃走した。

「一体……なんなんだ……」

そのまま斜めに登る床に残り、降りることも出来ないので呆然とする。

「次は何が来るんだか……」

そう言いつつ警戒は怠らず、軽くメンテナンスを行い次に備える。もう少して終わるはず……そして帰るんだ……そんな思いを胸に再度武器を握りしめる

始まりが終わり、終わりが始まりで

時間は少し遡る。

「うう……あ……」

何が起こった？ 2Bの偽物と戦って、自爆に巻き込まれて……

「うぐう……ああ」

左腕が破損してる……ダメージを理解するためにある痛覚の信号が、肘から先が無くなったことを知らせてくる

とっさに左手を出してかばったため、なんとか左手の破損だけで済んだが、これでは戦闘が厳しい。一度アジトに戻るか？ A2が来るまでここで待つか？

腕の痛みのせいで考えがまとまらず、横になった姿勢のまま寝返りとうつと予想外のものが目に入った

「な!?! 2B!?!」

思わず離れるためにゴロゴロと転がる。

「……動かない?」

「不明……機能停止の理由」

「ポッド……」

時間差で爆発でもするのか？ 全部倒したと思ったが、残っていたのか？ スキャンをしてみると爆発物の検知はないから、多分爆発しないはず

「提案：破損した左腕の移植」

「あ……」

まさか、さっきの話がここでいきなり出るとは思わなかった。A2からの通信もないから合流は難しいのかもしれない。戻るとしても、帰り道に敵が出ないとも限らない以上、腕の修復は必要になる

「……試してみるか」

偽2Bに近づき、左腕を掴んでみる。全く反応が無いが見た目は2Bそのもののため、この左腕をもぐのはためらわれる。

目をつむり、力を入れて左腕を引っ張ると、めきめきといういやな音と共に思った以上あつさり左腕が取れた。意を決して自分の左ひじにその腕を「接続」すると、はじかれるような熱い感覚が接続部位から来る

「うう……ああああ……」

せめて、デボルかポボルがいればもう少しマシだったかもしれないが、多分、この苦痛は他でも起こると思う。これは、これでいい情報なので、残しておこう。なんて、左

腕の苦痛を感じながらどこか冷静に考えていると移植はなんとか終わった

「警告：汚染機体からの部品移植により、ウイルスの検知を確認」

「やっぱり、ただの親切じゃないってことか……」

入口の件しかり、さっきの件しかり。どうもこの塔は期待を持たせてから突き落とすのが好きみたいだ。悪趣味な……

「推奨：自己ハッキングおよび、ウイルスの除去」

「了解……」

倒れている柱の陰に隠れて、ウイルスの除去を試みる。さすがに、物理的な接触ではワクチンも効き目がなかったのかな？　こういう時、自分がスキャナーモデルでよかったですと思う

数が多く、少々手こずったが除去は完了した

「ウイルスの除去を確認。現在の運動能力は95パーセント」

多少違和感はあるけれど、何とか戦えるレベルにまで復旧したと思う。さっき戦っていたところと別の場所になっているのによっと気が付いた。それでも先に進むしかないから、多分出口と思えるところから脱出。

一本道を進んでいくと、また部屋の入口のようなところが見えた。そこに行くしかないと思ひ、近づくとその入り口が急に閉じてしまった。閉じた入口の前に、赤い服を着

た少女の映像？　が出てきて、「あの声」が聞こえる

「ヨルハ機体9S……ヨルハ機体9S……ようこそ！　塔へ！」

「何が、ようこそだ……」

今までさんざんおちよくられて、正直うんざりしていたこの声。その正体は僕より小柄な少女が正体のようだ

「ここまでたどり着いた貴様に、耳寄りな情報があります」

……ん？　今、最後のほう声が……？

「この場にいる、機械生命体を全滅させたら、教えてやろう」

声が、少女のような高い声から、急に低い男の声に変わった。少女？　が消えると、今まで何度も倒してきた機械生命体が出現。数は多かったがさほど苦労することなく全部撃破することが出来た

「全て壊したな……全て壊したな……約束通り、情報を見せてやろう」

こいつの言う「情報」にどんな価値があるかわからないが、くれるというのならみてやろうじゃないか。そして、データが僕に転送された

『極秘。ヨルハ部隊廃棄について』

「これが……ヨルハ計画……、じゃあ、僕たちや2B、A2のみんなは……」

「全てを知ってもなお、戦う事を望むか？」

「だまれ!!」

少女に斬りつける。それは映像のようにすぐ消えて斬った感触はなかった。僕たちの未来は決まっていた……、いや、決められていた。胸の奥がざわざわとうごめく。

「私達は、機械生命体のネットワークより生れた概念人格……攻撃は無意味だ。貴様の存在は、無意味だ」

「違う!!」

今まで感じた事のない、胸のざわつきがどんどん大きくなっていく。マスターが頑張って2B達と人類を取り戻すために頑張っている。その環境を作るための僕たちの戦いが無意味だと? 絶対違う!

さつき閉じた壁が開いて先に進むと、かなり開けた空間に出た。すると今度は飛行ユニットが飛んできた。多分操縦しているのは汚染されたヨルハ部隊。数体出てきたそれらを撃撃し、オーバーヒートしたのか何体か動きを止めた。操縦席に乗って止まっているアンドロイドを力任せに引きはがし、乗り込んでシステムチェックを行う。僕が乗ったやつは運よく停止しただけでまだ動きそうだ。このままチマチマ中を登っていてももちが開かない。これで外から一気に登ってやると思い飛行ユニットを起動、そして飛び立った

塔の外周部から頂上をめざす。さすがに無防備じゃなく、相手も航空戦力で迎撃してくる。だが、これも今まで戦ってきた連中と同じのため難なく倒せていたが、急に巨大なボールのような機械生命体が現れた

『信じてた、シンジテタ、死んじ……神にナツタカミニナツタ、誰がなった？』

不明瞭な言葉を発するその巨大なそれに攻撃を加えていると、破壊する前に離脱されてしまった。しかし、さつきまでとはあいつらの行動がおかしい。少なくとも、ここまですべてランダムに選ぶような事はなかったはずだ？ 何か大きな変化があったのか、状況がつかめないまま頂上へ目指す

「今度は小さいのか!？」

あのでかいのが逃げて、上へ上り続ける床へ乗っていると、次の敵はアジトの外でよく見かけたタイプの機械生命体が襲ってきた。

飛んでいる奴は多少堅かったが、何の問題もない。しかし、まだこんなに残っているとは……さつき私が「アイツ」を倒して、司令塔は無くなっただけだ……こんなところでやられるわけにはいかない。一体どこまで連れて行くつもりか知らないが、徹底的に付き合ってやろうじゃないか。

敵の増援はそこまで多くなく、すぐに止まった。しかし、床の上昇は止まらない。周

りの様子をうかがうと何か瓦礫が宙を舞っていた

「あのガレキは……?」

「不明。何かの資材にする可能性」

そんな事に気を取られていると、またあのでかいやつが襲い掛かってきた。さつき私
が壊したと思っていた触手型の砲台から攻撃を繰り返して来る。高出力のレーザーで
薙ぎ払ってきたり、砲台で攻撃を繰り返すが、やはり動きがどこか遅い。油断せず攻撃
をかわし、相手にダメージを与えていく

さつき逃げた大きいヤツがすぐ戻ってきた。援軍として何体か機械生命体を連れて
きたが、敵ではない

『命を奪う、イノチをウバうんだ』

「! させない!!」

それは機械生命体の本能なのか? 相手を殺す事しか考えないなんて……こいつは
危険だ。確実に仕留めないとマスターや2Bが危ない。僕が殺す!

『大切なモノを失う……壊れた。だからお前たちも壊す』

以前戦ったイブの事をふと思ひ出した。あいつは確かに、兄を殺された憎しみで戦っ
ていた。こいつらと同じ感情が? だからと言って同情でやられるわけにはいかない。

ここは、やるかやられるか。僕にだって負けられない理由がある

どのくらい登ったかわからないが、奴が塔の中へ入っていった。そのまま追うと平らで広い空間が広がっていた。ここで迎え撃とうって算段なのか？ そう思いつつ、こちらでも決着をつけるつもりで挑む

『星に向かおう、歌を歌おう、ササゲル今』

戦闘の最中だというのに、相変わらず関係無い事をしゃべる。何か記憶の混雑でもしているのか？

『僕たちは機械生命体、君達はアンドロイド、私達は敵同士、戦う運命』

……そんな当たり前の事を。と思うがパスカルやさつき戦った偽2Bの事を考える。機械生命体なのに仲良くできているパスカル。見た目はアンドロイドなのに、中身が無いため戦った偽2B。敵ってなんだろう？

『君はなぜ存在するのか？ 僕達はなぜ存在するのか……僕たちは空へ飛ぶんだ』

また奴が逃げた。さつき入ってきたところから塔の外壁へ出ていく。僕もそれを追って外にでて、また上昇を続ける……考えるのは後だ今度こそ壊してやる

ついに上昇する床がとまり、そいつを追い詰めることが出来た。すると、「もう一個」同じ塊が飛んできた。ついでに9Sも

「……遅かったな」

「……君ねえ」

「なんだか嬉しくて、前と同じ挨拶をする。だが、合流した嬉しさもつかの間、私が追いつめたソレと、飛んできた同じ奴が合体した！」

「なんだ!?! こいつは!?!」

「君こそ! 戦ってたんじやないのか!?!」

合体したそれは、さっきまでとは違い軽快に私達相手に戦う。一人だどちよつとしんどかったけど、やっぱり誰かと戦うのは何だが気が楽だ。そんな不謹慎とも思える事だったが、実際決着はすぐについた。私の斬撃で奴が合体した部分を切り裂き、9Sがポッドに命じて射撃。無事撃破出来た

「9S、無事……だったみたいだな」

「……」

「多分、これでこの戦いは終わりだ。後はこの塔を破壊すれば戻れる」

「A2……僕たちはなんだったんだろう……?」

「9S……?」

「長時間戦闘によるオーバーヒートか? 9Sが変なことをしやべりだす」

「僕達ヨルハ部隊は、すでに滅んだ人類の存続をごまかすために作られた部隊」

「それは……」

私自身、さっきの赤いアイツに言われて実感した。私たちはヨルハ部隊を作るための実験部隊。そのため「死ぬことが決定」していた

「だから、僕達はすべての証拠隠滅のため、死ななきゃいけない……」

「お。おい……」

おかしい。私に斬りかかってきたときでも、こんな状態じゃなかったはずだ……一体……

「マスターがいる、いない、じゃない。僕達はシヌ存在……」

9Sがゆっくりアイマスクを外すと、その瞳は「赤く」光っていた

「お前！ 感染して!?!」

「ヲヲヲヲ!!」

9Sが斬りかかってくる。スキヤナーモデルとは言えここまで戦ってきた経験値は本物だ。私も油断すればやられる

「バカな!?! ワクチンがあつてなぜ!?!」

「予想：左腕、別部品による接触感染」

「何?!!」

9Sへ攻撃しないようになんとか捌きながら左腕をみると、確かに入った時と別の腕

が付いていた。ワクチンが優秀でも、永続的に接触してれば漏れも出てくるってのか？

「A2ウウウウ！ サア！ 死ネバ！ ゼンブ終ワリだああ!!」

機械生命体と戦っていた時とは違い、やたらめつたら武器を振る。逆に捌きやすくなったが、それでもこいつを止めるのは一苦労だ……最悪私も危ない。肝心の向こうのポッドも、なんらかの影響を受けているのか攻撃はしてこないが、9Sを止める事は出来ないようだ。

一瞬、最悪の事態を頭がよぎった。入口であの二人を犠牲にしておきながらさらに……そんな事を考えてためらってしまったことに、私の反応が遅れてしまった

「シネエエエエエー！」

「……しまつ……」

武器を私に向けて真っ直ぐ突っ込んでくる9S。避ける方向も方法もないと覚悟した時

『やめなさい！ 9S』

私達二人とは違う別の声が響いた。9Sの刃は私の胸の直前で止まり、私は死なずに済んだ。でもさっきの声は一体……9Sとさっきの塊が飛んできた方向から何かが来た。あれは……ヨルハの飛行ユニット？ それから一体のアンドロイドが離脱して私

たちの近くに降りてきた。

「だから、定期連絡は必須だと言いましたよね？ 9S」

「アアウウ……オペレーターさん……」

「……21Bか？」

ウイルスに侵食されていて、突入作戦の時にはまだ寝ていたはずだが……？

「A2!! 彼を抑えてください！」

「あ、ああー！」

あの時と逆に、今度は9Sを羽交い絞めする。21Bの乱入により動きが止まっていたが、私を抑えるとそれに抵抗しだす

「僕たちは、シヌタメニウマレタンだあああ」

「じゃあ、私にも死ねと命じますか？ 9S？」

「アア……」

「それが本当に運命なら、使命なら仕方がないかもしれませんが。でも、貴方達は一か八かで私を助けてくれました。なぜですか？」

「殺シタクなかつたアアア」

「それでいいんです……」

21Bが抑えている9Sへゆっくり近づいていく。

「我々アンドロイドは、感情を持つことを禁止されている。それはきつと、作戦のため
にって事だと思います」

21Bが9Sの頭に手を置き、ハッキングの準備に入る

「でも、私は貴方に助けて貰って『嬉しかった』この感情だけは、誰にも渡したくありま
せん。それに……」

21Bの手に光りが収束する、ハッキングが始まつてる証拠だ

「人類はいます。つまり「ヨルハ計画」はもういいんです……9S」

私も目をつむるくらい強い光になり、一瞬視界が遮られると、9Sの体から力が抜け
た

「……ワクチンの投与、完了です。今度こそウィルスの完全除去終了いたしました」

21Bの声が消えて、今度こそ終わったと安心した

9Sが21Bに膝枕をされて寝ている。塔の崩壊がゆっくり続いていくから早く脱
出の段取りを取ったほうがいい。ここまで自動で連れてこられたから、正直方法に悩む
が……

「提案：塔の破壊作戦の変更」

「何をいまさら……箱？」

私についてきてくれていたポッドが今更な事を言い出す。それに続いて9Sに付いていたポッドが言う

「9Sの左腕移植成功の事を鑑みて、この塔をアンドロイドの補修部品製造工場として掌握、管理を提案」

あー……戦ってる時、一瞬しか見てなかったが、確かに女物の腕に変わってるな。……こいつ無茶しやがって。今後、補給基地があれば私達も余裕が出来る。何せメンテナンスのフィルター一個手に入れるのにも苦労したもんな……

「でも、どうやるんだ？ 管理人というか、ボスはもうすでに消したぞ？」
多分、管理していたのはあの赤い少女だ。あいつがいなくなると、維持が出来なくなったから、今崩れているはず。

「私がやりましょう」

「21B？」

「私はもともとオペレーターモデルです。こういった管理、運営には向いています」
確かに、私らアタッカーモデルより向いていると思うが……可能なのか？

「それは……僕の仕事だと思います……」

「9S?」

寝ていると思っていた9Sが静かに答える。まだ体は動かないのか寝たまま続ける

「以前、イブとの直接接触で、一度ネットワークに情報を残したことがありました。その痕跡を追えば、僕の方が適任です」

「しかし！ それは！ ……」

ん？ 21Bがなぜか声を荒げている。何か不都合があるのか？

「この『塔』から離れることが出来なくなりませう」

「これだけの規模の施設だからね……」

……あの赤い少女が、概念だとか、情報だとか言ってたけど、逆をかえせば「そんならざるを得なかった」って事なのか？

「オペレーターさんには、万が一僕がおかしくなった時のストッパーとしていてください。」

『今回』みたいな」

確かに、そういう事態を想定するのは大事だ。でも、こいつの言いぶりだとやっぱここに一生いるつもりか……

「なら。私もここにいます」

「な!?!」

……おやおや？ なーんだか変な話になってきたな？ 早く脱出しないといけないのはわかっているが、ちょっと楽しくなってきた

「万が一と言いましたが、離れているとその対応も遅れます」

「ま、まあ……」

「大体、貴方は報告は遅れる、返事は適當、その他言い出したらキリがありません」

「う、うん……」

すまん9S。私は笑いをこらえるので忙しい……

「何より……貴方の傍にいたくて戦闘型に換装した意味がありません」

「え……」

「私は、貴方の傍にいます」

「決定までの時間制限がせまっています」

ポッドの無慈悲な報告が入り、二人ははっとしてお互いの顔をそらす。何と云うか、楽しいねえ。……今度主に同じ雰囲気で迫ってみようか？

「で？ どうする9S。塔をこのまま破壊すれば、今までと同じように主や21Bと外で暮らせる」

「……………」

「ここに残れば21Bと暮らせる」

「それは、言い方としてどうかと」

21Bの照れ隠し？ なツツコミはさておき

「お前が決めていいよ。私はどっちでもいい」

「僕は……」

静かに崩れていく塔の中で、死に物狂いで戦った苦しさを忘れさせてくれる暖かい話
彼の決定はきつと……

エピソード前編

ザクザク……とクワを地面に振りかざして畑を耕す。本当は外に出て他の人達と一緒に狩りに出かけたけれど、まだ子供と言う事と『唯一の』男の子という事で過保護に扱われてる。

僕の名前は「ホープ・H・12」15年前に生まれた、村で初めての男だ。

アジトと呼ばれるこの村は沢山の人々が住んでいる。正確な人数は知らないが、みんな親戚で、僕と長老と呼ばれる「父さん」以外全員女性だ。僕にももちろん母と姉が二人、妹が一人。あ、いや、この前生まれだから二人いる。

長老の側には「三女神」として3人の奥さんがいて、自分の家族に引けを取らないほどの美人でちよつと羨ましい。

「ホープー！ そろそろ面会だぞー！」

「あ、はい」

今日は15歳の誕生日で、成人としてみなされる。その為に女神様へ会いに行くのだ
「1D1さんすいません」

「おいしい。私の事は『デボル』と呼ばって言ったろ？」

「あー……ごめんなさい」

「いいって。『ポポル』の方も頼むぜ？」

「はい」

赤い髪色の家族は医療関係の技術が優れていて、村人の調子が悪い時は必ず相談が行くぐら이다。

僕がID1と呼んでしまった人と、その妹さんのIP1さんがみんなのまとめ役で、二人とも母親の名前を名乗っていると聞いた。

「じゃ、風呂に入って綺麗にしたら、アジトの出口だな」

「はい」

流石に、農作業して土まみれで会うわけにはいかないのです、風呂に入るため自宅へ帰る。

「ただいまー」

「ホープさん。おかえりなさい」

「あれ？ IP……ポポルさん」

「デボルね？ 名前の事？」

「あー……うん」

さつき言われた手前、気にかけていたが不意打ちでは無理だ。

「あら？ ホープ？ おかえり」

「母さんただいま」

「ではお母さん。『後は頼みます』わね」

「……はい」

なんだか母さんの顔が赤く、不覚にも色つぽいと思つてしまい、さつさと風呂へ向かった

風呂から上がり、いつもの作業着とは違う綺麗な服を着て家を出る時に「帰り待つてゐるわね」と言つた母さんと二番目の姉さんの顔が、半分寝ているようなところとした顔が印象的に残つた

出口に向かうと、デボルさんとポボルさんが待つていて

「よつし準備できたな。いくぞ」

デボルさんが剣を肩に担ぎ先導を切つてくれる。

「デボル？ 母さんでもそこまで雑じゃなかつたわよ？」

「何気にひどいな……ポボル……」

そんな二人のやりとりを見ながら向かうのは、昔、人間が今よりたくさんいた時代「買い物」をしていたと言うショッピングモールという建物。途中、野生動物やロボットに襲われたけど、二人は僕より強く簡単になぎ払つて進んでいた。

村を初めて出た僕に取っては見るもの全てが新鮮で、ビルという石の塊のような物や、綺麗にまつすぐ立った白い物、木も初めて見て色々面白かった。

そんな面白い旅も、最後の一本橋は怖かったけど……

着いたそこは、ビルの中身みたいだった。二階へ登る階段や、更に上へ続く建物。どうやってその上に行くかは分からなかったが、所々、女の人が見えた。

ここには長老こと父さんとその奥さん。Hーシリーズと呼ばれる女神様直系の家族が住んでいるそうだ。

そんな周りに圧倒されているとデボルさん呼ばれた

「おーい？ 今日の用事はこっちこっち」

呼ばれた方向に行くと、頑丈そうな鉄？ の扉があった。デボルさんがその扉の横の何かを押したら、鉄の扉が音を立てて左右に真つ二つに開いた

「……おほ……」

村のターミナルって言う機械も似た動きをしたが、目の前で起こるとびっくりする

「さ、行くわよ」

ポボルさんが僕の手を取って、開いた扉の中に連れて行く。中はそんなに広くはなく、3人が乗ると扉が閉まり、急に体が上から引つ張られるような不快な感覚に襲われた

「この感覚、慣れねえよな」

「自分で飛ぶ分には、なんともないのにね」

不快感は一瞬だったが二人はこの正体を知ってるみたいだ。

「この機械は、エレベーターつつてな、その、なんだ。下にどーんって運んでくれるヤツだ」

「上にも登れるわよ？」

そういう言えば記録で見た。自動昇降機械？ だっけかな。自分の記憶探っていると今度は上から押さえつけられるような感じがした

「お。ついたな」

デボルさんが言うのと扉がまた真ん中から開いた。そこは薄暗い空間だったが、地面には小さな明かりが無数にあり全く見えないうわけではなく、むしろ少し暗い空間だからこそ、地面の明かりがとても綺麗に見えた

「さ、あの小屋の所だ」

「地面の花、踏まないでね？」

言われて小さな明かりの正体が小さな花だと気が付く。とても小さく、白く、輝く花。ここだけが全ての空間から切り離されたような、夢の中にいるような気持ちになる

小屋までの道は花は咲いておらず、普通に歩いていけようになっていた。それは小屋と

いうより、頑丈なテントと言った作りで、入口は開放されており、そこに3人の女性が椅子に腰かけていた

「ん。よく来たなホープ」

一番スレンダーなA2様が、最初に声をかけてくれた。戦いの女神。僕が生れる前は今以上に戦闘が激しかったらしく、その中でずっと戦っておられた。

「村ではよく見かけましたが、ちゃんと話すのは初めてですね」

続いて、ホワイト様が言う。金色の長い髪をなびかせて、隣に住んでる親戚と同じ雰囲気を持つ方。何か困ったことがあった時の最終決定権を持つ、知恵の女神。色々村の子供たちに教えているのも見かけたことがある。

「これから、君の仕事を説明する」

そして、母によく似た雰囲気の2B様。比べるのはおかしいかもしれないけど、一番きれいな人だと思い、村に来るたびつい見とれてしまう。そしてこの方は「妊娠していない」時がなかった。A2様はいざという時のため子供はおらず、ホワイト様も大体お腹を大きくされているが、妊娠していない時もあった。だが2B様だけが、一度もお腹が引つ込んでいるのを見たことがなく、いつ生んでいるんだろう？ と不思議に思った。事実、今も大きなお腹をされており、多分もうすぐ生れそうな雰囲気だ。そんな方だからこそ、豊穡の女神と呼ばれるのだろう

「では貴方に、長老である私達の旦那様とその使命。そして、貴方のこれからを全部話します」

話のほとんどはホワイト様がしてくれた。だけど、正直意味がわからなかった。人間がほとんど滅んでいたりことや、そのために父さんが村中の人と子作りしてるとか、そして

「貴方には旦那様と共に子作りをしていただきますが……」

つい、生唾を飲んでしまう。情報でしか知らない事を実行するとはなんだか期待が膨らむ

「母親、姉、妹。と言った近いものを中心にお願ひします」

「……はい」

その理由は、自分の近親者じゃないと人間の遺伝子が弱くなって、男が生まれにくい。正直、話しかした事のないお隣さんや、失礼だけど2B様より十分考えられる「しばらくは1H1と2H1を補佐につけます。何か困った事があつたら娘達に言いな

「わかりました……それと、父さんは？」

「ここには3人しかおらず、てつきり父さんもいてると思った。

「旦那様は……ねえ？」

「主人なら『いつも通り』だ」

「??」

普段村で会っても「元気かー?」ぐらいしか話さない。どう言う事かと思っただけで娘達と子作りしている。……見学に行く?」

「……いえ。やめときます……」

何か、好奇心より「見てはいけない物」な気がして遠慮した。

恐怖の一本橋を越え、来た道に戻る。今度は1H1さん、2H1さんと一緒に5人だ。
「いきなりの話でびっくりした?」

1H1さんが道すがら聞いてくる。

「それは……一応、知識としてはありましたが、さすがに……」

「ああ、そつちじゃなくて人類滅亡の話」

「え? あ、ハイ……」

しまった……これでは子作りを楽しみにしてると思われてしまう……そうだけど

「いいことじゃねーか」

「そうね。そろそろ私達一家にも、男の子が出来そうだし」

「私はパパ以外と子作りなんて思い浮かばないですね」

『うんうん』

僕の父さん何者？　と思ひながら歩いていけると村に着いた。入り口には母さんと姉さんが迎えてくれて、デボルさん達4人にお礼を言うと、そそくさと連れて行かれてしまった。

「ホープ、改めてお誕生日おめでとう」

「ようやく大人の仲間入りだね」

みんなで食事する部屋に連れて行かれて、今現在。いつもより食事内容が豪華と云うか、肉が多いと云うか……

「そ、そう言えば、上姉と妹は？」

いつも一緒に食べている他の家族が姿を見せないのです、気になって聞いてみた。

「みんな、今日はお隣さんに預かってもらってます」

「え？　なんで？」

たまに、みんなで遊んでお泊まり会みたいなのはあつたけど、それとは違うはず……
「だって今日は……」

「ホープ？　お姉ちゃん達と……」

見送った時と同じように、半分寝ているようなとろーんとした二人の顔。しかし

『朝まで子作りするんですから』

その目の光はとても鋭かった

……翌朝、と言うか昼。父さんが様子を見に来てくれた。だけど……

「あちやー……やっぱこうなったか……」

「面目ありません……長老」

「つい、嬉しくて……」

「あだだ……父さん、こんな格好でごめん」

二人に一晩中種付けを誘われて、僕も気持ちよさと嬉しさで全部に答えていたら、腰が変な音を出して痛みで動けなかった

「まーなんだ。俺も通った道だし……これから慣れるって」

「父さんも？」

噂では、三日三晩、数十人に種付けしたとか、そんな話を聞いた父さんと僕との以外な共通に少しだけ嬉しくなった

「今日、一日はゆっくりしとけ」

「うん。と言うか動けないよ」

デボルさんとポ波尔さんも来ていたようで、僕の腰の調子と母さん、姉さんの様子も見に来たようだ

「おーっし二人とも無事着床」

「妊娠完了ね」

『やったー!』

みんながとても喜んでくれる。拍手しようと体を動かすが、やっぱり痛くて動けない
「さて、こつからが大事だぞ? なんせマスター以外の初めての子供だ」

「ええ。しばらくは注意深く観察しないと……」

「あら? きつと大丈夫よ」

1 H1さんが自信たつぷりに言う。それに2 H1さんも続く。

「パパの息子の子供ですから」

「……ちげえねえ」

みんながクスクス笑って、つられて僕も笑うけど腰に響く……

「ほらほら。『重症』患者がいるんだから、後は外だ」

そう言つて父さんがみんなを外へ促し、部屋には僕と父さんだけが残つた

「ホープ……ありがとうな」

「なんの事?」

「さあ? なんだろうな?」

そう静かに言うとう父さんも部屋から出て行つた。環境は変わつてないのに確かに変わった関係。不快感は一切なく、これからもみんなと仲良くして行きたい……

「ホープ！ 次私だからね!!」

「あだあ!!」

勢いよく部屋に入ってきた上姉が、腰を思いつきり叩くもんだからその痛みは凄まじく、僕は氣を失った

大分かかったな……。子供だけで言えばすでに100は越えている。父親として恥ずかしいが正確な人数は把握出来ていない。それでも俺を父として慕ってくれて、一杯子供を産んでくれて、ついにホープが産まれた。

これからはアイツに取られるのか……。とちよつと思つたが「アナタ？ 今日には前に種付けですよ？」

最愛の妻の一人2Bが、ベッド仰向けで足を広げて誘う……。大きなお腹をしたまま。

「しかし、妊娠周期をズラす事で、ボテ腹エツチをするとは……」

「ふふふ……ライブラリを見て少々興味がありました」

ここ10数年、2Bとの子作りはボテ腹状態でしかしていない。しかし、妊娠した状態でのセックスはさすがに何が起こるかわからないため、出した結論が、二つの子宮を交互に使う事だった。

そして何故か彼女もこのセックスにハマってしまい、いまに至る

お腹にあまり刺激を与えないように、ゆっくりゆっくり挿入する。正常位のように覆いかぶさる事は出来ないから、彼女の太ももを持ち上げ自分の太ももを下に入れる。後はこのままゆるゆると動き、心地よくもまったりとした時間を過ごす。

「アナタ？ もう少し動いても……」

チンポの抜き差しはほんの数センチ。そんな動きに心配したのか2Bが聞いてくるが、彼女は彼女でオマンコのうねりだけで快感を与えてくれる。返事代わりにおっぱいに口をつけて母乳を飲む。

直接的な気持ちよさはもとより、妊婦との倒錯したセックスは興奮を高めてくれる。妊婦に種付け、そう意識した瞬間射精が始まった。びゆく、びゆくと射精をしつつおっぱいからは口を離せない。そんな頭を2Bは抱きしめて撫でてくれる。

「確かに、物足りないといえ、物足りないな」

「え……？」

少し不安な顔をする2Bだが、俺の意味は違う

「1回や2回じゃ物足りない。10回が目標かな？」

「あ……10回と言わず100回でもいいですよ？」

「さ、さすがにそれは……」

ちよつと意地悪するつもりが、返されてしまった。萎えないチンポをそのまま抜か

ず、またゆるゆると動く。お互いの手をしっかりと繋ぎ次の射精に向けてまた気持ちよさを募らせる

「2B……愛してる」

「私もです……マスター……いえ、アナタ、愛してます」

言葉攻めつてあるのだろうか？ そんなに動いていないにもかかわらず、2Bその言葉でまた射精してしまった。

「あ、はあ……またあ……」

子種を注ぎ込まれる快感に、2Bの足が俺の腰に絡みついてくる。オマンコも締め付けてきて、今度は子宮口が龟头をくわえ込んできた。

「ずっと一緒にいよう」

「はい。一緒にいます……」

お互い見つめ合い、誓いの口付けとばかりにディープキスでむさぼりあう。息子はが子作りできる歳になり、嫉妬でもしたのか今日は全然萎えない。2Bの足のせいで俺は動けないが、彼女の腰が円を描いて動いてくれるから、また気持ちよくなってくる。

「本当に100回出来るかも？」

そう言った彼女の目は、肉食獣のそれに似てるな。なぜか他人事にとらえた

翌日、別の意味で腰が立たなくなった俺と、通信越しでホープとしやべる。あいつは

あいつで、上の姉に目一杯搾精されて動けなくなっていて、お互い苦笑いをしていた

こんな日が続いたら続いたで困るが、とても幸せだとおも

「お父さん！ 今日H2一家への種付けです！」

「何人だっけ？」

「えーつと……予定は10人？」

……幸せだよな？ 深くは考えないでおこう……

エピローグ後編

『現代』高層ビルが建ち並び、数多くの人が行き交う街。

深夜と言う程ではないが、十分に暮れた時間帯。そんな街で一際大きな建物にいろんな人が出入りしている「ナインズホテル」そんな部屋の一室で……

「あむ……じゆるじゆる。レロレロレロ……」

私のチンポを『娘』がフェラチオする。この子はこれが気に入っているのか、一度咥えると中々離してくれない。

私の方も体から力が抜けてリラックスした状態なり、近くに置いていたタブレットから、よく読んでいる絵本を読む。

何故かわからないが、この絵本がすごく気に入っていて、手持ち無沙汰になると、ふと思いついて読む

「せかいをもういちど」って言うタイトルで、その絵本は人類は一度滅び、それに嘆いた3人の女神様が世界におり立ち、自分達が子供を産んで、その子供と子作りを繰り返して人類を復活させた。って言う内容。その他昔の記録などをフラフラ見ていると……

「あむー」

「いでででで！」

急にチンポを噛まれた。

「もう……『パパ』？ ……ペロペロ。フェラ中に他の事しないでよー。あーん……かぶ」

「お前こそ、気に入らない事があつたらチンポを噛む癖やめなさい」

この子はいつもこうだ。機嫌がいい日も悪い日も、まずチンポをしゃぶってくる。噛むか激しくなるかは気分次第で、大体一回は噛まれる。

「せやで？ キズついて勃たんくなつたらどないするん？」

「『母さん』……」

部屋に備え付けのお風呂に入っていたもう一人の女性が出てきた。娘の長い銀髪とは別でボブカットで銀色の綺麗な髪。下着も着けずタオルで体を拭きながら出てくる姿は扇情的で、思わず見惚れてしまった

「あだだだ！ また噛む！」

「むー……ぶはっ。だってパパ、ママの裸見ておちんおちん更に大つきくなつたんだもん……」

自分でも気づかなかつた反応を、フェラしながら分析しないでくれ……

「そら、普通『息子は母と子作り』するもんやもん。当たり前前の反応やで？」

「私だってもう二人産んでるから『お母さん』だもん！」

そんな屁理屈を言いながらまたチンポにむしゃぶりつく。今度は一切の加減なく頭を激しく動かして射精させるつもりだ。

「ええで、ええでー。ほーら息子の射精。うちに見せてえなー」

母さんが煽ると同時ぐらいに私が限界を迎える。

「んっふー！ おぐう……」

射精を感じた瞬間、チンポを根元まで飲み込んで喉で射精を受ける。

「んもう。いけずやわあ。わざわざ見せへんように、全部飲み込むなんて」

「んく……んく……んく……にー」

娘がしてやった、みたいな笑顔を向ける。射精が終わると「ぷはー」っと口からチンポを抜いた

「べーっだー！」

「そこまで意地悪することないだろう？」

口の端についた精液を指で掬い、何かで拭こうとしたら、ぱくつとその指がしゃぶられた

「ん……ちゅぶちゅぶ。ちゅちゅ……ちゆるちゆる」

母さんが一瞬の隙をついて私の指をしゃぶる。なんだか自分のチンポをなめられて

いるような錯覚がするぐらい気持ちいい。

「むー！　またママでおちんちんおつきくなつた！」

射精すればもちろん萎える。しかし、その萎える間も惜しむぐらいすでにチンポはギンギンだ。

「パパ！　私が先だからね！」

ベッドに仰向けで寝て両手で足を大きく広げ、種付けをねだる娘。もう2児の母親なのだから、少しは落ち着いて欲しいものだ……

「ええよええよ。一滴でも中出ししてもらえたら、絶対妊娠するし」

「このホテルなら？　って都市伝説？」

このナインズホテルで子作りした家族は、絶対妊娠する。そんな噂が飛び交っている。確かにこのホテルは宿泊や食事といった施設ではなく、2、3時間部屋を借りて子作りする目的で作られている。その一つの目的のためかメンテナンスは行き届いており、何度来ても清潔で居心地がいい

「ほほほあ……？　早くう……」

自分で両足を抱え、仰向けから腰をあげ、まんぐり返しの姿勢になる。そんなエロい恰好にガマン出来るはずもなく、すぐに覆いかぶさり、真上からチンポで娘マンコを串刺しにするためそこにくつつけるが、相変わらず口はびったり閉じている。入口がわか

りにくい腰を進めると、閉じたマンコの口がすつと開いて先っぽをぱっくりくわえ込んだ。

体重をかけていくと、ずぬずぬと狭い道を別けて入って行く。二人も産んだとは思えない狭くしつかり握ってくる感触のマンコをかき分けて根元までねじ込んだ。

私の方が体格が一回り大きいせいで、娘の体はすっぽり隠れる形になる。その上に乗っかかったまま娘を下敷きにして腰をピストンする。腰の動きが早くなるが、娘は器用に受け止め声も大きくあえぐ。

そうして何度か腰を打ち付けるとすぐに限界が来て、そのまま娘の中へ射精する。

「うん!! ……あつつい……」

自分の足を持った姿勢のまま、流し込まれる精液にマンコが反応してぐにゅぐにゅと動く。まるで吸い上げてるようだ

「……っはぁ……」

つながったまま横にどきっと倒れこむ二人。はぁはぁと息が上がっていたが、少し休めば息は整った

「中出しされるの、最高……」

まるで酔ったような赤く、蕩けた顔をする娘。いつもならそのまま寝るか、もう何回かするが今日は違う

「ほーらー、はよおー次はうちやでえ?」

母さんが器用に私達を転がし、娘が上に乗る姿勢に変えて、娘を抱えてチンポを引き抜く。ちゅぽんと抜けたマンコからは、ほとんど精液が漏れてくることは無かった。

「ママあ……」

「さっきの仕返しやで?」

くすくすと笑う母。娘越しのため姿は見えないが、急にチンポが掴まれた。流石に二度の射精で力を失ったチンポを優しくにゆるにゆるとしごいてくれる。

「ママは、パパのパパと子作りしたらいいじゃない」

「あの人、ずーっとうちの事はほったらかしで、あんたのお姉ちゃんとはつかしてはる」
「いてて……」

そう言つて俺の太ももの内側を軽くつねる。……私を攻撃るのは何かの遺伝なのか?　と思つてしまう

「うちが産んだん、娘のアンタが最後やで?　ほーんま、お腹が寂しいわあー」

そういうえば、娘を産んだ後は確かにお腹を大きくしたのは見ていない。てつきり、父さんとしていると思つたが……家だと妊娠しないとか?

「なあ?　10数年ぶりのおチンポ。息子チンポで味わわせてえなあ」

母さんの独特のイントネーションの、甘ったるいおねだりに、チンポに何かがみなぎ

るのを感じた。

「きやん」

「あん」

急に勃起したものだから、母さんの手を離れ、抜けた娘のマンコにぱちんと当たってしまった。

「むー……」

「……嗚むなよ?」

さつきから母さんが絡むと、本当この子は機嫌が悪くなる。

「ほーら。少し横で休んどき? それとな、お父はんの大好きな体位教えてるさかい、機嫌直し?」

「え? 何々!」

母親に促され、俺の上からどいた娘。すると母さんがナメクジのように体を密着させな、足から、腰、胸へと上がって来て毛布のように私の上にのっかかった

「この子な? お乳でこうやって体をずりずりされるの、ほんま好きやねん」

「うー……ママには大きき勝てない」

「大ききやない。『お乳でする』のが好きやねん」

「へー……」

娘とは違い、母さんの体がぷにぷにと言うかとても柔らかく、特に巨乳というか爆乳の大きさのおっぱいで体をはいずり回られると、それだけでイってしまいそうになる。そうして、気持ちい布団に包まれてほうけていると、チンポの先っぽに何か熱いものが当たつてゐる感触がした

「よいしよつと……ええか？　うちの自慢の息子は、こうやって、騎乗位でガンガンに腰振つてあげると、めっさ喜ぶねん」

「パパ、いつも正常位かバック……」

「その……まあ……なんだ」

なんか娘に騎乗位でされるって言うのはなんだか恥ずかしく、まだやっていない

「ふふ……まあ、まだ機会はあるさかい。次？　な？　それより……」

M字開脚で大きく股を開き、私にまたが母さん。チンポをくにくにと自分のマンコに当てていつでも挿入できる姿勢をアピールしてくる

「なあ？　うちなあ？　まーだまだ、ものたりへんねん……」

「な、何が？」

「子・作・り」

にゆるんと先っぽだけ入れて、腰は円を描くように回す。そのまま私にしなだれかかってきて、母さんのおっぱいが私の胸板でつぶれて気持ちいい

「これからは、あんた専用の孕み袋になったるさかい、お願いやあ？　うち孕ませてえなあ……」

そう言いつつ、挿入を続ける母さん。耳からも母さんの甘く蕩ける言葉にすでに何か
が限界を越えていたみたいで、根元まで入った瞬間に射精が始まった

「あ……はあ……不思議やわあ……父親の子種もよかつたけど、息子の子種の方がじんわり広がってしみてくる……やっぱ、産んだ息子の方が気持ちいいなあ……」

母さんが上半身を起こし、私の上に座った状態でお腹を撫でている。そのお腹の下には私のチンポが入っており、撫でられる感触が感じられる。

「うわー……私も挿入して速射は、してもらったことないな……」

「う……」

なぜだかわからないがちよっと恥ずかしくなった。けど

「さすがうちの子や。少しでもはよう孕みたい母親の気持ち察して、すぐ出してくれるなんて……」

そんなつもりはなかったが、正直、母さんとの相性は恐ろしくいい。

「さ、こっから本番やで？　さつき言うた。これが……」

「あ……」

娘を作った時。私の初体験ともとれる母さんとの子作り……あの時は……

「うちのガチの腰振りや！」

体がぶつかる音が、パンパンではなく、スパパと聞こえそうなぐらいの高速の腰振り。娘の「おー！」という関心する声をよそに、そのまま抜かず母さんの中に2回出した。

まったく動いてないのになんだかへろへろになったところに、「私の方が一回足りない！」と言ってまた娘にチンポを嘔まれた

二人がまだ風呂に入っている間、またタブレットで記録を見ている。「一度人類が滅んだ」そんな記録もあるが、じゃあなぜ私達がいるんだろうか？ 何かの宗教の話か何かだろうと思う

「パパー？ また何か読んでるの？」

「なんやなんや？ なんかおもしろいのあったん？」

二人が体を拭きながら出てくる。私はさつき二人に洗ってもらい、のぼせそうだったので先にあがった。

「うん。まあ、よく見る「世界は滅んだー」とかだけど、なんか変な話があつて……」

「なにになに？」

体にタオルを巻いただけの娘がタブレットを覗き込んでくる。……もう今日は出来

ないと思うが、これはこれで……じゃなくて

「あ、ああ。ほら？　ここ「ケツコン」ってやつ」

「ふんふん……えーつと、『赤の他人が誓いを立てて、家族となり、子作りをする』……え、なにそれ……」

「さあ？」

「でも、それやと例えば、うちがお隣さんのパパさんや、学校のセンセと子作りするハメにならへん？」

「何それ……気持ち悪い……」

「うーん……なんだろな？　これ？」

まあ、神話でもアダムとイブはもともと他人で、その二人が子作りしたから人類が栄えたってあるから、その辺の解釈かな？　と自分勝手に結論付けた

「私はパパの子供以外産むなんて、想像できない……」

「それなあ？　息子見たら、ちよーつと変わるで？　うちみたいに」

「ええ？」

「早く乾かしてよ。もうすぐ時間だから」

『はい』

ある程度時間に融通が利くホテルでも、それに甘えるのは別問題だ。私達三人は支度

を済ませ足早にナインズホテルを出た

「パパーお腹空いた！　なんか食べて帰る？」

「おいおい……」

「うちも、ちよつと小腹空いたわー」

女性は強いな……でも、こんな時間にやっているのはラーメン屋とか居酒屋ぐらいだしな……とこの辺の食事処を頭の中で探していると、急に引つ張られた

「パパー！　あそこのラーメン食べたい！」

考え事をしているところに急に引つ張られるものだから、バランスを崩した時に、前から歩いて来ていた女性に肩がぶつかってしまった

「あー！　ごめんなさい……あれ？」

「ふふ……いえ。大丈夫です。では……」

大きな帽子をかぶった女性が会釈をして離れていく。私達と真逆の方向を、人ごみの中をすすると抜けていく。……気のせいだったのか？

「パパ？　さっきの妊婦さんどうかしたの？」

「ああ、いやその……さっきの人、目隠しをしていたように見えて……」

「気のせいちゃう？　目え隠してあんな風にするする歩けるなんて、ありえへんわあ」

「そうだよな……」

帽子をかぶった妊婦さんは、すでに見えなくなっていた。私にぶつかつたのもたまたまなんだろう。きつと帽子の影がそう見えたんだな。それにしても……

「なんだか、母さんによく似た人だつたな……」

じつくり顔を見たわけでないけど、なんとなくそんな気がした。娘に早く早くとせかされてラーメン屋に入る……ここ、結構重い所じやないか……胃もたれしないかな？
ともう食べることに関心が移ってから、さっきの妊婦さんの事は忘れてしまっていた

最終話 「ヨルハ・・・部隊」

私は、人の多い所を歩くのが好きだ。さっきのようにぶつかるのはまれだが、そういうアクシデントも楽しい

あの人が生きていた時代に、少しでも近くなつたのだろうか？ あの人との最後にな

るかもしれない子供をお腹に抱えつつ、「9Sホテル」^{ナインズ}へ向かう

もちろん、表ではなく裏の方だ。人目のつかない通路を歩き、一面真っ白の行き止まりに着く。そこに手を付けると

「……登録されたアンドロイドの信号を検知……おかえりなさい」

そんなアナウンスが『頭の中』に響き、何もなかったはずの壁が音もなく開く。私が入ると、また音もなく壁は閉じ、壁には何も残っていないかった

「奥様？ また外を散歩されておられたのですか？」

「最近楽しくてね……」

支配人の奥さんが、ちよつととげとげしい雰囲気と言う。

「もう……『今は産まれない』とはいえ、無理はしないでください」

「ええ。注意はしてる」

私達であれば、ちよつとやそつとじゃ、外からの力で産まれることは無いと思うけど、それでも大事に扱いたいのは同じだ

「みんなは？」

「いつものお部屋で、てれびを楽しんでおられます」

そう言えばあの人に聞いたことがあったな。外に出られない人とか旅行に行けない人が、記録を大きな画面で見ることを楽しめるとか……

「トウワン。いつもありがとう」

「いいえ。いつものことですから」

口元を隠しているが彼女の笑顔はそれでも伝わる。支配人が表に出られない以上苦労もあるだろうが、それを楽しんでやっているようで何よりだ

エレベーターに乗って最上階に向かう。そういえば、あの花があったのは逆に地下だったな……とふと昔を思い出すと、扉が開いた

「あー!!」そこは左の攻撃をさばいて投げられるかキメるだろうが！　なんで飛び込んだんだよ!？」

「もう……あんまり叫ぶとお腹の子が心配ですわ」

二人とも……というか片方だけテレビに夢中のようだ。かじりついているのはやはり昔ずつと戦っていたからだろうか？　格闘技というのを好んで見てみたいだ

「あら？ おかえり」

「ただいま」

「おはへりー」

「口に物を含んだまましゃべらない」

最上階は私たち専用の部屋で、『私達』以外がボタンを押しても来れないようになっている。と言っても広さはあの時の部屋と変わらないけど

「今日はなにか面白いことがあったか？」

「人が一杯だった」

「それでも、全盛期の10分の一……まだまだ時間がかかりますね」

「確か、男の数が足りないだっけ？」

「現在で2:8。最近3:7になったようですね」

それでも、あの人一人の時に比べれば本当ににぎやかになった。出来ればお腹の子の出番が無い事を祈る

「あの時流行った病気も再発してないですし、機械生命体も今やお手伝いロボットです。

このままいけば私達も静かに暮らしていけるでしょう」

「戦闘型の私にとっては微妙だけだな」

「君も妊娠してるのだから、控えた方がいい」

「はいはい……って本当、これ重いな……お前らよくこんなの抱えてたな」

「あら？ 幸せの重みです」

「……まあ否定はしねえけど」

私達三人とも、あの人の遺伝子を直接卵子に書き込み、息子をお腹に抱えている。戦闘型といった彼女は、私の二つの子宮で書き込んだ卵子の片方を移植したものだ。

「二度、滅んでしまった人類」

「あの時は旦那様がいたから、今がありますが」

「次も考えないとな」

万が一。あの時は色々なものが重なり、人類がいなくなってしまった。あの人が残ったのは本当に偶然。それに備えるべく私達は

「再度同じことが起こった場合」

「息子を産み、何度でも人類を復活させる」

お腹をさすりながら、来てほしくもなく、でも産まれてほしいという小さな矛盾を思う。この子を宿し1000年と少し。お腹にいてくれるという幸せは、やはり心が安らぐ。この子が生まれる時は、またあの時のように絶望の夜が続く。だから私達は

「どんなに暗い夜でも、いつかは明ける……」

「私達『ヨルハ部隊』改め」

「ヨルハアケル部隊……何度でも私達は人類を再生させます……アナタ……」
記憶の劣化はない私達。もう娘たちは全員死んでしまったけど、それでも、あの思い
出は苦しむ呪いでもなく、生き残る罰でもなく、明日の希望となっている
……マスター……いつか、また、お会いできると、信じております……